

定當時ニ於ケル起草者ノ意思カ犯罪ノ成立ニ付キ眞實ノ變換ヲ必要トスルニアリシトスルモ是レ唯タ起草者一個ノ見解タルニ止マリ之ヲ犯罪構成ノ要件トナサザリシ刑法ノ律意ナリトシ此ノ要件ヲ具備セサル文書ノ偽造變造ハ犯罪ヲ構成セサルモノト云フコトヲ得スシテ此點ハ文書偽造罪ノ性質ニ關スル學理上ノ觀念ヲ基本トシテ其ノ然ルヤ否ヤヲ決定セサル可ラス凡ソ文書ハ事實證明ノ具トシテ取引上重要ナル効力ヲ有シ諸般ノ取引ハ文書ノ包含スル證明ノ形式ニ對スル信用ニ依リ障得ナク行ハルモ其ノ取引ノ頻繁トナルニ從ヒ文書ハ益々其重要ノ度ヲ増加スルモノナリ而シテ文書ノ證明力ハ一ニ形式ノ上ニ存スルモノニシテ文書ノ形式ト其證明力トハ分離スヘカラサル關係ヲ有スルモノナレハ文書カ取引上證明ノ具トシテ眞ノ效用ヲ爲スカ爲メニ其形式ニ於テ不眞正ナル文書ハ取引上ニ於テ依據シ得ヘカラサルハ勿論ナルヲ以テ文書ノ形式的眞正ヲ害スル所爲ハ之ヲ信シテ取引ヲ爲ス人ヲシテ不測ノ損害ヲ蒙ラシメ引テ文書ノ信用ヲ毀損シ取引ノ安全ヲ害スルノ結果ヲ生スルモノナリ故ニ文書ノ形式ヲ保護シ文書ノ信用ヲ維持スルカ爲メニハ文書ノ眞正ヲ害スル偽造變造ノ所爲ニ對シテ刑罰ノ制裁ヲ付シ之ヲ禁壓スルノ必要アリ刑法カ信用ヲ害スル罪トシテ第四章中ニ官私文書ノ偽造變造ニ關スル犯罪ヲ規定セルハ全ク之レカ爲メニ外ナラサルヲ以テ文書ノ形式的眞正ヲ害スルノ所爲ハ其文書ノ證明スル事實關係

カ實體上ノ事實ト符合スルト否トニ拘ラヌ犯罪ヲ構成スルモノト云フニ在リ以テ判決ノ本領ヲ了解スヘシ

(參照) 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ(刑法第二百五條)

第一審 前橋地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 濱野定次郎 外二名

辯護人

鹽谷恒太郎  
花井卓藏  
新井要  
池田武夫

右公文書偽造變造行使被告事件ニ付キ明治三十八年二月十日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告等ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

第四點ハ我刑法ハ文書偽造罪ニ付形式主義ヲ排シテ佛國刑法ニ倣ヒ實質主義ヲ採レリ從テ我刑法ノ下ニ於テ文書ノ偽造ヲ罪トシ罰センニハ虛偽ノ事實ヲ證明スヘキ證據ヲ發セシムルコトヲ要ス果シテ然ラハ文書其モノ即證據トシテ提供シ得ヘキモノ、形式ハ之ヲ僞レリトスルモ其文書即證據ニシテ眞實ニ事實ヲ表示スルモノナランカ文書偽造罪構成ノ實質上ノ要件ヲ缺如スルモノニシテ犯罪成立セス而シテ本件ニ於テ被告人ハ帳簿ノ誤記ヲ訂正シタルニ過キサルカ故ニ其訂正ノ方式ニ反シ從テ文書ノ形式ヲ僞リタルモノト云フヲ得ヘシト雖モ決シテ事實ノ眞實ヲ僞リタルモノニアラス故ニ原院ニ於テ文書偽造罪トシテ處罰セルハ不當ニ法則ヲ適用シタルモノニシテ擬律錯誤ノ不法アリト云フニ在レトモ官文書偽造罪ニ關スル刑法第四章第三節ノ規定及ヒ私文書偽造

罪ニ關スル同第四節ノ規定ヲ按ズルニ法律ハ犯罪構成ノ條件トシテ文書ノ「偽造又ハ増減變換」ノ所爲アルコトヲ要求スルニ止マリ他ニ何等ノ制限條件ヲ設ケサルヲ以テ假令刑法制定當時ニ於ケル起草者ノ意思ハ犯罪ノ成立ニ付キ眞實ノ變換ヲ必要トスルニアリシトスルモ是レ唯々起草者一個ノ見解タルニ止マリ之ヲ犯罪構成ノ要件トナサ、リシ刑法ノ律意ナリトシ此要件ヲ具備セサル文書ノ偽造變換ハ犯罪ヲ構成セサルモノト謂フコトヲ得スシテ此點ハ文書偽造罪ノ性質ニ關スル學理上ノ觀念ヲ基本トシテ其然ルヤ否ヤヲ決定セサルヘカラス依テ此點ニ付キ審按スルニ凡ソ文書ハ事實證明ノ具トシテ取引上重要ナル效力ヲ有シ諸般ノ取引ハ文書ノ包含スル證明ノ形式ニ對スル信用ニ依リテ障礙ナク行ハル、モノナレハ取引ノ頻繁トナルニ從ヒ文書ハ益々其重要ノ度ヲ增加スルモノナリ而シテ文書ノ證明力ハ一ニ其形式ノ上ニ存スルモノニシテ文書ノ形式ト其證明力トハ分離スヘカラス關係ヲ有スルモノナレハ文書ヲ取引上證明ノ具トシテ其效用ヲ爲スカ爲メニ其形式ニ於テ眞正ナルコトヲ要シ形式ニ於テ不眞正ナル文書ハ取引上ニ於テ依據シ得ヘカラスハ勿論ナルヲ以テ文書ノ形式的眞正ヲ害スルノ所爲ハ之ヲ信シテ取引ヲ爲ス人ヲシテ不測ノ損害ヲ被ムラシメ引テ文書ノ信用ヲ毀損シ取引ノ安全ヲ害スルノ結果ヲ生スルモノナリ故ニ文書ノ形式ヲ保護シ文書ノ信用ヲ維持スルカ爲メニハ文書ノ眞正ヲ害スル偽造變換ノ所爲ニ對シテ刑罰ノ制裁ヲ付シ之ヲ禁壓スルノ必要アリ刑法信用ヲ害スル罪トシテ第四章中ニ官私文書ノ偽造變換ニ關スル犯罪ヲ規定セルハ全ク之カ爲メニ外ナラサルヲ以テ文書ノ形式的眞正ヲ害スルノ所爲ハ其文書ノ證明スル事實關係カ實體上ノ事實ト符合スルト否トニ拘ハラズ犯罪ヲ構成スルモノ

トス或ハ曰ハシ假令文書ノ形式的眞正ヲ詐ルモ其内容カ苟クモ實體事實ニ適合スル以上ハ何等ノ害惡ヲ生セサルヲ以テ之ヲ罰スルノ必要ナシト然レトモ實體的ノ事實ヲ證明スルカ爲メニ形式上ノ不眞正ナル文書ヲ作成シ又ハ其文書ノ形式的眞實ヲ變換スルノ自由ヲ各人ニ許スニ於テハ各々其信スル所ニ從ヒテ事實ノ眞否ヲ判斷シ自己ノ眞實ナリト信シタル事實ヲ證スルカ爲メニハ證據ヲ捏造スルコトヲ敢テスヘキヲ以テ其形式ニ於テモ亦々其實體ニ於テモ不眞實ナル文書カ取引上ニ於テ使用セラル、ニ至リ大ニ文書ノ信用ヲ害スルニ至ルヘキヲ以テ文書ノ形式ハ實體事實トノ關係如何ニ拘ハラズ特別ニ之ヲ保護スルノ必要アリ隨テ其形式ノ眞正ヲ害スルノ所爲ハ總テ文書偽造罪トシテ之ヲ處罰スルコトヲ要シ其内容カ實體事實ニ合スルノ故ヲ以テ之ヲ不問ニ付スルコトヲ得サルモノトス而シテ文書ノ眞正ハ正當權限ヲクシテ新タニ文書ヲ作成シ又ハ權限ヲクシテ既存ノ文書ヲ増減變換スルニ依リテ害セラル、モノナルヲ以テ原院カ被告ニ擅ニ本件公文書ノ記載ヲ増減變換シタル所爲アリト認メ之ニ擬スルニ官文書偽造ノ刑ヲ以テシタルハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

第六點ハ被告惣一郎ハ町役場收入役ノ職ヲ奉シ町長タル被告定次郎ノ監督命令ノ下ニ諸帳簿ノ記入ヲ司掌セルモノナリ故ニ町長ハ其長官ニシテ戸數割戸別割帳簿ノ訂正ヲ爲スハ其職務ナリ從テ本件事實ヲ法律上ヨリ詳認スレハ被告惣一郎ハ本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テナシタルモノト云ハサルヘカラス從テ刑法第七十六條ヲ適用シテ無罪ノ宣告ヲ爲スヘキモノトス乃チ原院判決ハ爰點ニ於テ不當ニ法則ヲ適用セサル不法アリト信スト云フニ在レトモ○町村收入役ハ其管掌ニ

文書偽造罪

係ル諸帳簿ノ整頓ニ關シテハ獨立ノ權限ヲ有シ町村長ノ指揮命令ニ服従スヘキモノニアラス蓋シ町村長ハ町村ノ出納ヲ監視スルノ職責上諸帳簿ヲ調査シ其記帳ノ正當ナルヤ否ヤヲ檢認シ不當ノ點アリト思料シタルトキハ之ヲ指摘シ收入役ニ對シテ正當ニ其職務ヲ執行スヘキコトヲ諭告スルヲ得ヘシト雖モ收入役ハ町村制上獨立ノ職務權限ヲ有シ村長ト並立テ町村ノ事務ヲ管掌スルモノニシテ唯タ出納事務ニ關シテ町村長ノ監督ヲ受クルニ止マリ町村長ニ隸屬シ其指揮命令ヲ受ケテ出納事務ヲ管掌スルモノニアラサルヲ以テ必スシモ町村長ノ命令ヲ聽クノ義務ナキヲ以テ假リニ被告惣一郎ハ町長タル被告定次郎ノ指圖ヲ受ケテ帳簿ノ増減變更ヲ爲シタルコトハ所論ノ如クナリトスルモ被告惣一郎ノ所爲ハ刑法第七十六條ニ所謂本屬長官ノ命ヲ受ケ職務ヲ以テ爲シタルモノト謂フコト能ハサルノミナラス原院ノ認メタル事實ニ依レハ被告等ハ共謀ノ上本件ノ公文書ヲ増減變換シテ之ヲ行使シタルモノニシテ所論ノ如ク被告定次郎ノ命ニ依リ被告惣一郎ニ於テ帳簿ノ訂正ヲ爲シタル事實ニアラサルヲ以テ上告論旨ハ理由ナシ

官吏侮辱事件

明治三十八年(元)第三七八號  
明治三十八年四月十一日宣告 (棄却)

判決要旨

一、現役ニ在ル軍人トハ現ニ隊伍ニ在リテ兵役ノ任務ニ服従スル者ヲ謂フ從テ未タ入營セサル者ハ縱令召集命令ヲ受ケテ

或隊伍ニ編入セラレタル者ト雖モ尙ホ現役ノ軍人ニ非ス

第一審 宇都宮地方裁判所

第二審 東京控訴院

被告人 石井 清藏

辯護人 花井 卓藏  
下野 喜太郎

右官吏侮辱被告事件ニ付明治三十八年三月四日東京控訴院ニ於テ言渡シタル管轄違ノ申立棄却ノ判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人上告擴張書第三點ハ原判決ハ被告ハ軍籍ニ在ル者ナルモ在役中ニ非サルヲ以テ陸軍治罪法第二十六條ニ依リ軍法會議ニ於テ審判スヘキモノニ非ラスト判斷セリ然レトモ一旦軍隊ニ編入セラレ軍人タル身分ヲ取得シタル以上ハ陸軍治罪法第二十六條ニ所謂在役中ノ者ト言ハサルヘカラス從テ同條ハ原院解釋ノ如ク軍人タルト否トヲ問ハス單ニ在役ノ如何ニ依テ其適用ヲ異ニスヘキモノナリトスルモ本案被告事件ハ軍法會議ニ於テ管轄スヘキモノタルコト明カナリ然ルニ管轄違ノ申立ヲ却下シタル原判決ハ在役ノ意義ヲ誤解シタル不法アルモノト信スト云フニ在レトモ○現役ニ在ル者トハ現ニ隊伍ニ在リテ兵役ノ任務ニ服従スル者ヲ謂フ故ニ未タ入營セサル者ハ兵役ノ任務ニ服従スルコト能ハサル者ナレハ召集命令ヲ受ケテ或隊伍ニ編入セラレタル場合ト雖モ尙ホ未タ現役ノ軍人ナリト謂フヘカラス陸軍治罪法第二十六條ニ於テハ軍人任官就役前ノ犯罪ト雖モ在官在役中ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ストアルヲ以テ軍人就役前ノ犯罪ニ付テハ其在役中即チ現ニ隊伍ニ在リテ兵役ノ任務ニ服従スル場合ニアラサレハ軍法會議ニ於テ管轄權ヲ有セサルコト毫

現役ニ在ル軍人ノ意職

モ、疑義ノ存セサル所ナリ、本件ニ付テ、原判決ノ認ムル事實ニ依レハ、被告ハ、騎兵第十三聯隊補充中隊ニ編入セラレ、明治三十七年十二月一日入營スヘキモノナリシコトハ、云々明白ニシテ、而シテ本案被告事件發生ノ爲メ、被告カ未タ入營セサルコトハ、云々被告ハ、其身軍籍ニ在ルモノタルコトハ、明白ナルモ、而モ未タ在役中ノモノニアラサルコトモ、亦明白ナリ、云々トアリテ、被告カ未タ現ニ入營シテ兵役ノ任務ニ服從シ居ラサル者ナル旨ヲ認ム左レハ、被告ハ、未タ現役ニ在ラサル者ナルヲ以テ、其犯罪ニ付テハ、普通裁判所ニ於テ之ヲ管轄スヘキヲ相當ナリトス、畢竟上告論旨ハ、陸軍治罪法第二十六條ノ見解ヲ誤ルニ坐スルモノニシテ、上告ノ理由トナラス

右ノ理由ナルヲ以テ、刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ、本件上告ハ之ヲ棄却ス  
檢事北川信從干與明治三十八年四月十一日大審院第二刑事部

●酒精及酒精含有飲料稅法違犯事件

明治三十八年(九)第三五六號  
明治三十八年四月十一日宣告 (棄却)

判決要旨

一、酒精及酒精含有飲料稅法ハ、石數ヲ以テ課稅ノ標準ヲ定ムルカ故ニ、脫稅ニ係ル造石稅ノ幾何ナルヤヲ知ルニ付テハ、先ツ酒精含有ノ原容量ノ總石數ヲ見テ、其原容量百分中ニ含有スル純酒精ノ度數ヲ計リ、之ヲ基本トシテ、原容量ノ總石數中ニ

含有スル純酒精ノ分量幾干箇ナルヤヲ算定セサルヘガラス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 清水政次郎

右酒精及酒精含有飲料稅法違犯被告事件ニ付、明治三十八年二月二十二日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ、被告ハ上告ヲ爲シ、タリ、因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ、判決スル左ノ如シ

上告趣意ノ第一點ハ、原院ハ被告ヲ罰金六十七圓八十五錢ニ處シタルハ、如何ナル標準ニ基キシモノナルヤ、分明ナラス、抑モ酒精及酒精含有飲料稅法ニ依リ、無免許製造者ヲ處罰スルハ、造石稅ニ基キ之ニ五倍スルノ金額ヲ以テ罰金ノ額トス、而シテ稅率ノ標準ハ、石數ニ依ルモノニシテ、敢テ泰西數量ノ磅ニ基クモノニ非ス、然ルニ原院ハ三十九度酒精百七十磅ヲ製造シタルコトヲ認メタルモ、之ヲ本邦石數ニ換算シテ、果シテ何石何斗ナルヤ、分明ニ説明セス、只一七 五一一ノ箇數ヲ製造シタルト説明セラレタルモ、一七 五一一ハ、果シテ一石七斗餘ナルヤ、又ハ一斗七升餘ナルヤ、將タ一升七合餘ナルヤ、分明ナラス之ニ理由ヲ付セサル違法ノ判決ナリト云フニ在リ、○依テ按スルニ、酒精及酒精含有飲料稅法第二條ニ、酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ヲ製造スルトキハ、一石ニ付、原容量百分中、純酒精ノ容量一箇每ニ七十五錢ノ割合ヲ以テ、其石數ニ應シテ、造石稅ヲ課ス、トアリテ、法律ノ趣旨、石數ヲ以テ課稅ノ標準ヲ定ムルカ故ニ、免稅シタル造石稅ノ幾干ナルヤヲ知ルニ付テハ、先ツ酒精又ハ酒精含有ノ原容量ノ總石數ヲ見、其原容量百分中ニ含有スル純酒精ノ度數ヲ計リ、之ヲ基本トシテ、原容量ノ總

酒精造石稅ノ算定

石數中ニ含有スル純酒精ノ分量幾千度即チ幾千箇ナルヤヲ計算セサルヘセラズ然ルニ原判決ニ於テハ云々原容量百分中三十九度ノ酒精百七十磅即チ酒精箇數一七、五一一ヲ製造シタルモノト記載シタルニ止マリ本件ニ於テ被告カ脱税シタル酒精原容量ノ總石數ハ果シテ幾千ニシテ其總石數中ニ含有セシ純酒精ハ幾千箇ナルヤ之レカ説明ヲ爲ス所ナキヲ以テ原容量百分中三十九度ノ割合ニ於ケル純酒精ノ箇數ハ實際一七、五一一ナルヤ又判決ニ於テ「即チ酒精箇類一七、五一一」トアル酒精トハ果シテ純酒精ヲ指シタルモノナルヤ將タ原容量ノ酒精ヲ謂ヒシモノナルヤ之ヲ知ルヘカラス左レハ原判決ハ犯罪ヲ構成スルニ必要ナル事實ノ記載明瞭ナラス所謂理由ノ不備アルモノニシテ破毀ヲ免レサル不合法ノ原由アルモノトス已ニ此一點ニ付テ原判決ヲ破毀セル上ハ其他ノ論點ニ付テハ一々説明ヲ爲スノ必要ナシ

●詐欺取財附帶私訴事件

明治三十八年(九)第一九九號  
明治三十八年三月六日宣告 (棄却)

判決要旨

一、民事原告人カ犯罪行為ヲ原因トシテ提起シタル私訴請求ニ付テハ民法ノ規定ニ依リ其當否ヲ判定スヘキモノトス從テ公訴判決ノ確定シタル場合ト雖モ其理由ニ拘束セララルヘキモノニ非ス

第一番 盛岡地方裁判所 第二番 宮城控訴院

私訴上告人 和野巳之松

私訴被上告人 菊池甚太郎

右和野巳之松外二名詐欺取財被告事件ニ附帶スル私訴ニ付明治三十八年一月二十三日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不合法トシ和野巳之松ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告趣意ハ原院ハ第一審判決ヲ取消シ民事原告人ノ請求全部ヲ是認セラレタレトモ此判決ハ公訴ノ確定判決ト抵觸スルモノト云ハサルヲ得ス第一審判決ハ金六十圓ト五十圓ノ債權ハ何レモ抵當權設定ノ登記經由ノ上正當ニ貸付ケタルモノニシテ第一審公訴判決ニ於テモ六十圓ヲ貸付ケタル處其内金四十七圓ヲ騙取シタリト云フニ止マリ五十圓ノ債權ニ付テハ何等ノ犯罪アルコトヲ認メズ而テ此公訴判決ハ確定シタルモノナリ凡ソ確定判決ハ犯罪所爲ノ眞實其犯罪ノ性質及被告ノ罪責ニ付テハ裁判ハ當然確定ノ效力ヲ有スルモノナルニ付法定ノ手續ヲ爲サスレテ此效力ヲ打破スルコトヲ得サルヤ明カナリトス然ルニ原院ハ第一審公訴判決ニ於テ六十圓ノ貸借ハ被告ニ當初ヨリ惡意ナク又五十圓ノ貸借ニ付テハ民事原告人ノ主張ヲ認ム可キ事證存セサル理由ヲ以テ民事原告人ノ請求ヲ却下シタル判決ヲ取消シ詐欺取財罪ノ結果騙取シタルモノ、如ク判決シタルハ一事不再理ノ原則ニ反シ且私訴判決ヲ以テ不合法ニ公訴判決ヲ變更シタル裁判ナリト信スト云フニ在リ

○依テ按スルニ一審公訴判決ノ事實ハ被告等カ菊池甚太郎ヨリ金四十七圓ヲ騙取シタリト云フニ

私訴請求當否ノ判定

在リ而シテ其證據説明中本件ハ素ト金六十圓及ヒ金五十圓ノ證書ヲ詐取シタル公訴ニ係ルモ其金  
圓ノ貸借ハ正當ノモノト認定スル方適當ナル旨説示シタルモ民事原告人カ犯罪行為ヲ原因トシテ  
提起シタル私訴請求ハ民法上其理由アルヤ否ヤヲ審理スヘキモノニシテ右公訴判決ノ確定シタル  
場合ト雖モ其理由ニ拘束セラルヘキモノニ非ス(明治三十三年オ第四百二十五號明治三十四年四  
月三十日聯合民事部判決明治三十七年オ第六百二十五號明治三十八年二月四日民事部判決參照)  
故ニ原院カ民事原告人ノ控訴ニ基キ私訴ヲ審理スルニ當リ民法上其當否ヲ判定スルハ固ヨリ其職  
權ニ屬スルヲ以テ原院カ其判文ニ掲クル諸般ノ證據ニ依リ公訴判決ノ主文ニ關係ナキ本件金五十  
圓竝ニ金六十圓ノ借用證書ヲ騙取シタル事實ヲ認定スルモ毫モ金四十七圓ヲ騙取シタルト言渡サ  
レタル公訴判決ノ既判力ニ影響スル所ナキノミナラス犯罪事件ヲ再理シタルモノニアラサレハ原  
院カ言渡シタル私訴判決ハ公訴判決ヲ變更シタルモノト云フヘカラス故ニ本論旨ハ理由ナシ

●詐欺取財并附帶私訴事件 明治三十八年(レ)第四百六號 明治三十八年四月二十一日判決 (棄却)

判決要旨

一 認訴ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定スヘキトキ共同訴訟  
トシテ訴フルコトヲ得ヘキ民事訴訟法上ノ必要的共同訴訟  
ノ法理ハ私訴ニ付テモ亦タ之ヲ認メタルモノトス

私訴ノ裁判ハ刑事訴訟法ノ規定ニ從テ之ヲ爲スヘク其ノ民事訴訟法ノ規定ヲ適  
用スヘキトキハ刑事訴訟法中特ニ明文ヲ以テ之ヲ掲ケタリ即チ刑事訴訟法第四  
條末項第十九條及ヒ第二百二十六條末項ノ如キ是レナリ故ニ此點ヨリ觀察スル  
トキハ私訴ノ裁判ニ付キ民事訴訟法ノ規定ヲ適用センニハ必スヤ右法條ノ如キ  
特別規定ノ存スルニアラスンハ之ヲ適用スルコト能ハサルヘク從テ共同訴訟ニ  
付キ民事訴訟法ニ據ルヘキノ規定ヲ設ケサル刑事訴訟法ノ本ニ在テハ私訴トシ  
テノ共同訴訟ハ到底之ヲ認ム可ラサルノ論結ヲ生セサルヲ得ス然レトモ民事訴  
訟法第五十條ニ規定スル必要的共同訴訟ナルモノハ之ヲ法律ノ創設ニ基クト云  
ハシヨリ寧ロ訴訟法上ノ結果トシテ存在スルモノトナスノ穩當ナルヲ知ルヘキ  
ナリ即チ權利關係カ二以上ノ人ニ存在シテ其ノ權利關係カ合一ニノミ確定ス  
ヘキ場合ニ於テ之ヲ共同訴訟トシテ審理スルコト能ハサルニ至ルヘケレハナ  
リ然ラサルモノト爲ストキハ兩者ノ間ニ判決ノ抵觸ヲ來シ遂ニ各別ニ審決セサル  
可ラザルモ目的ヲ達スルコト能ハサルニ至ルヘケレハナリ共同訴訟ノ存在ハ  
法律ノ創設ニ付キ共同訴訟法上ノ結果トシテ審理スルコト能ハサルニ至ルヘ  
ケレハナリ然ラサルモノト爲ストキハ兩者ノ間ニ判決ノ抵觸ヲ來シ遂ニ各別ニ審決セサル  
アテハ私訴ニ付キ共同訴訟ヲ提起スル結果トシテ此ノ手續ヲ認ムル所以ニ外  
ナラズ

私訴ノ共同訴訟

ス果シテ然ラハ民事訴訟法ノ規定ヲ私訴ニ適用センニハ特別ノ明文ヲ要ストノ  
前段ノ説明ハ此ノ論結ト併立シテ悖ラサルヲ知ルヘキナリ  
民事訴訟法第五十條ノ規定ヲ見ルニ(一)共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ  
方法ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス(二)共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又  
ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人ガ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看  
做ス(三)共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其ノ懈怠  
シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス(四)懈怠シタル共同訴訟  
人ニハ懈怠セザリシ場合ニ於テ爲スヘキ總テノ送達及呼出ヲ爲スコトヲ要ス(五)  
懈怠シタル共同訴訟人ハ其ノ後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ルコトヲ得ル旨ヲ規定セリ  
按スルニ此ノ規定ハ一見恰モ法律ノ擬制ニ出ツルカ如シト雖モ若シ如斯ナラサ  
ルニ於テハ權利關係ヲシテ合一ニ確定セシムルコト能ハス必要ノ共同訴訟ノ目  
的ハ之ヲ達スルニ由ナキヲ以テ已ニ私訴ニ付キ訴訟法ノ結果トシ必要ノ共同  
訴訟ノ成立ヲ認ムル以上ハ民事訴訟法ニ認メタル右五個ノ場合ハ凡テ之ヲ私訴  
ノ共同訴訟ニ認メサルヲ得サルナリ

(參照) 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニニ確定ス可キニ限リ左ノ規定ヲ適用ス共同  
訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス共同訴訟人中ノ或ル  
人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス共同訴訟人中ノ或ル人ノミ

カ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其ノ懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス然レトモ懈怠シタル共  
同訴訟人ニハ其ノ懈怠セザリシ場合ニ於テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其ノ懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリ  
トモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ルコトヲ得民事訴訟法第五十條)

第一審 水戸地方裁判所 第二審 東京控訴院

公訴上告人 川 澄 力  
私訴上告人 米川龜之介  
私訴被上告人 青山 儀 八  
訴訟代理人 天野 敬 一

右力ニ對スル詐欺取財被告事件及之レニ附帶スル龜之介儀八間ノ私訴事件ニ付明治三十八年三月  
十三日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告川澄力及民事被告人米川龜之介ヨリ各上告ヲ  
爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
私訴上告代理人天野敬一ノ擴張書ハ原判決ハ私訴手續ニ違背アル不法ノ判決ナリ何トナレハ本件  
被告上告人ノ一定ノ申立ハ「前畧」被告川澄力及米川龜之介ハ茨城縣東茨城郡上野合村大字小幡  
字鏡田二千四百三十四番田二反三畝二十四歩ニ對シ明治三十七年九月二十七日水戸區裁判所堅倉  
出張所ニ於テナシタル同日附賣買ニ因ル所有權移轉ノ登記抹消ノ手續ヲナス可シ——後畧」ト云  
フニアリ而シテ登記抹消ノ手續ハ登記法上登記權利者登記義務者ノ連署ニヨリテ之ヲナス可キモ  
ノナルカ故ニ本訴被上告人ノ請求ハ其性質ニ於テ所謂合一ニ確定スルコトヲ要スル事項ニ屬スル  
モノナリ故ニ縱令相手方(即賣買登記ニ於ケル登記權利者並ニ登記義務者)ノ一人カ上訴ヲナシタ  
ル場合ニ於テモ尙民事訴訟法第五十條ニ規定セル夫レノ如ク他ノ相手方ノ一人ヲモ呼出シ其他總

テノ訴訟手續ニ加ハラシメサル可カラス是レ必スシモ法文ヲ俟テ然ル可キ事ニアラスシテ其請求ノ性質上ヨリシテ當然生スルノ結果ナリトス若シ然ラスシテ別々ニ審理シ得可キモノトセンカ原告者ハ相手方一人ノミニ對シテ訴フルコトヲモ許サ、ル可カラス或ハ又別々ニ訴フルコトヲモ許サ、ル可カラス從テ箇々別々ニ反對ノ判決アル可キ場合ヲモ想像シ得可ク更ニ又本訴ノ如キ相手方ノ一人ハ一審判決ニ服シ他ノ一人上訴シタル場合ニ於テ上訴裁判所ニ於テ一審判決ヲ廢棄スル場合アリ得ル事ヲ看過スル克ハス然レトモ此ノ如キハ共ニ登記法上全然許容セラレサルモノナリ即チ知ル本訴被上告人ノ請求ハ法ノ規定ノ有無ニ關ハラス其性質上當然合一ニ審理判決セラレサル可カラサルコトヲ今右ノ前提ノ下ニ本件原院ノ審理手續ヲ調査スルニ原裁判所ハ相手方ノ一人川澄力(即賣買ノ登記義務者)ヲ呼出サス參加セシメヌ又判決ノ客體トナサ、ルモノナルコトハ公判始末審判決原本等ニ依ツテ明了ナリ然ラハ即原判決ハ前述所論ノ如ク訴訟手續ニ違背シテナシタル不法ノ判決タルノ非難ハ到底免ル可カラサルモノト信スト云フニ在リ

依テ一件記録ヲ調査スルニ本件ノ私訴ハ被上告人青山儀八ヨリ川澄力及ヒ上告人米川龜之介ヲ共同被告トシ川澄力カ青山儀八ニ賣却シタル茨城縣東茨城郡上野合村大字小幡字鏡田二千四百三十四番田二反三畝二十四歩ヲ冒認シテ上告人米川龜之介ニ販賣シ龜之介ハ其所有權ノ登記ヲ爲シタルヲ請求ノ原因トシテ右賣買ニ基ケル所有權移轉登記ノ抹消ヲ請求ノ目的トスルモノニシテ第一審ニ於テハ力龜之介ハ被上告人ノ請求ニ應スヘキ旨ノ判決ヲ受ケ力ハ控訴セシテ龜之介ノミ控訴シタル事實ニシテ右請求ノ原因ニ依レハ本件ハ民事訴訟法第五十條ニ所謂必要共同訴訟ノ性質ヲ有スル事件ナリトス何トナレハ該登記ノ抹消ハ被上告人カ力龜之介ト共ニ申請スルカ否サレハ右兩名ニ對シ登記抹消ノ手續ヲ爲スヘキコトヲ命スル判決ヲ提出スルニアラサレハ之ヲ爲スヲ得サルモノニシテ力龜之介ノ中一名ニ對シテ右ノ判決アルモ他ノ一名ニ對スル登記抹消手續請求棄却ノ判決アリシ場合ニ於テハ登記抹消ノ命スル判決ハ之ヲ執行スルニ由ナケレハナリ而シテ私訴ニ關シテハ刑事訴訟法中民事訴訟法第五十條ノ如キ明文ナシト雖モ必要共同訴訟人ニ對シ各抵觸スル判決ヲ下スカ或ハ其一人ニ對シテ判決ヲ與ヘサル場合ニ於テハ權利ノ執行ヲ爲スヲ得サルカ故ニ同條ノ規定ニ存スル理論ハ私訴ニモ適用スヘキコトハ必要共同訴訟ノ性質上當然ナルモノトス故ニ上告人龜之介ノ提起セル控訴ハ力ノ爲メニモ控訴ノ效力アルヲ以テ原院ハ力ニ對シテモ審判ヲ爲スヘキモノナルニ龜之介ノミヲ控訴人トシテ審判シタルカ故ニ一面ニ於テハ力ニ對スル訴訟ハ控訴審ニ屬シタルノミニシテ同人ニ對スル一審判決ハ確定スル時機ナク又一面ニ於テハ龜之介ニ對シ執行不能ノ判決ヲ下スニ至レルモノニシテ原院ノ審判ハ重要ナル手續ニ違背シタルモノナルヲ以テ上告論旨ハ其理由アルモノトス

質ヲ有スル事件ナリトス何トナレハ該登記ノ抹消ハ被上告人カ力龜之介ト共ニ申請スルカ否サレハ右兩名ニ對シ登記抹消ノ手續ヲ爲スヘキコトヲ命スル判決ヲ提出スルニアラサレハ之ヲ爲スヲ得サルモノニシテ力龜之介ノ中一名ニ對シテ右ノ判決アルモ他ノ一名ニ對スル登記抹消手續請求棄却ノ判決アリシ場合ニ於テハ登記抹消ノ命スル判決ハ之ヲ執行スルニ由ナケレハナリ而シテ私訴ニ關シテハ刑事訴訟法中民事訴訟法第五十條ノ如キ明文ナシト雖モ必要共同訴訟人ニ對シ各抵觸スル判決ヲ下スカ或ハ其一人ニ對シテ判決ヲ與ヘサル場合ニ於テハ權利ノ執行ヲ爲スヲ得サルカ故ニ同條ノ規定ニ存スル理論ハ私訴ニモ適用スヘキコトハ必要共同訴訟ノ性質上當然ナルモノトス故ニ上告人龜之介ノ提起セル控訴ハ力ノ爲メニモ控訴ノ效力アルヲ以テ原院ハ力ニ對シテモ審判ヲ爲スヘキモノナルニ龜之介ノミヲ控訴人トシテ審判シタルカ故ニ一面ニ於テハ力ニ對スル訴訟ハ控訴審ニ屬シタルノミニシテ同人ニ對スル一審判決ハ確定スル時機ナク又一面ニ於テハ龜之介ニ對シ執行不能ノ判決ヲ下スニ至レルモノニシテ原院ノ審判ハ重要ナル手續ニ違背シタルモノナルヲ以テ上告論旨ハ其理由アルモノトス

●特許法違犯事件

明治三十八年(レ)第五二〇號 (棄却)

判決要旨

一、特許公報ヲ以テ特許物ナルコトヲ公示セラレタルトキハ何人モ一應之ヲ知了シタルモノナリトノ推定ヲ下スニ止マリ

特許公報ヲ以テシタル公示ノ效力



絶對ニ之ヲ知了シタルモノト看做ニアラス從テ裁判所ハ證據アルトキハ此推定ニ反シ被告ハ右公示ノ事實ヲ知了セザリシモノトノ認定ヲ下スモ敢テ妨クルコトナシ

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院  
被告人 田中 瓦藏 外一名

右特許法違犯被告事件ニ付明治三十八年三月二十四日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ同應檢事長代理檢事大竹長壽ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
上告趣意書ハ特許公報ハ特許局カ特許法第四十二條ノ規定ニ從ヒ特許ニ關スル事項ヲ公示スル爲メ發行スルモノニシテ同法ト相俟テ運用ヲ爲スモノナレハ特許公報ヲ以テ公示セラレタルモノハ何人ト雖モ之ヲ知了シタルモノト看做サ、ルヘカラス(明治三十六年十月九日商標法違犯事件ニ對スル貴院ノ判例參照)本件被告兩名ノ使用シタル穀物引割機ト同一構造ノ器械ハ既ニ荒川庄藏カ特許ヲ受ケ特許公報ニ掲載セラレタル故ニ被告兩名ノ使用シタル穀物引割機ト同一構造ノ器械ハ既ニ荒川庄藏カ特許ヲ受ケ特許公報ニ掲載セラレタルモノナルコトハ原判決ノ認ムル所ナリ故ニ被告兩名ノ使用シタル穀物引割機ト同一構造ノ器械ヲ使用スル當時荒川庄藏カ特許ヲ受ケ居ル情ヲ知リタリト認ムヘキ證據充分ナラストノ理由ヲ以テ無罪ト判決シタルハ理由ノ齟齬アルモノト思料スト云フニ在リ

○依テ按スルニ特許公報ヲ以テ公示セラレタル事項ハ一應人ノ知了シタルモノト推定シ得ルニ止リ特許法中該公報ニ據リ已ニ公示セラレタル事項ハ何人ト雖モ之ヲ否定スルコトヲ得サル文詞ナキノミナラス刑事事件ニ付犯意ヲ判定スルハ事實承審官ノ自由ナル心證ニ因ルヘキモノニシテ民事裁判ノ如ク反證アルマテ推測ニ驅束セラルヘキモノニアラサレハ原院カ被告等ハ荒川庄藏ノ特許ヲ受ケ特許公報ニ掲載セラレタル穀物引割機ト同一構造ノ器械ヲ据付ケ使用シタル事實ヲ認メ而シテ被告ノ犯意ヲ認ムルニ當リ事實承審官カ諸般ノ證據ヲ參酌シ其心證ニ據リ被告カ前示機械ヲ使用スル當時荒川カ特許ヲ受ケ居ル情ヲ知リナカラ之ヲ使用シタリトノ證據十分ナラスト判示スルモ其判文前後ノ理由ニ齟齬スル所アルヲ見ス故ニ本論旨ハ理由ナシ

●詐欺取財事件 明治三十八年(九)第三〇九號 (棄却)  
明治三十八年三月二十七日判決

判決要旨

一起訴前ニ施シタル詐欺手段ニ依リ起訴後ニ金員ノ交附ヲ受ケタルトキハ裁判所ハ其ノ受ケタル點ニ付キ別ニ訴ヲ設ケサルモ曩キニ受理シタル詐欺取財ノ公訴ニ依リ當然之ヲ問罪スルコトヲ得ヘシ

一、一ノ犯罪ニ付キ起訴アリタルトキハ起訴以後ニ成就セラル

起訴ノ效力〇起訴後ノ犯罪行為

ヘキ犯罪行為ニ對シテモ亦タ公訴ノ效力ヲ及スコトヲ得

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 京極貞衛 辯護人 兒玉一英

外一名

右詐欺取財被告事件ニ付キ明治三十八年二月十七日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ各被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
被告兩名辯護人兒玉一英上告趣意擴張辯明書第三點被告三郎ノ被告事件中四、同年七月十五日頃青森縣上北郡野邊地町西堀良吉ヨリ金三圓五十錢ヲ淺草區橋場町ノ右學會ヘ宛テ送付シ來リタル處意思繼場シテ之ヲ騙取セリトアルモ被告三郎カ起訴セラレタルハ同年七月七日ニシテ此犯罪事實ノ以前ナリトヌ故ニ明治三十七年七月十五日比ノ事實ハ起訴後ノ行為ニ係ルヲ以テ公訴ヲ受クヘキ理由ナク又身已ニ勾禁ノ後ニ係ルヲ以テ此罪ヲ犯サント欲スルモ能ハサル事實ナリ是レ訴ヲ受ケサル事實ニ對シ裁判ヲ爲シタル不法ナルト同時ニ起訴以前ニ於テ西堀良吉ヨリ金圓ヲ騙取シタル事實ニ對シテ裁判ヲ爲サ、リシ不法アルモノトヌ假ニ此不法ナシトスルモ少クモ理由ノ不備又ハ齟齬ナル不法ノ裁判ナリトスト云フニ在レトモ○原判決カ認メタル事實ニ依レハ被告カ明治三十七年七月十五日頃西堀良吉ヨリ金三圓五十錢ヲ騙取シタル所爲ハ本件起訴以後ニ係ルモノナルコトハ所論ノ如シ然レトモ其所爲ハ起訴以前ニ遂行シタル他ノ所爲ト共ニ一ノ詐欺取財罪ヲ構成スルモノニシテ別箇ノ獨立罪ヲ構成スルモノニアラス且被害者西堀良吉ニ對スル詐欺手段ハ起訴以前ニ於テ既ニ行ヒ了リタルモノニシテ被告カ其起訴以後ニ於テ金員ノ交付ヲ受ケタルハ既ニ

行ヒタル欺詐手段ノ結果ヲ得タルニ過キサルモノトス而シテ起訴以前ニ行ヒタル犯罪行為ニシテ起訴以後ニ其結果ヲ得タルコトノ法律上又ハ事實上必無ナルヘキ理由ナキヲ以テ右原判決ノ認定ハ不當ニアラス又既ニ一ノ犯罪ニ付起訴セラレタルトキハ起訴以後ニ成就セラルヘキ該犯罪中ノ一所爲ニ對シテモ亦公訴アリタルモノト論シ得ヘキカ故ニ原判決カ本件豫審請求書ニ掲ケラレタル犯罪中ノ一部分タル西堀良吉ニ對スル金員騙取ノ事實ニ付起訴以後ニ其結果ヲ得タルコトヲ判示スルモ起訴以外ノ事實ヲ認メ又ハ起訴ノ事實ニ對シ判決ヲ爲サ、ル不法アリト云フヲ得ス因テ本論旨ハ其理由ナシ

●小切手偽造變造行使詐欺并附帶私訴事件 明治三十八年(レ)第四七一號 (棄却)  
明治三十八年五月十八日判決

判決要旨

- 一、豫審ノ手續ニ違法アルモ其ノ決定カ確定シタルトキハ公訴ハ有效ニ公判裁判所ニ移付セラル、ニ依リ豫審決定ノ瑕疵ヲ以テ原判決ヲ非難スルコトヲ許サス
- 一、官吏ノ任命補職ヲ官報ニ掲載スルハ其ノ辭令ノ發送セラレタルコトヲ報告スルニ過キサレハ任命補職ハ官報ノ掲載ニ

豫審ノ效力○官報上官吏任命掲載ノ效力

由リ其效ヲ生スルモノニアラスシテ當該官廳ノ職務上ノ行  
爲ニ依リ本人自ラ之ヲ知得シタル場合ニ於テ始メテ效力ヲ  
生ス從テ任命補職ノコト官報ニ掲記セラル、モ未タ本人カ  
官廳ヨリ辭令ノ交附ヲ受ケス若クハ其ノ他ノ方法ニ於テ通  
告ヲ受ケサルトキハ依然舊職ニ從事スヘキモノトス

說明

豫審決定ノ效力 豫審決定ノ效力ニ付キ論究スヘキ一ニシテ足ラスト雖モ本論  
ニ於テハ主トシテ有罪ノ豫審決定ニ對スル形式上ノ效力ニ付キ論述スル所アラ  
ントス  
有罪ノ豫審決定ノ形式的效力ハ(一)移審ノ效力(二)罪種指定ノ效力ノ二ケニ區別ス  
ルコトヲ得ヘシ  
(一)移審ノ效力 確定シタル有罪ノ豫審決定ニ移審ノ效力ヲ生スルハ豫審制度ノ  
本來ノ目的ニシテ豫審ノ決定ハ他ノ裁判ニ比シ異ナル所又々實ニ茲ニ存ス而シ  
テ右移審ノ效力ナルモノハ絶對的效力ヲ有ス(絶對的効力カ獨リ豫審ノ效力ニモ  
亦隨タルノアリナラ)即チ豫審ノ手續ニ違法アルト否トヲ不問荷モ一ヒ事件ヲ公訴ニ

移附スル旨ノ決定ヲナシ確定シタルトキハ移審ノ效力ハ茲ニ發生シ公判裁判所  
ハ豫審手續ノ違法ヲ主張シ事件ノ受理ヲ拒ムコトヲ許サズ是レ他ナシ元來公判  
ト豫審トハ其ノ間審級ノ相異アルモノニアラスシテ單ニ職務執行ノ區別ニ過キ  
ス而シテ豫審ノ目的トスル所ハ公判ノ審理ヲ容易ナラシメンカ爲メ其準備ヲナ  
スニ存シ被告ノ犯罪ヲ斷スルヲ目的トセシ左レハ豫審ニ於テ事件ヲ公判ニ移  
ノ決定ヲ爲スハ取リモ直サズ公判ニ於ケル審判ノ準備ヲ終リタル旨ヲ報告スル  
ニ外ナラサレハ豫審ニ於ケル公判移附ノ決定ニ對シテハ絶對ニ移審ノ效力ヲ認  
ムルニアラスンハ圓滿ナル裁判事務ノ進行ヲ期スルコト能ハサレハナリ  
(二)罪種指定ノ效力 罪種指定ノ效力トハ公判ノ手續ヲ開始スルノ豫審ニ於テ決定シタル犯  
罪ノ重罪若クハ輕罪ノ罪名ニ基キ公判ノ手續ヲ開始スルノ豫審ニ於テ決定シタル  
即チ豫審ニ於テ被告事件重罪ナリト決定シタルトキハ公判ノ手續ヲ開始スル  
ト思慮スルモ審判ノ開始ハ必ず刑事訴訟法第二百三十七條ニ從ヒ重罪公判ヲ開  
カサル可ラス之レニ反シテ豫審ニ於テ被告事件ノ輕罪ナリト決定シタルトキハ  
公判裁判所之ヲ重罪ト認ムルモ公判審理ノ開始ハ必ず法律ニ於テ事件ノ重罪ト  
可ラス此點ニ付キ特別ノ法文存スル所ナシト雖モ法律ニ於テ事件ノ重罪ト  
トニ付キ公判ノ審判手續ヲ異ニスル所アルカ故ニ被告事件ノ重罪ナリト公判ニ於  
リヤノ別ハ必ずヤ公判開始ノ當時ニ於テ之ヲ明ニスルノ必要アリ而モ公判ニ於

豫審ノ效力○官報上官吏任命掲載ノ效力

ケル被告事件ノ審理ハ其ノ審判ヲ開始スルニ先チ一應事件ノ重罪ナリヤ輕罪ナリヤヲ審決セサル可ラサルノ規定ナキヨリ推論スル時ハ公判頭初ニ於ケル重罪輕罪ノ別ハ豫審決定ノ罪名ニ準據スヘク從テ豫審決定ニ本論ノ效力ヲ認ムルノ至當ナルヲ信スルナリ然レトモ右ニ論スル罪種指定ノ效力ハ公判開始ノ當時ニノミ存スルモノニシテ公判裁判所カ一ヒ被告事件ノ審判ニ入ルトキハ其ノ事件ヲ如何ニ定ムルモ全ク自由ナルハ論ヲ待タサルナリ

第一審 横濱地方裁判所 第二審 名古屋控訴院  
公訴私訴上告人 安西典四郎 辯護人 天森野 敬一  
私訴被上告人 横濱正金銀行  
右代表者 三崎龜之助

右小切手偽造變造行使詐欺取財事件並ニ之ニ附帶スル私訴事件ニ付明治三十八年三月十三日名古屋控訴院カ言渡シタル公私訴ノ判決ニ服セスフク、與四郎ハ各上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

被告安西典四郎上告趣意辯明書第二(四)豫審終結決定ニハ其罪ヲハ罰スヘキ法律ノ正條ヲ明示スルヲ要スルニ本件決定ハ第三事實ノ變造行使未遂ナル事實ヲ認メナカラ未遂ノ法條ヲ明示セス又横濱地方裁判所ノ重罪公判ニ移スニ付キ刑事訴訟法ノ法文ヲ明示セサルハコレ裁判ニ理由ヲ付セス及ヒ法則ヲ適用セサル不法アルモノナリト云フニ在リ然レトモ豫審決定ニハ第三事實ニ付キ刑法第三百九十七條ヲ適用シ其未遂タル所以ヲ明ニシアルノミナラス右決定書ニ刑法第一百二十二

條及ヒ刑事訴訟法第六十八條等ノ適用ヲ明示セザリシトテ決定カ確定シタル以上ハ事件ノ公訴ハ有效ニ公判裁判所ニ移付セラレタルニヨリ豫審決定ノ瑕疵ヲ以テ原判決ヲ非難スルヲ許サス被告アンリフック辯護人森澤上告趣意擴張辯明書第五點ハ凡ソ公判審理ニ干與スヘキ檢事ハ其所屬裁判所ノ檢事タラサルヘカラスシテ所屬外ナル檢事ハ之レニ干與シ能ハサルコトハ裁判ノ構成上必須ノ要件ナリト信セリ然ルニ原院即チ名古屋控訴院ノ檢事奧村靖ハ明治三十八年三月六日第六五〇一號ノ官報ニヨレハ同月四日附ノ辭令ヲ以テ松江地方裁判所ノ檢事正ニ轉補シタリトアリ本案控訴ノ審理ハ同月八日ノ開廷ニ係リ其審理ニ立會ヒタル檢事ハ奧村靖ナリトハ原院ノ公判始末書並ニ原院判決ノ原本ニ記載スル所ナリ殊ニ原院判決宣告ノ日ハ同月十三日ニシテ其時干與シタル檢事モ亦奧村靖ナリトハ該判決原本ノ記載スル所ナリ如此奧村檢事ハ本件公判ノ時ハ既ニ松江ニ轉補シ原院所屬ノ檢事ニアラザリシコトハ右官報ノ證スル所ナルノミナラス原院公判始末書ノ記載ニヨレハ該宣告ノ日即チ同月十二日ニハ檢事金子富次郎カ列席シタリトアルニモ拘ハラヌ判決原本ニハ奧村檢事ノ干與シタルカ如キ記載アルハ益々不審ニ堪ヘサルナリ然レトモ檢事カ轉補シタルコトハ官報ニ於テ之レカ發表ヲ見ルモ尙ホ辭令ニ對シ本人ヨリ請書ヲ差出サ、ル間ハ依然トシテ現任者同様ノ職務ヲ執ルヲ得可シトノ說ナキニアラサルモ這ハ是レ甚ダ謂ハレナキ說ニシテ抑モ官報ハ公布式ナルヲ以テ法律勅令叙任等ノ事ハ勿論官報ニ於テ發表セラレタル以上ハ一般ノ公布ニ係ルモノナルト同時ニ其效力ヲ發生ス可キハ當然ノ結果ナリ若シモ轉補ノ辭令ニ對シ本人不服ヲ鳴シ敢テ辭退センカ其官職ヲ辭スルハ格別其辭令ニ對シ異議ヲ挾ミ官之レヲ容ル、

豫審ノ效力○官報上官更任命掲載ノ效力

カ如キコトハ到底不可能ノ事タリ然ラハ從來官報ニ於テ轉補若クハ免官ノ辭令ヲ發表セラレタル  
モノヲ拒ミタル司法官ナキニアラザリシカ既ニ官報ニ於テ發表シタル以上ハ本人カ請書ヲ差出ス  
ト否トハ一ノ形式ニ過キスシテ之レカ爲メ何等ノ效果ヲ收ムルモノニアラスト聞ケリ矣サレハ奥  
村檢事カ官報ニ於テ轉補ノ事發表シタリト云フモ其辭令ニ對シ未タ請書ヲ差出サ、ル前ニ係ルヲ  
以テ原院ノ公判ニ干與シタリト云ハシカ其ノ理未タシ何ソ願ミルノ價值アラシヤ何トナレハ請書  
ハ形式ニ過キサルコト彼レカ如クナレハナリ假リニ立會檢事ニ於テ免官セラレタリトノ官報記載ア  
リトシテ辭令ハ未タ本人ノ手ニ交付シ能ハサル事情内容アリトセンカ其免官ノ辭令交付ナキヲ理  
由トシテ依然執務シ以テ其執務上ノ效力アリヤト言ハ、何人モ此場合ニ於テハ效力ナシトハ一致  
スル所ナルヘシ何トナレハ免官ノ事既ニ官報ニ於テ發表シタル以上ハ本人ノ請書ヲ差出スト否ト  
ハ效力ニ於テ何等ノ關係ヲ有セザレハナリ爰ヲ以テ轉補ト云ヒ免官ト云ヒ其效果ニ於テ何ノ擇フ  
所アラシヤ然ラハ原院公判ニ干與シタリト云フ奥村檢事カ同院所屬ノ檢事トシテハ執務スヘキ資  
格ナキモノナルニヨリ之レニ干與シタル原院判決ハ無効タリ因テ原院判決ハ公判手續ニ背戾シタ  
ル違法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○官吏ノ任命補職ヲ官報ニ掲載スルハ其辭令ノ發送セラレタ  
ルコトヲ報告スルニ過キサレハ其任命補職ハ官報ノ掲載ニヨリ效力ヲ生スルニアラスシテ當該官廳  
ノ職務上ノ行爲ニヨリ本人自ラ之ヲ知得シタル場合ニ於テ始メテ效力ヲ生スルモノナリトハ本院  
判例ノ認ムル所ナリ故ニ官報上官吏轉職ノコトヲ掲記スルモ未タ本人カ當該官廳ヨリ辭令ノ交付  
ヲ受ケス若クハ其他ノ方法ヲ以テシテモ其通告ヲ受ケザリシトキハ依然其舊職務ニ從事スルモ之

レヲ不法ト云フ可カラズ而シテ本件ニ付キ名古屋控訴院檢事奥村靖カ明治三十八年三月四日附ノ  
辭令ニヨリ松江地方裁判所檢事正ニ轉職シタルコトハ同年三月六日ノ官報ニ其旨掲載アルニヨリ  
明白ナレトモ同檢事カ同年三月八日本件公判以前ニ其轉職ノ辭令ノ交付ヲ受ケ若クハ當該司法省  
カ其他ノ法ニヨリ其轉職ヲ本人ニ通告シタルコトヲ見ルハキ點一モ之レナケレハ奥村檢事カ本件  
公判ニ立會シタル當時ハ未タ當該官廳ノ職務上ノ行爲ニヨリ轉職ノ事實ヲ知得シ居ラザリシモノ  
ト判定スルヲ相當トスルニヨリ奥村檢事カ名古屋控訴院檢事トシテ本件ニ干與シタルハ相當ニシ  
テ論旨ハ其理由ナシ

●公文書變造行使及不動産買認事件

明治三十八年(レ)第五三一號  
明治三十八年五月二十五日判決 (棄却)

判 決 要 旨

一豫審ニ於テハ鑑定人ナシテ鑑定書ヲ作成スルコトヲ要スル  
ニ鑑定人ニ關スル調書ヲ作成スルコトヲ要セス從テ右調書  
ヲ作成スルコトアルモ別ニ準據スヘキ法式ナレハ之レニ鑑  
定人ノ署名捺印ヲ欠クモ之ヲ目シテ違法ノ調書ト云フヲ得  
ス

第一審 金澤地方裁判所

第二審 名古屋控訴院

被告人 佐野金次郎

外二名

辯護人 久木益濟

高木益太郎

右公文書偽造行使及不動産冒認被告事件ニ付明治三十八年三月二十九日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ各被告並ニ辯護人久木益濟ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人高木益太郎辨明書第四、原判決カ其證據ニ供シタル鑑定人藤井鏡訊問調書ニハ其鑑定人ノ署名捺印ヲ缺如セル違法アリテ無効ノ書面ニ屬スルモノナルニ原判決カ之レヲ罪證ニ供シタルハ探證法ノ定則ニ違背セリト云フニ在リ○依テ按スルニ受命判事ノ取調ハ公判ノ一部ニアラス寧ロ公判ノ準備手續ニ外ナラサレハ受命判事カ鑑定人ニ鑑定ヲ爲サシムルニ方リテハ豫審ニ屬スル手續ニ準據スヘキモノトス而シテ豫審ノ鑑定ニ關スル刑事訴訟法第三百三十六條ハ證人ニ關スル多數ノ法條ヲ準用シタルニ拘ハラヌ署名捺印ニ關スル同法第三百三十一條ヲ準用セス又同法第九十二條ニモ鑑定人ニ關スル訊問調書ニ付テハ何等ノ規定ヲ設ケサルニ反シ同法第四百十條ハ鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果及鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シト規定シタルニ徴セハ刑事訴訟法カ豫審ノ鑑定ニ關シテ要求スル所ハ鑑定人ヲシテ鑑定書ヲ作ラシムルニアリテ鑑定人ノ調書ハ必スシモ之ヲ作ルヲ要セサルモノト解セサルヲ得ス隨テ鑑定人ノ調書ヲ作成スルコトアルモ別ニ則ル可キ方法ナケレハ鑑定人ノ署名捺印ナシト雖モ違法ノ調書ト云フヲ得ス今原判決カ證據ニ採用シタル鑑定人藤井鏡ノ訊問調書ヲ閱スルニ受命判事カ鑑定人藤井鏡ニ對スル訊問ヲ錄取シタルモノ

ニシテ所論ノ如ク鑑定人ノ署名捺印ナシト雖モ前段説明スルカ如キ理由ニ依リ違法ノ調書ニアラサレハ之ヲ斷罪ノ資料ニ供シタル原判決ハ相當ニシテ本論旨ハ其理由ナシ

●銀貨偽造未遂及監視規則違犯事件

明治三十八年(れ)第一四二號  
明治三十八年二月二十四日判決 (棄却)

判決要旨

- 一、貨幣ノ變造トハ正當ノ貨幣ヲ材料トシテ同質ノ貨幣ヲ造成スルヲ云フ
- 一、五厘銅貨ヲ材料ト爲シ二十錢銀貨ヲ造成スルハ變造ニアラスシテ偽造ナリ
- 一、五厘銅貨ノ縁ニ刻ミナ附シ文字ヲ改造シテ之ヲ銀色トナシ
- 一、二十錢銀貨ニ摸擬シタルモ其ノ方法拙劣ナルカ爲メ他人ヲ欺クニ至ラサルトキハ刑法第百八十六條ノ所謂貨幣ノ偽造未タ成ラサルモノニ該當ス

說明

貨幣偽造及其變造

貨幣ノ偽造變造 貨幣ノ偽造變造ノ區別ニ關シテハ從來學說ノ繁爭ヲ極メタル所ニシテ方今ニ於ケル最モ有力ナル學說ノ大要ヲ舉レハ  
 貨幣ノ偽造トハ新規ナル材料ヲ以テ眞物ニ類似シタル物ヲ製作スルノ義ニシテ  
 變造トハ眞正ナル貨幣ノ上ニ信用ヲ害スヘキ工作ヲ施スノ義ナリト云フニ在  
 リ  
 右ノ學說ハ貨幣ノ偽造變造ヲ完全ニ云ヒ顯シタルモノトシテ多數學者ノ是認ス  
 ル所ナルニ反シ余輩ノ觀念ヲ以テセハ未タ之ヲ以テ完璧トナスニ足ラス左  
 ニ之ヲ説カン  
 按スルニ貨幣ノ偽造ト云ヒ變造ト云フ共ニ之レ貨幣ノ偽作ニ外ナラス換言セハ  
 偽物ノ貨幣ヲ作出スルハ獨リ貨幣ノ偽造ハ一ノ材料ヲ以テ眞貨ニ酷似スル物  
 リ唯其ノ兩者ノ間ニ異ナル所ハ偽造ハ一ノ材料ヲ以テ眞貨ニ酷似スル物ニ化製  
 スルト他ハ眞貨ニ一ノ工作ヲ加ヘ眞貨ノ着色模様若クハ其ノ形體ノ一部ヲ利用  
 シテ以テ他ノ眞貨ニ酷似スル物ヲ製出スルノ差アルノミ利用シテ製作スル材  
 料ニヨリ製作スルトハ其ノ製作セラレタル物體カ一ノ偽物タルノ點ニ於テハ二  
 者同一ナルモ各其ノ製作ノ手段ニ於テ同一ナラス材料ニヨリ製作スル物件ヲ出  
 材料ニ供セラレタル物體ニ人工ヲ施シ其ノ施サレタル結果茲ニ一ノ物件ヲ出ス  
 ルノ義ナリ眞物ノ着色模様ヲ利用スルハ施サレタル結果茲ニ一ノ物件ヲ出ス  
 形樣ヲ以テ偽物ナル十圓紙幣ニ應用ルモノニシテ變造タリ(同一紙幣アリ五圓十  
 圓ノ想又タ眞造ノ金銀貨ノ縁邊ノ削リ其ノ量目ヲ減スルハ一見恰モ偽物アリ  
 像スルニアラヌシテ眞物ニ對シ一ノ工作ヲ施スニ過キサルカ如キ威ナキニアラ  
 スルモ其ノ實一ノ偽物ヲ作出スルニ外ナラス何トナレハ眞貨ニ必要ナル量目ヲ減  
 少スルトキハ其ノ減少セラレタル貨幣ハ最早眞貨ニ出シカ爲メニ消極的ニ作  
 ナリ眞貨ノ縁邊ヲ削ル所爲ハ即チ此ノ消極的ニ作リ出シカ爲メニ消極的ニ作  
 施スニ外ナラス即チ被ハ眞貨ニ此ノ消極的ニ作リ出シカ爲メニ消極的ニ作  
 而シテ眞貨ノ摸樣形體ハ其ノ儘ニ存シテ偽物ノ形樣ニ應シテ五厘銅貨ニ銀色ヲ  
 チ一種ノ貨幣ノ變造タルヲ知ルヘキナリ之ニ反シテ五厘銅貨ニ銀色ヲ  
 表面ノ文字紋章ヲ二十錢銀貨ノ如クニ變更シタルトキハ變造ニアラヌシテ  
 タルナリ何トナレハ五厘銅貨ノ形樣着色其ノ儘ヲ二十錢銀貨ニ擬スルハ一トシテ  
 サル所ナク五厘銅貨ノ形樣着色其ノ儘ヲ二十錢銀貨ニ擬スルハ一トシテ

貨幣偽造及ヒ其ノ變造  
 依ル製作ト同一ナルモ其ノ之ヲ作  
 存シ之ヲ以テ偽物ノ着色形樣ニ應  
 常ニ眞貨ヲ以テ偽物ニ變更スル  
 ニ求ムルト否トハ問フ所ニアラサ  
 フ拾ノ字ニ改メ五圓紙幣ヲ以テ十  
 形樣ヲ以テ偽物ナル十圓紙幣ニ應  
 像スルニアラヌシテ眞造ノ金銀貨  
 スルモ其ノ實一ノ偽物ヲ作出スル  
 ルスルトキハ其ノ減少セラレタル  
 少スルトキハ其ノ減少セラレタル  
 ナリ眞貨ノ縁邊ヲ削ル所爲ハ即チ  
 施スニ外ナラス即チ被ハ眞貨ニ此  
 而シテ眞貨ノ摸樣形體ハ其ノ儘ニ  
 チ一種ノ貨幣ノ變造タルヲ知ルヘ  
 表面ノ文字紋章ヲ二十錢銀貨ノ如  
 タルナリ何トナレハ五厘銅貨ノ形  
 サル所ナク五厘銅貨ノ形樣着色其  
 貨幣偽造及ヒ其ノ變造

以上論述スル所ノ觀念ヲ以テ前ニ掲ケタル學說ノ當否ヲ考フルニ同學說ノ主張  
スル所ハ貨幣ノ變造トハ真正ナル貨幣ノ上ニ信用ヲ害スヘキ工作ヲ施スノ義ナ  
リト云フニ止マリ其ノ信用ヲ害スヘキ工作カ真ノ模様形體ヲ利用シテ施サレタ  
ルカ又ハ此ノ利用ノ程度ヲ越ヘテ眞貨ヲ以テ一ノ材料トシテノ工作ナルカ分明  
ナラス是レ余輩ノ說アル所以ナリ

(參照) 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シテ一筆ヲ減シ其未タ成サリル者ハ二  
筆ヲ減ス(刑法第百八十六條第一項)

第一審 東京方裁判所 第二審 東京控訴院  
被告人 原 盛太郎 辯護人 南 茂平

右銀貨偽造未遂及監視規則違犯被告事件ニ付明治三十八年一月十九日東京控訴院ニ於テ言渡シメ  
ル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ  
如シ

辯護人南茂平ノ上告趣意擴張書ノ一ハ原院ハ被告人ノ所爲ヲ銀貨偽造ト認メ刑法第百八十二條第  
一項ヲ適用セリ然レトモ原院モ認ムル如ク被告人ノ所爲ハ五厘銅貨ヲ原料トシ二十錢銀貨ヲ製出  
セントスルニアリテ其原料ニ供セラレタルモノハ既存ノ貨幣ニシテ新規ナル材料ヲ用ヒタルニア  
ラス故ニ此所爲ヲ貨幣贋造ノ範圍ニ於テ論セント欲セハ偽造ニアラスシテ變造ナリ蓋シ信用罪ニ

於ケル偽造變造ナルモノハ其文章タルト貨幣タルヲ問ハス一ハ全く新規ナル材料ヲ以テ眞物ニ類  
似シタルモノヲ製作スルノ義ニシテ他ハ真正ナル物ノ上ニ信用ヲ害スヘキ工作ヲ施スノ義ナレハ  
ナリ果シテ然ラハ是レ刑法第百八十二條第二項ヲ適用スヘキモノニシテ同條第一項ヲ適用シタル  
原院判決ハ擬律ノ錯誤アルモノナリト云フニ在レトモ○貨幣ノ變造トハ正當ノ貨幣ヲ材料トシテ  
同質ノ貨幣ヲ造成スルヲ云フモノナレハ本件ノ如ク五厘銅貨ヲ材料トシテ二十錢銀貨ヲ造レル場  
合即チ異質ノ貨幣ヲ造レル場合ニ於テハ偽造罪ヲ構成スルモノナルヲ以テ原判決ノ法律適用ハ相  
當ナリトス

第二ハ前段述フル所ハ被告人ノ所爲ヲ貨幣贋造ノ範圍ニ於テ論スルニ於テハ偽造ヲ以テ論スルヨ  
リモ寧ロ變造ヲ以テ論セサル可カラサト云フニルアカ當辯護人ハ尙ホ進ンテ本件ノ所爲ニハ變造  
モアラスシテ無罪ナルコトヲ主張セントス何トナレハ本件ニ於テ被告人ノ模擬セント欲スル點ハ  
二十錢銀貨ノ形狀及命價等ニ限ラレ其量目ノ如キハ措テ之レヲ問ハサレハナリ即チ其判文ニ五厘  
銅貨ノ縁ニ刻ミヲ付シ半錢トアルヲ十錢ト改造シ云々依テ二十錢銀貨十一箇ヲ偽造セントアルニ  
依テ明カナリ蓋シ五厘銅貨ト二十錢銀貨ノ量目ヲ比較スルニ一ハ他ノ半量ニモ足ラサルヲ以テ苟  
クモ之レヲ贋造セント欲セハ其量目ヲモ變改スルニアラサレハ一見直チニ其贋造タルコトヲ知リ  
得ヘキヲ以テ眞貨トシテ他人ヲ欺クコトヲ得サルヲ以テナリト云フニ在レトモ○原判決ノ認定シ  
タル事實ハ之レヲ要スルニ被告カ二十錢銀貨ヲ偽造行使セントコトヲ企テ明治三十七年九月一日格  
魯兒化汞鹽酸、ハンダー炬手、鋸、小刀ヲ使用シ五厘銅貨ノ縁ニ刻ミヲ付シ半錢トアルヲ十錢ト



改造シタル上之ヲ銀色ト爲シ且十ナル文字ノ上部ニ卷煙草ノ包紙ナル鉛紙ヲ細斷シタルモノニテ  
二ノ文字ヲ作成シ依テ二十錢銀貨十二箇ヲ偽造セントシタルモ其方法拙劣ニシテ未タ成ラザリシ  
モノナリト云フニ在リテ二十錢銀貨ノ偽造ニ着手シ其完成ニ至ラザリシ事實ニシテ右ノ狀態ニテ  
ハ未タ他人ヲ欺クヲ得サルモノトスルモ其偽造ヲ完成セハ人ヲ欺クニ足ルノ程度ニ至リ得ヘキヲ  
以テ以上ノ事實ハ刑法第百八十六條ニ所謂貨幣偽造未成ノ罪ヲ構成スルコト明ガナルモノナレハ  
本論旨ハ理由ナシ

●委託金騙取并附帶私訴事件

明治三十八年(九)第一三六號  
明治三十八年二月二十四日判決 (棄却)

判決要旨

一、數人ヨリ包括的ニ金品ノ寄託ヲ受ケタル者カ同一意思ノ發  
動ノ下ニ之レヲ費消シタル行爲ハ唯一ノ委託物費消罪ヲ構  
成スルニ止マリ寄託者ノ數ニ應シ數罪ヲ構成スルモノニア  
ラス

第一審

廣島地方裁判所

第二審

廣島控訴院

公訴私訴上告人

松本卯八郎

辯護人

高木益太郎

私訴被上告人

楠

利吉

外百五十九名

右卯八郎ニ對スル委託金騙取被告事件及ヒ之ニ附帶セル私訴事件ニ付明治三十七年十二月二十四  
日私訴ニ付テハ同二十八日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ不服ノ申立ヲ爲シ  
タリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

被告卯八郎辯護人高木益太郎辯明書 明治二十六年第一〇八八號同年十一月十六日言渡官金竊取  
詐欺取財等上告事件ニ付下サラタル御院ノ判旨ニ曰ク「按スルニ原判決ハ刑法第三百九十五條後  
段及第三百九十條ヲ以テ處斷シタルモノナリ然ラハ本罪ヲ構成スルニハ必スヤ財物ヲ騙取セラレ  
又ハ騙取セラレントシタル被害者ナカル可カラス故ニ事實ヲ認定スルニハ被害者ノ何人ナルカヲ  
判文ニ明示スルニアラサレハ果シテ被害者アリテ本罪ヲ構成スルヤ否ヤヲ知ルニ由ナシ然ルニ原  
判文ニハ田村トメヨ外四十名ハ又ハ津村龜吉外六名又ハ田村トメヨ外五名ト記載シ被害者其人ヲ  
明示セサルハ理由ノ不備ナル判決ナリ」ト説明セラレタリ而シテ本件ノ原判決ニモ此判例ニ恰當  
スル瑕疵アリテ只タ「市橋佐兵衛外數十名ヨリ……第二期拂込金ヲ受取り」トアルノミナレハ其  
外數十名ノ被害者其人ヲ明示セサルノ不法アルヲ以テ破毀ノ原由アル明確ナリト信スト云フニア  
リ○依テ按スルニ委託物費消ノ罪アリトシテ被告人ニ刑ヲ言渡ス所以ノ事實上ノ理由トシテハ被  
告人カ他人ヨリ金品ノ委託ヲ受ケテ之ヲ保管シタル事實及ヒ被告人カ其金品ヲ擅ニ費消シタル事  
實ヲ具體的ニ判文ニ掲クルコトヲ必要トシ此關係上寄託者ノ何人タルヤヲ明カニスルコトハ判決  
ノ作成ニ關スル一要件タルヤ疑ナク隨テ數箇ノ獨立セル委託物費消ニ在テハ其各箇ニ付キ常ニ必  
ス或方法ヲ以テ寄託者ヲ明示スルコトヲ必要トシ全然之ヲ省略スルコトヲ許サ、ルモノトス然レ

委託物費消

トモ數人カ包括的ニ金品ヲ寄託シ受託者カ同一意思ノ發動ノ下ニ之ヲ費消シタル場合ニ於テハ受託者ノ所爲ハ寄託者ノ數ニ相當スル犯罪ヲ構成セスシテ其所爲ヲ包括シテ一ノ委託物費消罪ヲ構成スルモノナレハ此場合ニ於テハ受託者ト寄託者トノ箇々ノ關係ハ具體的ニ之ヲ判文ニ掲クルコトヲ要セス適宜ノ文詞ヲ以テ包括的ニ其關係ヲ明示シ因テ以テ之ヲ讀ム者ヲシテ其犯罪行為ニ對スル一般ノ觀念ヲ有セシムルヲ以テ足レリトス何トナレハ被告ノ委託物費消ノ所爲カ既ニ一ノ犯罪ヲ構成スル以上ハ其一罪ヲ認ムルニ必要ナル事實關係ヲ記載スルノミヲ以テ足リ其二罪ヲ構成スル各部分ニ對シ別箇獨立ナル犯罪事實ノ記載ヲ爲スコトヲ必要トセサルヲ以テナリ果シテ然ラハ包括的ニ數人ヨリ金品ノ委託ヲ受ケ同一意思ノ發動ノ下ニ之ヲ費消シタル受託者ノ所爲ニ對シテハ受託者中ノ一名ノ氏名ヲ掲ケ其他ノ受託者ハ外何名トシテ其氏名ヲ略記シ包括的ニ金品ノ寄託保管並ニ費消ノ關係ヲ説明スルハ毫モ妨ケナク寄託者各自ノ氏名ヲ掲ケ其各自ニ對シ費消罪ノ構成要件タル事實關係ヲ殊別的ニ記載スルノ必要ナシ而シテ原院ノ認メタル事實ニ依レハ被告ハ本件ノ被害者タル市場德兵衛外百數十名ヨリ國庫債券拂込金トシテ包括的ニ金品ノ寄託ヲ受ケ之ヲ保管スルニ當リ詐欺ノ手段ヲ以テ之ヲ騙取シタルモノニシテ其所爲一罪ヲ構成スルヲ以テ原院カ被害者ヲ指示スルニ當リ何某外何名ナル概括的ノ文詞ヲ用キタルハ適當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

酒造稅法違犯事件

明治三十八年(レ)第六三〇號  
明治三十八年六月二日判決

(破毀)

判決要旨

一、酒造稅法第二十五條ハ免稅ヲ出願シタル清酒ノ一部ニ付キ不正ノ手段ヲ運ラシタルトキハ其ノ手段ニ關係ナキ部分ニ付キ犯罪ヲ成立セシムルノ法意ニアラス

一、故意ニ清酒ヲ腐敗セシムルニアラス單ニ増料ヲ目的トシ水ヲ混和シタルニ和水ノ分量多過ナリシ爲メ其ノ酒量悉ク腐敗シタルニ依リ被告ハ和水ノ事實ヲ隱蔽シ純清酒ノ腐敗シタルカ如クニ裝ヒ免稅ヲ申請シタル事實ニ對シ酒造稅法第二十五條ヲ適用センニハ和水ノ爲メ眞ニ腐敗シタル純清酒ノ部分ヲ控除シ混和シタル水量ニ對シ稅額五倍ノ罰金ヲ科スヘキモノトス

(參照) 酒類ヲ製造スル者故意ニ事故ヲ作爲シ又ハ詐術ヲ構ヘ造石稅ノ免除ヲ得又ハ得ムトシタルトキハ其ノ石數ノ造石稅

五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス(酒造稅法第二十五條)

酒造稅第二十五條ノ適用

第一審 福岡地方裁判所小倉支部 第二審 長崎控訴院  
被告人 相良淺太郎

右酒造税法違犯被告事件ニ付明治三十八年四月十九日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
上告趣意擴張書第二點ハ假リニ第一點ノ理由ナシトスレハ腐敗シタル酒類ノ免除ヲ求メ得ヘキハ酒造税法ニヨリ營業人ニ許容セラレタル權利行爲ナルヲ以テ酒造税法二十五條ニヨリ處罰スヘキ行爲ハ元來造石税ヲ課セラルヘキモノニアラサルモノヲ以テ課税物件ニ付キ免稅事項ノ發生シタルモノ、如ク裝ヒ其免稅ヲ得又ハ得ントシタル場合ニシテ本件事實ヲ以テスレハ九石八斗六升八合ノ内和水量ノミニ付同條ヲ適用シ處斷スヘキモノナルニ原院ハ其總量ニ付キ造石税五倍ノ罰金ニ處セラレタルハ右法條ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ原判決ヲ閱スルニ原院ハ被告カ酒類製造ノ免許ヲ受ケ村上梅松ヲ營業代理人トシ被告ノ酒造場ニ於テ營業ニ從事中梅松ハ明治三十七年十二月二十二日收稅官吏ノ査定ヲ受ケタル酒精分二十度以下ノ清酒十一石餘ニ一石ニ付一斗一升二合ノ割合ニテ水ヲ混和シ若干ヲ販賣シタルニ其殘餘ノ清酒九石八斗六升八合ハ腐敗シタルヲ以テ同年六月二十六日梅松ヨリ右腐敗酒ノ造石税免除ヲ申請スルニ方リ前記和水平ノ事實ヲ隱蔽シ宛カモ査定ヲ受ケタル儘ノ清酒カ和水以外ノ原因ニテ腐敗シタルカ如ク記載アル免稅申請ヲ八屋稅務署長郡留良一ニ提出シ以テ腐敗酒九石八斗六升八合ニ對スル造石税ノ免

除ヲ得ント爲シタルモ遂ニ事發覺シタリトノ事實ヲ認定シタルモノニシテ即チ被告カ右九石八斗餘ノ免稅ヲ得ンカ爲メ故ラニ水ヲ混和シタリトノ事實ニアラス水ノ混和ニ因リ酒ノ腐敗ヲ來タシ免稅ヲ願出ツルニ方リ混水ノ事實ヲ隱蔽シタリトノ事實ナレハ九石八斗六升八合中混水ノ量ヲ控除セル清酒ノ純量ハ眞ニ腐敗シタルモノナレハ之ニ關シテハ自ラニ事故ヲ作爲シ又ハ詐術ヲ構ヘタルモノト云フヲ得ス而シテ酒造税法第二十五條ハ同時ニ免稅ヲ出願シタル清酒ニ付テハ其一部ニ關シ免稅ヲ得ンカ爲メ特ニ不正ノ手段ヲ運ラシタルトキハ其手段ニ關係ナキ他ノ部分ニ付テモ犯罪ノ成立スルモノトシテ之ヲ罰スルノ法意ニアラサルコトハ其明文ニ徵スルモ將々之ヲ條理ニ照ラスモ疑ヲ挾ムノ餘地ナキモノニシテ又當院ノ判例トシテ認ムル所ナリ故ニ本件ノ事實ニ在リテハ九石八斗六升八合中ニ包含セル水分ニ相當スル既販賣ノ清酒ニ付キ犯罪成立スヘキモノナルニ原院ハ九石八斗六升八合ニ付キ犯罪ノ成立スルモノトシ其全造石數ノ稅額五倍ノ罰金ヲ被告ニ科シタルハ不法ニシテ破毀ヲ免レヌ而シテ原院ハ十一石餘ノ清酒ニ混和シタル水ノ割合ヲ明示シタルトモ現存九石八斗六升八合ニハ果シテ右割合ノ水量ヲ包含スルヤ否ヤノ點ニ付テハ事實ヲ確定セサルヲ以テ擬律ノ錯誤トシテ當院ニ於テ直ニ判決スルヲ得サルモノナリ

●煙草專賣法違犯事件

明治三十八年(九)第六三四號  
明治三十八年六月六日宣告

判決要旨

一、煙草元賣捌人ト煙草小賣人トハ各販路ノ區域ニ法律上ノ制

煙草專賣法第四十九條ノ適用

限アリテ煙草元賣捌人ハ煙草小賣人ヲ兼業スルコトヲ得ス  
從テ煙草元賣捌人ハ費消者ニ對シテハ煙草賣捌人ニ非ス又  
煙草小賣人ハ其同業者タル小賣人ニ對シテハ煙草賣捌人ニ  
非ス  
一、煙草小賣人カ元賣捌人ヨリ仕入レタル煙草ヲ更ラニ同業者  
タル他ノ小賣人ニ販賣シタル所爲ハ煙草專賣法第四十九條  
ノ犯罪ヲ構成ス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 古矢松次郎

右煙草專賣法違犯被告事件ニ付明治三十八年四月十五日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法  
トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルヲ左ノ如シ  
上告趣意書ハ本件ニ付原院ノ認定シタル事實ハ被告ハ煙草小賣人ニシテ元賣捌人タル萩原菊之助  
ヨリ一割二分引ノ割合ヲ以テ買受タル「リリー」五千九百箇「チエリ」二千箇ノ煙草ヲ他ノ小賣人タ  
ル片島トヌ外四十三名ヘ二割引ノ價格ニテ賣渡シタリト云フニアリ以上ノ事實ヲ以テ原院ハ明治  
三十七年法律第十四號煙草專賣法第二十二號第四十九條ニ該當スル犯行ナリト斷定シタリ今煙草  
專賣法第二十二條ヲ閱スルニ「製造煙草ハ政府又ハ政府ノ指定シタル煙草元賣捌人若クハ煙草小

賣人ニ非サレハ之ヲ販賣スルコトヲ得ス」トアリ又同法第四十九條ニハ「煙草賣捌人ニ非スシテ製  
造煙草ヲ販賣シ又ハ販賣ノ準備ヲ爲シタル者ハ十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ其販賣ニ係ル製  
造煙草ハ之ヲ沒收ス」ト規定シタリ右規定ニ依レハ煙草專賣法第二十二條ノ犯罪ノ主體タルヘキ  
者ハ「煙草元賣捌人若クハ煙草小賣人ニアラサル者」タルヲ要シ同法第四十九條ニ於テハ「煙草賣  
捌人ニ非サル者」タルヲ要スルコト明ナリ抑モ煙草專賣法ヲ通讀スルニ同法中煙草元賣捌人ナル  
文字各所ニ使用シアリテ殊ニ同法第二十四條第六十三條第六十五條ニ記載シアル煙草賣捌人ナル  
文字ニ依リ推究スルトキハ同法ニ煙草賣捌人ト稱スルハ煙草元賣捌人並ニ小賣人ヲ併セテ指示シ  
タルモノナルコトハ明瞭一點ノ疑ナキ所ナリトス果シテ然ラハ同法第四十九條ノ規定ハ煙草元賣  
捌人又ハ小賣人ニモアラサル者(即チ煙草賣捌人ニ非サル者)換言スレハ煙草ニ關シテ何等ノ免許  
ヲ有セサル者カ煙草ヲ販賣シタル場合ヲ處罰セントスル法意ナリト解釋セサルヘカラス殊ニ明治  
三十八年二月大藏省令第四號煙草賣捌規則ヲ參照スルニ同令中ニ煙草元賣捌人並ニ小賣人ニ關ス  
ル事項カ規定シアルニ徴スレハ益々以テ煙草專賣法中ノ煙草賣捌人ナル文字ハ元賣捌人並ニ小賣  
人ヲ併稱セシモノナルコトヲ確ムルヲ得ヘシ以上ノ論旨ニシテ誤リナシトセンカ本件公訴事實ハ  
果シテ原院斷定ノ如ク煙草專賣法第二十二條第四十九條ニ違反抵觸スルカ上告人ノ大ニ疑フ所ナ  
リトス原院モ認ムル如ク上告人ハ煙草小賣人ナリ按スルニ煙草小賣人カ政府指定ノ價格ヨリ減少  
又ハ増加シテ煙草ヲ消費者ニ販賣スルコトハ煙草專賣法第二十三條ノ禁スル所ニシテ同法第五十  
條ニ依リ罰セラルヘキ行爲ニ屬スト雖モ小賣人カ他ノ小賣人ニ對シ煙草ヲ販賣スルコト即チ本件上

煙草專賣法第四十九條ノ適用

告人ノ行爲ノ如キハ何等ノ價格ヲ附スルニ拘ラス之ヲ違反トシテ罰スヘキ規定ノ存在スルコトナシ勿論本件上告人ノ行爲ハ俗ニ所謂御賣ニ類スル觀アリト雖モ素ヨリ上告人ハ元賣捌人ノ資格ヲ僭稱シテ直接ニ政府ヨリ煙草ノ賣捌ヲ受ケ之ヲ小賣人ニ販賣シタルモノニ非スシテ而カモ政府指定ノ元賣捌人ヨリ買受ケ之ヲ他ノ小賣人ニ販賣シタル事實ニ過キサルヲ以テ結局其賣買價格ノ如何ニ拘ラス政府カ煙草賣捌ニ關シテ維持セントスル法定ノ秩序ヲ蹂躪スルノ結果ヲ生スルノ虞モ之ナクシテ只自己ノ利害ニ關スル事柄ニ止マルヲ以テ斯クノ如キ行爲ニ對シテハ違反行爲トシテ罰スヘキ規定ノ設ケナキハ當然ノ理論ナリト云ハサルヘカラス是ニ因テ之ヲ觀レハ煙草專賣法第二十二條及同第四十九條ハ元賣捌人又ハ小賣人ニモアラサル無免許者カ製造煙草ヲ販賣シタル場合ニ適用セラルヘキ條規ニシテ上告人ノ如キ小賣人カ假令原院認定ノ如キ行爲ヲ爲シタリトスルモ何等同法違反ノ制裁ヲ受クヘキ限リニアラサルヲ以テ原判決ハ法則ヲ誤解シ擬律ノ錯誤アル不當ノ裁判ナリトスト云フニ在リ

○依テ按スルニ煙草專賣法第四十九條ニ煙草賣捌人ニ非スシテ云々トアルハ煙草元賣捌人ニモ非ス亦煙草小賣人ニモ非ストノ意ナルコト論旨ノ主張スル所ノ如シ然レトモ煙草元賣捌人ト煙草小賣人トハ各販路ノ區域ニ於テ法律上ノ制限アリテ煙草元賣捌人ハ煙草小賣人ヲ兼業スルコトヲ得ス從テ煙草小賣人ハ煙草元賣捌人タルコトヲ得ザルノ筋合ナルカ故ニ煙草元賣捌人ハ消費者ニ對シテ煙草賣捌人ニ非サル者ト云フヘク又煙草小賣人ハ其同業者タル小賣人ニ對シテ煙草賣捌人ニ非サルモノト云フコトヲ得ヘシ今原判決ニ於テ認定スル事實ヲ見ルニ被告人ハ元來煙草小賣人ニシテ其同業者タル煙草小賣人ニ對シテ製造煙草ヲ販賣シタルモ

ノナレハ煙草元賣捌人ノ資格ヲ侵シタルモノト云フヘク而シテ煙草元賣捌人ノ資格ヲ有セスシテ其業ヲ營ミタル者ハ之即チ煙草賣捌人ニ非スシテ製造煙草ヲ販賣シタルモノナルヲ以テ原院カ其所爲ニ對シテ煙草專賣法第四十九條ヲ適用シテ之ヲ處斷シタルハ失當ニアラス本論旨ハ理由ナシ

●竊盜事件 明治三十八年(レ)第六五二號 明治三十八年六月六日宣告 (棄却)

判決要旨

一 控訴ノ取下ハ控訴裁判所カ取下ノ事實ヲ知リタル時始テ其效力ヲ生スルモノトス從テ被告人ヨリ控訴取下ノ書面ヲ監獄署ニ提出シ又ハ其書面カ控訴裁判所ノ檢事局ニ到達スルモ裁判所自ラ之ヲ知ラサルキハ未タ其效アリト謂フヲ得ス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院  
被告人 坂井 音吉

右竊盜被告事件ニ付明治三十八年四月二十四日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ原院檢事長藤堂融ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書ハ本件ハ明治三十八年三月十五日大阪地方裁判所カ言渡シタル判決ニ對シ同月二十日

控訴取下ノ效力發生時期

被告ヨリ控訴ヲ申立テ事件當院ニ繫屬中同年四月二十日被告ハ控訴取下願ト題スル書面ヲ堀川監獄ニ提出シ同月二十二日該書面ヲ當院檢事局ニ於テ受理シ爰ニ控訴ハ取下ニ依リ消滅シタルニモ拘ハラヌ越ヘテ同月二十四日ニ至リ原院ハ被告ニ對シ控訴棄却ノ言渡ヲナシタルモノニシテ即チ第一審判決確定ノ後ニ於テ同一事件ニ付判決言渡ヲ爲シタル不法アルモノト思料スト云フニ在リ

○依テ按スルニ控訴取下ハ被告人ノ控訴ニ係ル事件ニ對シテ任意ニ控訴裁判所ノ繫屬ヲ離脱セントスルニ在ルモノナレバ控訴裁判所ニ於テ取下ノ事實ヲ知リタル後チニ非ラサレハ其效力ヲ生スヘキモノニ非ラス單ニ被告人ヨリ控訴取下ノ書面ヲ監獄署ニ提出シ又ハ其書面カ控訴裁判所ノ檢事ニ到達シタルノミヲ以テ其效アリト謂フ可ラス本件ニ付原院ノ公判始末書ヲ閱スルニ原院ニ於テ判決ノ言渡ヲ爲シタルハ明治三十八年四月二十四日午前九時ニシテ被告人ヨリ提出シタル控訴取下願ノ原院受付書記ノ手許ニ到着セシハ同年四月二十四日午後四時ナリ即チ判決ノ言渡ニ後レルコト約七時間ナリトス然ラハ即チ原院ハ其未タ控訴取下ノ事實ヲ知ラサル前即チ控訴事件ノ繫屬中正式ノ判決言渡ニ依リ其繫屬ヲ絶ツノ手續ヲ行フタルモノナレハ何等違法ノ廉アルコトナシ判決言渡前被告人ヨリ提出シタル控訴取下ノ書面原院檢事ノ手元ニ到達セシト云フノ事實ハ原院決ヲ破ルノ理由トナラス原院檢事長ノ上告ハ不成立

●公文書偽造行使私印盜用詐欺取財事件

明治三十八年(九)第六一九號  
明治三十八年五月二十五日宣告 (棄却)

判決要旨

一 刑法第三百九十條第二項ニ依リ犯罪ノ輕重ヲ比較スルニハ加重減輕ノ情狀アルモノハ先ツ加重減輕ヲ適用シテ刑期罰金額ノ範圍ヲ定メ然ル後之ヲ比較スルヲ以テ當然ノ順序トス

(參照) 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ依テ處斷ス(刑法第三百九十條)

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院  
被告人 吉田 重明

右公文書偽造行使私印盜用詐欺取財被告事件ニ付明治三十八年四月十五日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書第二點ハ文書偽造ニ因ル詐欺取財ハ事實上ノ一罪ナリ故ニ刑法第三百九十條第二項ニ依リ文書偽造ニ對スル法條所規ノ刑ヲ科スル場合モ尙ホ財產ニ對スル犯罪ノ範圍ヲ逸出セス左スレハ刑法第八十六條ハ財產ニ對スル罪ヲ犯シタルモノニ況ク適用スヘキ法條ナルヲ以テ原判決認定ノ如ク被害者ニ損害全部賠償ヲ爲シタル上ハ刑法第八十六條ヲ適用シ其刑ヲ減輕スヘキモノナ

犯罪輕重ノ比較

ルニ原判決茲ニ出テサルハ擬律ノ失當ヲ免レサル不法裁判ナリト云フニ在リ○因テ按スルニ刑法第三百九十條第二項ニハ「因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス」トアルヲ以テ欺詐取財罪ト文書偽造罪トノ輕重ヲ比較スルニハ本刑ヲ加重減輕スヘキ犯罪ノ情狀アル場合ト雖モ同條第一項ノ本刑ト文書偽造ノ本刑トヲ比較シ一ノ重キヲ定ムルモノ、如シト雖モ其「各本條ニ照シ」トアルハ即チ偽造ノ各本條ヲモ適用シ何レカ一ノ重キモノヲ選擇シテ之レニ從ヒ處斷スヘシトノ趣旨ニ外ナラスシテ本刑ヲ加重減輕スヘキ犯罪ノ情狀アルモノ之ヲ顧ミス單ニ本刑ノミヲ標準トシテ以テ其輕重ヲ比較スヘキトノ趣旨ナラサルコトハ同條項ニ「重キニ從テ處斷ス」トノ文詞アルニ徴スルモ自ラ明カナリトス蓋シ同條項ニ依リ犯罪ノ輕重ヲ比較スルニハ加重減輕ノ情狀アルモノハ先ツ加重減輕ノ法條ヲ適用シテ刑期罰金額ノ範圍ヲ定メ然ル後之ヲ比較スルハ當然ノ順序ニシテ其輕重ヲ比較シタル後加重減輕ヲ爲スハ擬律ノ順序ヲ顛倒シタルモノト云ハサルヘカラス何トナレハ加重減輕ノ情狀アルモノニ對シテハ加重減輕ノ法條ヲ適用シテ加重減輕ヲ爲シタル後第三百九十條第二項ヲ適用スルニアラサレハ其輕重ヲ知ルコト能ハサルハ勿論加重減輕ノ法條ヲ適用セスシテ先ツ同條項ヲ適用スルモノトセハ已ニ一ノ重キモノト認メラレタル罪却テ輕シト認メラレタルモノヨリハ更ニ輕キ刑ニ處セラルハノ結果ヲ生スルコトアリテ同條項ニ所謂重キニ從テ處斷ストノ趣旨ニ背戾スルヲ以テナリ故ニ原院カ被告ニ於テ事實發覺前官ニ自首シ被害者ニ損害ノ全部ヲ賠償シタル事實ヲ認メナカラ法律適用ノ部ニ於テ詐欺取財ノ點ニ付刑法第八十六條ヲ適用セス同法第三百九十條第二項ニ依リ詐欺取財罪ト文

書偽造罪トノ輕重ヲ比較シタル後同法第八十五條ヲ適用處斷シタルハ即チ擬律ノ誤錯ニシテ原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトス（本院明治三十八年（レ）第三四八號小切手偽造行使私印盜用詐欺取財事件同三十八年（レ）第五五八號公印盜用公文書偽造行使詐欺取財事件判例參照）  
●私書偽造行使公證文書偽造行使事件 明治三十八年（レ）第四一七號（棄却）

判決要旨

一、裁判ニ取掛ル前書類ノ送達ト出頭トノ間ニ二日ノ猶豫期間ヲ以テ訴訟關係人ニ呼出狀ヲ發スヘキ刑事訴訟法第二百五十七條ノ規定ハ第一回ノ公判ニ限り之ヲ適用スヘク第二回以後ノ公判ニ適用スヘキモノニアラス

（參照）控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ（刑事訴訟法第二百五十七條）

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院  
被告人 中村和吉 辯護人 高木益太郎  
外二名

右三名ニ對スル私書偽造行使公證文書偽造行使被告事件ニ付明治三十八年三月九日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ各被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

被告中村和吉上告趣意擴張書ハ原院ハ本件第三回公判タル明治三十八年三月四日午前十一時ノ期日呼出狀ヲ辯護人小久江美代吉半田幸助ニ對シテ同日ノ猶豫ナクシテ同年三月三日ノ午前ニ送達シ(記録三八四三八五丁)右期日ニ同辯護人等欠席ノ儘審理ヲ始終セラレタルハ違法アルモノニシテ之レニ基キ得タル判決ハ亦破毀ヲ免レサルモノナリト云フニ在リ○依テ按スルニ原院カ本件第三回ノ公判ヲ開クニ方リ小久江半田兩辯護人ニ對シテ出頭迄ニ二日ノ猶豫ヲ與ヘサル呼出狀ヲ送達シ兩辯護人闕席ノ儘審理ヲ遂ケタルコトハ寔ニ所論ノ如シ然レトモ刑事訴訟法第二百五十七條第二項ニ所謂「呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ」トノ規定ハ第一回ノ公判ヲ開クトキニ於テ適用セラルヘキモ本案ノ如ク第二回以上ノ公判ヲ開クトキニ於テハ適用セラルヘキモノニアラス何トナレハ右呼出狀ノ送達ト出頭トノ間ニ二日ノ猶豫ヲ存スヘキ規定ヲ設ケタル主タル理由ハ訴訟關係人ヲシテ辯論ノ準備ヲ爲サシムルカ爲メナルヲ以テ始テ公判ヲ開クニ方リテハ之ヲ適用スヘキ必要アルコトハ論ヲ俟タズト雖モ既ニ辯論ノ準備ヲ爲スヘキ猶豫ヲ與ヘ公判ヲ開キタル以上ハ其後ノ續審ニ於テ重テ之レカ準備ヲ爲サシムヘキ必要ナク隨テ續審ノ間ニ二日ノ猶豫ヲ與フヘキ理由ナケレハナリ果シテ然テハ原院カ送達シタル所論ノ呼出狀ハ適法ニシテ依テ開カレタル公判ハ有效ナルヲ以テ本論旨ハ其理由ナシ

誣告教唆事件

明治三十八年(れ)第一五八號  
明治三十八年二月二十八日判決 (棄却)

判決要旨

一、誣告ハ必スシモ告訴ノ方法ヲ以テスルコト要セス苟モ不實ノ事實ヲ構造シ當該官吏ニ申告スルニ於テハ其ノ採レル手段ノ如何ナル方法タルヲ不問又自己ノ名義ヲ以テスルト他人ノ名義ヲ以テスルトヲ不問誣告罪ヲ構成ス

第一審 浦和地方裁判所

第二審 東京控訴院

被告人 鈴木久太郎

辯護人 天野 敬一

右誣告教唆被告事件ニ付明治三十八年一月二十三日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

辯護人天野敬一ノ上告趣意擴張書第三點ハ原判決事實ノ摘示中ニアル鈴木イシヨリ大塚吉五郎ニ對スル告訴事實八個中金四百十九圓ノ領收書以外ノモノハ總テイシノ權利ニ屬スルモノナリ(縱令二三虛偽ノモノアリシニセヨ)從テ告訴ノ權利ハ刑事訴訟法上鈴木イシニ屬スルモノナリ故ニ假リニ被告カイシノ名義ヲ以テ告訴ヲナシタリトスルモ其告訴ハ告訴權ヲ有セサルモノ、ナシタル告訴ニシテ法律上何等ノ效力ヲ有セサルモノナリ何等ノ效力ヲ有セサル告訴ハ檢事ニ於テ受理スヘキモノニアラス從テ偶々大塚吉五郎ノ爲ニ迷惑ヲ及ホシタルコトアラシムモノ之ヲ以テ直ニ告訴ト云フヲ得サルカ故ニ其結果トシテ又誣告罪ノ成立スルコトナキモノナリ然ルニ原判決ハ被告ノ所爲ヲ以テ誣告罪ニ擬シタルハ失當ノ判決ナリト思料スト云ニ在リ○依テ按スルニ刑法第三百五

誣告罪ノ成立○邸内ノ意義



十五條ニ「不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シ處斷ス」トアリテ其所謂ル誣告トハ虛構ノ事實ヲ以テ犯罪搜索ノ職權ヲ有スル官吏ニ申告スルコトヲ意味スルヲ以テ苟モ他人ニ犯罪アリトノ不實ノ事實ヲ構造シ或ル方法ヲ以テ之ヲ當該官吏ニ申告スルニ於テハ誣告罪ハ完全ニ成立スヘク其申告ハ告訴ノ形式ヲ以テスルト告發ノ形式ヲ以テスルト自己ノ名義ヲ以テスルト他人ノ名義ヲ以テスルトハ犯罪ノ成立ニ何等ノ關係ヲ有スルコトナシ何トナレハ其申告ハ何レノ場合ニ於テモ其犯罪ニ對スル當該官吏ノ處分ヲ促スニ至ルヘク罪ナキ被誣告者ヲ刑事ノ訴追ヲ受クルノ危險ニ陷ルハ結果ヲ生スヘケレハナリ故ニ本件被告カ大塚吉五郎ニ竊盜ノ所爲アリトノ不實ノ事ヲ記載シタル大塚イシ名義ノ告訴狀ヲ浦和地方裁判所檢事局ニ提出シタル以上ハ誣告罪ハ完全ニ成立スヘク告訴狀ノ大塚イシ名義ナルヲ理由トシテ被告ニ誣告罪ノ責任ナシト主張スルコトヲ得サルモノトス故ニ本論旨モ亦タ理由ナシ

竊盜事件 明治三十八年(レ)第四〇六號 (破却)

判決要旨

一 邸トハ家屋其他建造物ノ存スル構内ノ土地ヲ云フ從テ邸内ナル文字ハ建造物内ナル文字ト同義ニ解スルコトヲ得ス

第一審 福岡地方裁判所久留米支部 第二審長崎控訴院  
被告人 深町喜左衛門 辯護人 大崎利

右竊盜被告事件ニ付明治三十八年三月一日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ辯護人大崎利ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
上告趣意書ハ要スルニ原判決ニハ被告ハ明治三十八年一月三十一日其肩書地村ナル牛島寅次郎邸内ニ忍入り同人所有ノ牡牝鶏各一羽ヲ竊取シタリトアルノミニテ被告ノ竊取シタリトスル物件所在ノ明示ヲ欠ク不法アリ證據理由中牛島寅次郎盜難届ニ自宅南側鶏小屋ニ於テ云々トアルモ其鳥小屋ナルモノハ人ノ看守スル建物ナルヤ將タ逸走ヲ防ク迄ノモノナルヤ知ルヘカラサルヲ以テ刑事訴訟法第二百六十九條第九號ニ違背シタルモノナリト云フニ在リ○依テ按スルニ邸トハ家屋其他ノ建造物ノ存スル構内ノ土地ヲ云フモノナレハ邸内ナル文字ハ建造物内ナル文字ト同義ニ解スルヲ得ス而シテ原判決ヲ閱スルニ事實理由トシテ被告ハ明治三十八年一月二十二日其肩書地村ナル牛島寅次郎邸内ニ忍入り同人所有ノ牡牝鶏各一羽ヲ竊取シタルモノナリトアルノミニテ家屋其他ノ建造物内ニテ犯シタル罪ナルヤ否ヤ又其贖額ハ五圓以上ナルヤ否ヤ知ルヲ得ス然ルニ原院カ右所爲ニ對シ刑法第三百六十六條第三百七十六條ヲ適用シタルハ事實理由ノ不備ニシテ破毀ヲ免レサルモノトス

特許法違犯并附帶私訴事件 明治三十八年(レ)第六三八號 (破毀)

判決要旨

一 私訴ノ原因ヲ變更シテ犯罪ナラサル事實ニ基キ裁判ヲ爲シ

私訴ノ原因○私訴ノ實行○私訴ノ消滅○私訴ノ當事者

得へキハ刑事訴訟法第二百二十五條ノ明認スル所ナリ  
一私訴ノ相手方ハ公訴ノ被告人ノミニ制限シタル法文ナケレ  
ハ公訴ヲ受ケサル者ト雖モ被告人トシテ私訴ヲ提起スルヲ  
妨ケス

説明

私訴ノ私訴ナル題目ノ本ニ講究スヘキモノ二三ニ止ラスト雖トモ本論ニ於テハ  
(一)私訴權ノ發生(二)私訴權ノ行使(三)私訴權ノ消滅ニ付キ少シク説明スル所アラシ  
トス  
(一)私訴權ノ發生 ①私訴權ハ犯罪行為ニ因リ發生ス然レトモ私訴ノ實質ハ損害賠償  
債權ニシテ私訴ハ此ノ賠償債權ノ目的ヲ達スル一ノ手段ニ過キサルカ故ニ犯罪行  
爲ニ依リ私訴權ノ發生ヲ見ンニハ其ノ犯罪行為カ被害者ノ私權ヲ侵害シタルノ  
結果ヲ生スルコトヲ必要トス ②犯罪行為アリト雖モ被害者ノ私權ヲ侵害スル所  
ナクハ私訴權ヲキナリ又タ苟モ之レアルニ於テハ其ノ被害者ノ私權ヲ侵害スル所  
人ナルト將タ法人ナルトヲ不問ナリ ③私訴權ハ犯罪行為ニ依リテ發生スト雖モ其ノ所謂犯罪行為ナルモノハ實體的眞  
私訴權ハ犯罪行為ニ依リテ發生スト雖モ其ノ所謂犯罪行為ナルモノハ實體的眞

實即チ眞ノ事實ニ於テ犯罪行為アリタルコトヲ不要形式上ノ犯罪行為即チ刑事  
訴訟法上犯罪行為ト認メラシ公訴ヲ提起シタル以上ハ假令眞ノ事實ニ於テ無罪  
若クハ免訴ノ言渡ヲ受クヘキ事項ト雖トモ私訴權ノ發生ニ妨クルコトナシ  
私訴權ノ發生ハ犯罪行為ニ依ルト雖モ其ノ犯罪行為ノ完成スルコトヲ要セス苟  
モ其ノ行為ニ未遂犯ノ成立シ得ヘクハ私訴發生ノ原因タルヘキ犯罪ハ茲ニ完  
成スルモノニシテ之ニ由テ私訴權ノ發生スヘキハ論ヲ待タサルナリ  
私訴ニ似テ非ナルモノヲ要償ノ訴トナス要償ノ訴ハ刑事訴訟法第十三條乃至第  
十四條ノ定ムル所ナリ明文ノ規定スル處ニ依レハ其ノ原因二アリ其一ハ告訴  
人ノ告發人又ハ民事原告人カ惡意又ハ重過失ヲ以テ不當ノ告訴告發ヲナシ爲メ  
ニ被告人ヲシテ刑事裁判所ノ拘束ヲ受クルニ至ラシメタルキハ被告人ハ之レ  
ニ因テ生シタル損害ヲ此等ノ惡意若クハ重過失者ニ向テ要求スルモノ是ナリ其  
ノ二ハ告訴人〇告發人又ハ民事原告人カ惡意若クハ重過失ニ因リ被告事件ノ過  
實ノ申立ヲ爲シ爲メニ被告人ニ不利益ヲ來ストキ此等過實ノ申立者ニ向テ要償  
スルコトヲ得ル是ナリ  
要償ノ訴ト私訴トノ異ナル所ハ(一)要償ノ訴ハ其ノ發生原因カ以上二ヶノ場合ニ  
限ラレ私訴ハ此等ノ制限ニ羈束セラレハコトナク苟モ犯罪ニ依リ生シタル損害  
ナルトキハ凡テ此ノ訴ノ目的タルコトヲ得(二)私訴ハ犯罪行為ヲ原因トスル損害

私訴ノ原因〇私訴ノ實行〇私訴ノ消滅〇私訴ノ當事者





ム(一)拋棄又ハ和解(二)確定判決(三)時効是ナリ(一)ノ消滅原因ニ付テハ敢テ異論ヲ  
生セサルモ第三ノ原因ニ至テハ其ノ適用上ニ一大難問横ハリ從來學者ノ論爭止  
マサル處ナリ一難問トハ他ナシ私訴ノ時効ヲ經過シタルトキハ被害者ハ普通民  
事上ノ損害賠償トシテ民事裁判所ニ訴フルコトヲ得ルヤ否ト云フ是ナリ余輩ハ  
今此問題ニ對シ從來ノ學ヲ舉テ之ヲ讀者ニ紹介スルノ余白ヲ有セス唯余輩ノ正  
ト信スル所ヲ指摘シ聊讀者ノ參考ニ供スルノミ  
本問題ニ對シ解決ヲ與ヘシニハ私行ノ本質タル實體法上ノ法律關係ノ性質ヲ明  
ニスルコトヲ要ス按スルニ已ニ前論ニ說明スルカ如ク私訴ノ實體的法律關係ハ  
不法行為ニ依ル債權關係ナリ即チ犯人ハ不法行為ニ依リテ生シタル債權ノ義務  
者ニシテ被害者ハ不法行為ニ依リテ生シタル債權ノ權利者ナリ而シテ今之ヲ民法  
者ハ之レニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スル責メニ任ズテ他人ノ權利ヲ侵害シタル  
夫ニ依リ他人ノ權利ヲ侵害スルモノハ内ニ獨リ犯罪ヲ構成スル場合ヲ除外セザ  
ルカ故ニ本條ノ適用ハ犯罪行為ノ爲メニ他人ノ權利ヲ侵害スル場合ト否トヲ不  
問テ不法行為ノ爲メニ他人ノ權利ヲ侵害スルノ責メ凡テ賠償ノ責任ヲ負ハシム  
ルノ趣旨ナルコトハ敢ヘテ疑ヲ挿ル餘地アルヲ見サルナリ果シテ然ラハ犯罪  
罪行為ニ依リ他人ノ權利ヲ侵害スルニ因テ生スル法律關係ハ是レ民法上ノ所謂

不法行為ニ基ク債權關係ノ一ナルコトヲ了知スルニ足レリ已ニ犯罪行為ニ因テ  
生スル損害賠償ノ債權關係カ民法上ノ不法行為ノ債權關係ノ範圍ニ屬スヘキモ  
ノトセンカ此債權ノ消滅時効ハ民法第六十七條以下ノ規定ニ從フヘク苟モ同  
條以下所定ノ期間ヲ經過セサル以上ハ假令私訴ノ時効期間ヲ經過スルモ普通民  
事ノ訴トシテ之ヲ請求スルニ付キ法律上何等ノ妨ナキヲ信スルナリ

(參照) 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贖物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス(刑事訴訟法  
第二條)

第一審 大阪地方裁判所

第二審 大阪控訴院

公訴私訴上告人 青木清太郎

辯護人 白川 彦吉

私訴上告人 日本ペイント製造株式會社

右法律上代理人 田坂初太郎

私訴被上告人 田坂初太郎

右法律上代理人 岡部 シノブ

私訴被上告人 岡部 シノブ

外一名

右特許法違反被告事件並ニ之ニ附帶スル私訴ニ付明治三十八年四月十日大阪控訴院ニ於テ言渡シ  
タル判決ヲ不法トシ被告清太郎辯護人白川朋吉被告市太郎辯護人大鐘彦市ハ公私訴ノ判決ニ對シ  
民事原告法律上代理人田坂初太郎ハ私訴判決ニ對シ各上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十  
三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

民事原告代理人田坂初太郎ノ私訴上告趣意書ハ原裁判所ハ「公訴ニ附帶シテ私訴ヲ提起センニハ

私訴ノ原因○私訴ノ實行○私訴ノ消滅○私訴ノ當事者

其私訴ノ原因公訴ノ事實範圍内ニ屬セサルヘカラサルコトハ刑事訴訟法上私訴ニ關スル規定ニ照シ明瞭ナリ然ルニ民事原告人カ被告阿部市三郎ニ對スル私訴ノ原因ハ其公訴ニ於ケル被告宇津市太郎青木清太郎カ日本「ペイント」製造株式會社ノ專有スル特許權ヲ侵害シテ亞鉛華精製方法ヲ竊用シタリトノ事實範圍内ニ屬セス其公訴上ニハ何等關係タモ有セサル被告阿部市三郎阿部市三郎カ前記被告清太郎市太郎ニ對スル公訴ノ行為ニ共謀參加シタリト云ヘル別箇ノ事實ニ屬スルヲ以テ其私訴ハ不適法ニシテ許容スヘカラサルモノトス」ト判決シタルハ刑事訴訟法上私訴ニ關スル規定ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリ何トナレハ被告上告人タル阿部市三郎阿部市三郎ニ對シテハ公訴ノ提起ナシト雖モ青木清太郎宇津市太郎特許法違反公訴事件ニ依リ右兩名カ宇津市太郎青木清太郎ト共謀シテ上告人ノ特許權ヲ有スル亞鉛華精製法ヲ竊用シタルコトハ原公訴判決ニ揭示セラレタル理由ニ依リ明瞭ナリ即チ原院ハ公訴判決理由ニ於テ「被告清太郎市太郎ハ共謀シテ大阪市西區西野下ノ町六十七番地大阪阿部製品所ニ於テ明治三十三年八月頃ヨリ同三十七年三月頃ニ至ル間意思繼續シテ東京府荏原郡品川町日本ペイント製造株式會社カ特許ヲ受ケ居ル硫黃末ヲ使用シ亞鉛華ヲ精製スル方法ヲ竊用シテ亞鉛華ヲ製造シタルモノトス」ト認定セラレタリ斯ノ如ク明治三十三年八月頃ヨリ同三十七年三月頃ニ至ル八月長キ間意思ヲ繼續シテ大阪阿部製品所ニ於テ同所ニ雇ハレ居リタル青木清太郎宇津市太郎カ其雇主ノ爲メ上告人ノ特許方法ヲ竊用シ亞鉛華ヲ製造シタリトセハ（原判決中ニ宇津市太郎ノ肩書ニ阿部製品所被雇人ト記載アリ又被告清太郎カ東京ヨリ歸リテ同所被雇人トシテ）雇入レラレタル後亞鉛華ヲ燒クコト、ナ

リトノ被告市太郎ノ豫審調書ヲ引用シアリ）其雇主タル阿部市三郎ハ共謀シタルコトハ勿論ニシテ又亞鉛華精製法ハ上告人ノ特許權ヲ有スルモノナルコトハ特許公報ニ據リ之ヲ揭示シアルカ故被告上告兩名ハ之ヲ知ラスト云フヲ得ヌ之ヲ知りテ三年八月ノ久シキ其雇人ヲシテ之ヲ竊用セシメタルハ特許法ニ違反スルモノニシテ其事實ハ前述ノ如ク青木清太郎宇津市太郎ノ公訴判決理由ニ明瞭ナリ果シテ然レハ其公訴ヲ提起セラレタルト否ラサルトニ拘ラス清太郎市太郎ノ公訴事實ニ依リ被告上告兩名ハ上告人ノ特許權ヲ侵害シタル事實ハ明瞭ナルカ故ニ此事實ニ依リ被告上告兩名モ上告人ニ生セシメタル損害ヲ賠償スヘキ義務アルハ當然ナレハナリ蓋シ私訴ハ公訴ニ附帶シテ起スヘキモノナリト雖モ必スシモ公訴被告タルモノニ對スルニアラサレハ私訴ヲ提起シ得サルニアラス公訴ノ被告人タルモノニアラスト雖モ他ノ公訴事件ニ依リ其者カ他人ノ權利ヲ侵害シタル事實明瞭ナレハ其公訴事件ニ附帶シテ私訴ヲ提起シ得ヘキハ彼ノ他人ノ地所ヲ冒認シテ販賣シ其登記ヲ爲シタル場合ニ於テ公訴被告タラサル買主ヲモ附帶私訴被告トシテ提起シタル私訴ノ裁可セラル、先例ニ照シテ疑フヘカラスト信スト云フニ在リ○依テ按スルニ私訴ハ犯罪ニ因リテ生シタル損害ノ賠償賍物ノ返還ヲ目的トスル者ナレトモ私訴ノ原因ヲ變更シテ犯罪ナラサル事實ニ基キ裁判スルヲ得ヘキコトハ刑事訴訟法第二百二十五條ノ規定ニ徴シ明カニシテ又刑事訴訟法第二條ハ私訴ノ相手方ヲ公訴ノ被告人ノミニ制限シタルモノニアラス公訴ヲ受ケサル者ヲモ被告トシテ私訴ヲ提起スルヲ得ヘキコトハ當院ノ判例トシテ認ムル所ナリ私訴被上告人阿部市三郎阿部市三郎ハ本件公訴ノ被告人ニアラサレトモ上告人ハ右兩名ヲ公訴ノ被告人タル宇津市太郎青

私訴ノ原因○私訴ノ實行○私訴ノ消滅○私訴ノ當事者

本清太郎ト共同責任者トシテ本件ノ公訴事實ヲ原因トシ私訴ヲ提起シタルコトハ私訴狀及原院公延ニ於ケル上告代理人ノ陳述ニ徴シ明瞭ニシテ本件私訴ハ形式上適法ナルヲ以テ原院ハ之ヲ受理シテ事實ヲ審理シ被告入シゲ市三郎ハ清太郎市太郎ト法律上同一ナル賠償ノ責任アルヤ或ハ私訴ノ原因ヲ適法ニ變更シタル範圍ニ於テ賠償ノ責任アルヤ否ヤヲ決セサル可ラス然ルニ原院ハシゲ市三郎ニ對スル請求ト市太郎清太郎ニ對スル請求トハ各別箇ノ事實ヲ原因トスルモノナリトシ私訴ヲ不適法ナルモノト判決シタルハ不當ニシテ破毀ヲ免レサルモノトス

●私印盜用私書偽造行使事件 明治三十八年(七)第七四三號 (破毀)

判決要旨

一、文書偽造行使印影盜用ノ罪ハ偽造ノ文書ヲ行使シ又印影ヲ不正ニ使用スルニ因リテ成立ス從テ是等ノ犯罪行為ヲ罰セシニハ少クモ其行使又ハ使用ニ着手シタル事實ヲ認定スルコトヲ要ス

第一審 岡山地方裁判所 第二審 廣島控訴院

被告人 安藤多美 外一名

右私印盜用私書偽造行使被告事件ニ付明治三十八年五月十七日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決

ヲ不法トシ被告等ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト如左上告趣意書第一點ハ原判決事實ノ部ヲ閱スルニ被告人多美及ヒ大雲ハ多美ノ父膳右衛門名義ノ金二千圓ノ抵當附ノ借用證書及ヒ登記ヲ爲スニ付テノ代理委任狀ヲ管轄登記所へ提出セント欲シ落合元次ヲシテ其文書ヲ作成セシメタル點ヲ私文書偽造ノ行使未遂トシテ刑法ニ於ケル其法條ヲ適用セラレタリ然レトモ原判決ノ認ムル事實ニ依レハ未タ其借用證書及ヒ委任狀ヲ作成シタル所爲ハ實行ニ到着セス即チ刑法上其所爲ハ無罪タルヲ免カレヌ而モ原院ニ於テ其所爲ニ對シ私文書偽造行使未遂等ノ法條ヲ適用セラレタルハ不法ナリト云ニ在リ○因テ按スルニ文書偽造行使印影盜用ノ罪ハ偽造ノ文書ヲ行使シ又印影ヲ不正ニ使用スルニ因テ成立スルモノニシテ即チ犯罪ノ實行ハ文書ノ行使印影ノ使用ニ存スルヲ以テ單ニ文書ヲ偽造シ又印影ヲ盜捺シタルニ止マリ其行使又ハ使用ニ着手セサルトキハ犯罪ノ豫備タルニ過キスシテ未タ犯罪ノ實行ニ着手シタリト云フヘカラサルヲ以テ右犯罪ノ未遂罪トシテ論スルヲ得ス故ニ偽造文書行使又ハ印影盜用ノ未遂罪トシテ處罰セントスルニハ必ス其行使又ハ使用ニ着手シタル事實ヲ明示スルヲ要ス然ルニ原判決ニ依レハ被告等共謀シテ被告多美ノ實父膳右衛門名義ノ金錢借用證書抵當權設定其他ノ登記申請書委任狀等ヲ偽造シ之ニ膳右衛門ノ實印ヲ盜捺シテ之ヲ落合元次ニ託シ同人ニ右登記申請ノ周旋ヲ依頼シタルヨリ元次ニ於テ登記申請ノ手續ヲ爲サントシタルニ膳右衛門ノ知ル所トナリ同人ノ爲メ其申請ヲ差止メラレ被告等ハ登記ノ目的ヲ達セサルモノナリトノ事實ヲ判示シタルモ被告等カ元次ニ依頼シタルハ登記ニ關スル如何ナル事項ナリヤ又元次カ爲サントシタル登記申請ノ手續トハ

私訴ノ原因○私訴ノ實行○私訴ノ消滅○私訴ノ當事者

如何ナル手續ニシテ同人ハ其手續ヲ爲サンカ爲メ果シテ偽造文書ノ行使又ハ盜捺印影ノ使用ニ着手シタル實アリヤ否明瞭ナラサルヲ以テ原判決ハ此點ニ於テ理由不備ノ不法判決ニシテ破毀ヲ免カレス結局本論旨ハ其理由アルニ歸ス

二四六

●偽造銀貨收受行使事件 明治三十八年(レ)第六八二號 (破毀) 明治三十八年六月九日判決

判決要旨

一、被告事件重罪ナルニ不拘刑事訴訟法第二百七十二條ノ下調手續ヲ爲サスシテ公判ヲ開始スルハ違法ニシテ其ノ手續ハ凡テ無効タルヲ免レズ  
一、被告事件ノ重罪タルヤ將タ輕罪タルヤハ起訴ノ目的タル被告ノ所爲夫レ身體カ重罪タルヤ否ヤニ因テ之ヲ定ム從テ被告事件ニ加重減輕ノ事由アルトキハ其ノ未タ加減セサル以前ノ罪狀ニ因リ其ノ重罪ナリヤ輕罪ナルヤヲ定ムヘキモノトス

(參照) 重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタルヲ否ヤチ問フ可シ(刑事訴訟法第二百三十七條第一項)

第一審 秋田地方裁判所 第二審 宮城控訴院

被告人 阿部 淺松 辯護人 渡邊 澄也

右偽造銀貨收受行使被告事件ニ付明治三十八年五月三日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
被告ノ上告趣意擴張書第二ハ刑事訴訟法第二百三十七條ニ重罪事件ハ裁判長又ハ受命判事ハ書記ノ立會ヲ經テ公判前一應事實ノ取調ヲ爲スヘシトアル法則ニ違ヒ被告ヲシテ右ノ手續ヲ成サス直チニ公訴ヲ受理シ判定ヲ成シタルハ錯誤アル裁判ニシテ上告論旨ノ理由アルコトハ明瞭ニシテ破毀ヲ免レサル不法ノ判決ト思料スト云ヒ」辯護人渡邊澄也上告趣意擴張書第二點ハ控訴院ニ於ケル重罪事件ノ裁判ニ付テハ開廷前被告人ノ下調ヲ爲スヘキコトハ刑事訴訟法第二百三十七條第二百五十八條ノ明定スル所ニ屬ス而シテ控訴ハ事實ノ覆審ナルヲ以テ條一審ニ於テ輕罪ノ刑ニ處セラレタル場合ナルト否トニ拘ハラズ重罪事件ニ付テハ常ニ該手續ヲ踐行セサルヘカラス然ルニ原審ニ於テハ開廷ノ前下調ヲ爲スコトナク直ニ公判ヲ開キ審理判決シタルハ法則ニ背戾スル不法アルモノト信スト云フニ在リ○依テ按スルニ刑事訴訟法第二百三十七條ニ依ルトキハ重罪事件ニ付キテハ裁判所ハ公判開廷前受命判事ヲシテ一應事件ノ下調ヲ爲サシムルコトヲ要スルヲ以テ此手

重罪ノ下調○重罪輕罪ヲ定ムル標準

二四七



續ノ遺漏ハ公判手續ヲ無効ナラシムルト同時ニ其手續ニ基キテ言渡サレタル判決ヲ違法タラシムルノ結果ヲ生スルヤ明カナリ而シテ公判裁判所ニ繫屬スル所ノ被告事件カ刑事訴訟法第二百三十七條ノ意義ニ於テ重罪事件ナルヤ否ヤハ公訴ノ目的タル被告ノ犯罪行為カ重罪ヲ構成スルヤ否ヤニ依リテ定マルヘキモノニシテ被告カ重罪ノ刑ニ處セラレタルヤ否ヤニ依リテ定マルヘキモノニアルス故ニ起訴ノ目的タル被告ノ所爲カ夫レ自體ニ於テ重罪ニ該當スルニ於テハ被告カ未遂年齢酌量減輕等減刑ノ原因ノ存スル爲メ輕罪ノ刑ニ處セラレ、場合ト雖モ被告事件ハ刑事訴訟法第二百三十七條ニ謂フ所ノ重罪事件タルヲ失ハサルヲ以テ公訴裁判所ハ其事件ニ付キ下調ノ手續ヲ踐行セサルヘカラス而シテ本件ニ在テハ被告ハ偽造銀貨收受行使ノ行為アリトシテ起訴セラレ原院モ亦此事實ヲ確定シ被告ニ對シテ刑ヲ言渡シタルモノニシテ被告事件ハ重罪事件ナルコトハ誠ニ明白ナルヲ以テ被告ノ現ニ受クル刑ノ重罪ノ刑ナルト輕罪ノ刑ナルトニ論ナク重罪事件トシテ下調ノ手續ヲ爲サ、ルヘカラサル筋合ナリ然ルニ原院カ此手續ヲ爲サ、リシハ失當ニシテ此點ニ關スル上告論旨ハ理由アリ原判決ハ全部破毀ヲ免カレサルモノトス既ニ此點ヲ以テ原判決ヲ破毀スル以上ハ被告並ニ辯護人ノ其他ノ論旨ニ對シテハ一々説明ヲ爲スノ要ナシ

●詐欺取財並附帶私訴事件

明治三十八年(九)第六八三號  
明治三十八年六月十五日宣告 (棄却)

判決要旨

一、刑事詐欺ニ依リ不動産移轉ノ登記アリタル場合ニ於テハ被

害者ハ抹消登記申請ノ意思表示ニ代ルヘキ判決ヲ求メ之ニ依リ抹消ノ手續ヲ實行シ以テ其ノ權利ヲ回復シ得ルモノトス

第一審 仙臺地方裁判所

第二審 宮城控訴院

公訴私訴上告人 砂澤慶三郎

私訴被上告人 百足周吉

右慶三郎ニ對スル詐欺取財被告事件並ニ之ニ附帶スル私訴事件ニ付明治三十八年五月三日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ服セス被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

第二點ハ不動産登記法ハ所有權得喪ノ要件ニ非スシテ第三者ニ對抗シ得ヘキ公示方法タルコトハ疑ニ本趣意書ニ論シタル如シ故ニ登記法ナルモノハ抵當權ノ如キ賃借權ノ如キ當事者ノ合意ニ因リ不動産上ニ特ニ生シタル權利カ復其合意若クハ其他ノ原因ニ因リ其登記セラレタル事物カ全然消滅ニ歸スヘキ場合ニ存スルモノニシテ登記ヲ抹消シタル以上ハ權利其物ノ本體カ消失スルモノナリ之レニ反シテ不動産所有權ハ不動産ノ存在ヲ認ムル限りハ永久消滅スヘキモノニアラスシテ唯賣買讓渡其他民法ノ規定ニ從ヒ移動スルニ過キス此權利ノ移動ヲ目的トスル登記ハ即チ所有權移動ノ登記是レナリ故ニ所有權移轉ニ關スル登記ハ性質上抹消ノ手續ニ屬スヘキモノナラサルヤ論ヲ俟タヌ好シ假ニ受權利者カ其登記事項ヲ抹消シ得ルモノトスルモ是レニ因リテ不動産所有權

詐欺ニ因ル不動産移轉登記抹消

カ直ニ前所有者ノ爲メニ登記セラルヘキモノナラサルヤ蓋シ明ナリ之レ不動産登記法中所有權移  
轉登記抹消申請ノ手續規定ナキ所以ナリ然ルニ原院ハ其判旨ニ本訴所有權移轉登記抹消ヲ請求シ  
得ルハ勿論ナリト論シ以テ登記法ニ規定ナキ違法ノ手續ヲ爲スヘシトノ判決ハ法則ノ適用ヲ誤リ  
タルモノト信スルナリト云フニ在リ○按スルニ詐欺ニ因ル意思表示ハ其取消ニ因リ最初ヨリ無効  
ナリシモノト同一ノ状態ニ歸スヘキコトハ民法上ノ原則ニシテ其意思表示ノ目的物カ不動産タル  
ト否トハ固ヨリ問フコトヲ要セス不動産登記原因ノ取消アリタルトキハ其登記ニ付キ抹消ノ手續  
ヲ爲スヲ得ヘキハ不動産登記法第三條ニモ豫見セル如ク刑事詐欺ニ因ル不動産所有權移轉登記ノ  
如キ亦其原因カ取消サレタル以上ハ抹消手續ヲ爲シ其權利者ヲシテ權利ノ回復ヲ得セシメサルヘ  
カラス蓋シ登記ハ申請ニ因ルヲ原則トシ其申請ハ登記權利者及ヒ登記義務者ニ於テ之ヲ爲スヘキ  
モノナルモ本件ノ如ク刑事詐欺ニ因リ不動産移轉ノ登記アリタル場合ニ於テ被害者タル被上告人  
カ抹消ノ登記ヲ求ムルニハ登記義務者ノ地位ニ在ル上告人ノ同意ヲ得ルコト能ハサルコト明白ナ  
ルヲ以テ登記申請ノ意思表示ニ代ハルヘキモノ即判決ヲ求メ之ニ依リ抹消ノ手續ヲ實行シ權利回  
復ヲ期セサルヲ得ス而シテ判決ニ因ル登記ハ登記權利者ノミニテ爲スヲ得ルコトハ不動産登記法  
第二十七條ニ規定スル所ニシテ所謂登記ニハ何等ノ制限ナシ故ニ本件ノ如ク被上告人ニ於テ抹消  
登記ノ手續ヲ爲スヘキコトヲ請求シ原院ハ登記原因ノ取消アリタルモノトシテ之ヲ是認シタルハ  
不動産登記法ノ規定ニ適合スルモノト謂ハサルヘカラス故ニ本論旨亦理由ナシ

詐欺取財事件 明治三十八年(六)第二六號 (破毀)

判決要旨

一、裁判所カ被告ノ前科ヲ認ムルノ憑據トナリタル證據書類ニ  
誤謬ノ記載アリテ爲メニ其事實認定ニ響影ヲ及ホシ被告ニ  
不利ナル判決ヲ言渡シタル場合ニ於テハ刑事訴訟法第三百  
一條第五號ニ該當スル再審ノ原由アルモノトス

(參照) 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪、輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但判決確定ノ後ニ非  
ザレハ之ヲ爲スコトヲ得ス公正證書ヲ以テ訴訟記録ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ(刑事訴訟法第三百一條第  
五號)

原 審 廣島地方裁判所  
被 告 人 吉 田 初 治

右詐欺取財被告事件ニ付明治三十七年九月三十日廣島地方裁判所ニ於テ言渡シタル判決確定ノ後  
被告ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタルヲ因テ刑事訴訟法第三百六條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
再審ノ訴旨ハ自分儀ハ別紙廣島縣廣島警察署ニ於テ證明サレタル證明書ノ如ク明治三十七年八月  
二十五日同署於ニテ浮浪罪ニ依リ拘留七日ニ處セラレ其執行ヲ受ケタルモノナリ依テ其ノ後發餘

再審ノ原因

罪トシテ明治三十七年九月三十日廣島地方裁判所ニ於テ自分ニ係ル刑事被告事件ニ付言渡サレタ  
ル判決ニ前記ノ拘留七日ヲ通算スル旨言渡サルヘキ筈ナルニ別紙同地方裁判所ノ同日言渡サレタ  
ル判決書ノ謄本ノ如ク被告初治ハ明治三十七年八月二十五日廣島警察署ニ於テ拘留五日ニ處セラ  
レタルモノナルニ付右五日通算スヘシトテ事實ニ反セル言渡ヲ受ケ遂ニ確定シテ不當ノ執行ヲ受  
クルニ至リタルハ全ク前記訴訟記録ニ錯誤アルモノナルニ付再審相成度シト云ニ在リテ原判決謄  
本及廣島警察署ノ證明書ヲ提出シタリ○依テ一件記録ヲ查スルニ原裁判所カ被告ニ對シテ刑ノ言  
渡ヲ爲スニ當リ被告ハ明治三十七年八月二十五日廣島警察署ニ於テ浮浪罪ニ依リ拘留五日ニ處セ  
ラレタルモノト認メ原裁判所ノ審判ノ目的タリシ詐欺取財罪ハ其餘罪ナルヲ以テ前發ノ刑ヲ通算  
スル旨判示シタルモノナルコトハ原判文ニ徴シテ明カナリ又タ被告ハ廣島警察署ニ於テ拘留五日  
ニ處セラレタルモノニアラスシテ七日ノ拘留ニ處セラレタルモノナルコトハ被告ヨリ提出シタル  
公正ノ書面タル同警察署長ノ證明書ニ依リ之ヲ認ムルニ足ルヲ以テ原裁判所カ被告ニ對シテ刑ヲ  
言渡シタル所以ノ事實關係ニ錯誤アリタルモノナルコトハ誠ニ明白ニシテ原裁判所ハ被告カ七日  
ノ拘留ニ處セラレタル事實ヲ誤認シテ五日ノ拘留ヲ受ケタルモノトシ其結果七日ノ拘留ニ付通算  
ヲ爲サスシテ五日ノ拘留ヲ通算シ被告ニ不利ナル判決ヲ言渡シタルモノナリトス依テ原裁判所ノ  
此誤認ハ訴訟記録ノ錯誤ニ基クモノナルヤ否ヤヲ審按スルニ原裁判所ハ被告カ浮浪罪ニ依リ五日  
ノ拘留ニ處セラレタリト認メタル所以ノ證據ヲ明示セサルモノ一件記録中ニ被告ニ對スル明治三十  
七年八月二十五日附廣島警察署言渡書ノ謄本アリテ該謄本ニハ被告カ五日ノ拘留ニ處セラレタル

旨記載アルヲ以テ原裁判所ハ右謄本ヲ以テ被告ノ前科ヲ認定スルノ資料ニ供シタルモノト認ムル  
コトヲ得ヘシ左スレハ原裁判所カ被告ノ前科ヲ認ムルノ根據トナシタル書類ニ誤認ノ記載アリテ  
爲メニ原裁判所ノ事實ノ認定ニ影響ヲ及シ被告ニ不利ナル判決ノ言渡ヲ見ルニ至リタルモノナレ  
ハ刑事訴訟法第三百一條第五號ニ該當スル再審ノ原因アルモノニシテ本件被告ノ再審ノ申立ハ其  
理由アルモノトス

●國稅徵收法違犯事件

明治三十八年(九)第七三〇號  
明治三十八年六月二十日判決 (棄却)

判決要旨

一酒造法違犯者ニ對シテハ同法第三十一條ヲ以テ絶對的ニ再  
犯加重ノ例ヲ除外シタルヲ以テ一ノ酒造税法違犯ノ所爲ハ  
他ノ酒造税法違犯ノ所ニ對シ互ニ前科トナリ再犯タラサル  
ノミナラス他種ノ犯罪ニ對スル關係ニ於テモ亦タ互ニ前科  
トナリ再犯トナラサルモノトス

說 明 (判文摘示)

酒造税法第三十一條ハ同法違反者ニ對スル關係ニ於テハ絶對無條件ニテ再犯加重ノ除外例ヲ設ケ  
何等ノ區別ヲ爲サ、ルヲ以テ一ノ税法違犯ノ所爲ハ他ノ税法違反ノ所爲トノ關係ニ於テ互ニ前科  
酒造税法違反者ノ再犯處分

トナリ再犯トナルコトナカルヘキハ勿論他種ノ犯罪ニ對スル關係ニ於テモ亦互ニ前科トナリ再  
犯トナラサルモノト解釋スルナリ相當トス若シ夫レ立法ノ趣旨ハ再犯ノ理由ヲ以テ税法違反ノ所爲  
ニ對スル刑罰ノ加重ヲ禁スルノ一點ニ存シ税法違反ノ所爲ヲ前科トシテ他種ノ犯罪ニ對スル再犯  
加重ヲ妨ケザルニアリトセシカスル區別ハ法文上ニ於テ之ヲ明確ナラシムルコトヲ要シ當然之ヲ  
推測スルヲ得ス何トナレハ凡再犯ハ前科アル再犯アリテ成立スルモノニシテ此ニツク者ハ  
シタル以上ハ其犯罪ハ一般刑ノ適用上ニ於テ前科トシテモ再犯ノ犯罪トシテモ再犯加重ノ原因タ  
ルコトヲ得サルモノト解スヘク他種ノ犯罪ヲ再犯タラシムヘキ前科タルコトハ敢テ之ヲ妨ケザル  
モノト解スルカ如キハ法律ノ區別セザル所ニ區別ヲ設クルモノニ外ナラスシテ解釋法ノ原理ニ反  
スルモノナレハナリ  
或ハ曰ハシ税法違反ノ所爲ヲ理由トシテ他ノ犯罪ヲ加重スルコトヲ得ストノ規定ハ加重セラルヘ  
キ犯罪ニ付キテ之ヲ規定スヘク税法違反ノ所爲ニ付キテ之ヲ規定スヘキニゾラス隨テ他ノ犯罪ニ  
付キ例外的ノ規定ナキ以上ハ刑法總則ノ規定ニ依ラサル可ラスト然レトモ斯クスルニ於テハ税法  
違反以外ノ總テノ犯罪ニ付キ税法違反ノ所爲ハ前科トシテ再犯原因タルコトヲ得サル旨ヲ規定ス  
ルコトヲ要スルコトナリ到底其ノ繁ニ堪ヘサルニ至ルヲ以テ斯ル主義ヲ採用スルノ不可ナルハ  
論ヲ俟タザル所ナリ又々税法違反ノ所爲ハ他ノ犯罪トシテ其ノ性質ヲ異ニシ諸種ノ犯罪中ニ在テ特別  
ノ地位ヲ占ム蓋シ法律カ税法違反ノ所爲ニ對シ刑罰ノ制裁ヲ付スルハ一般犯罪ニ於ケルカ如ク違  
反者ノ有責違法ノ行爲ニ對シテ懲罰ヲ加フルヲ主眼トセシキ事コト租稅徵收ノ確的ナルコトヲ期

スルニアリ果シテ然ラハ税法違反ノ所爲ハ其ノ犯罪ノ性質ヨリ見テ之ヲ他ノ犯罪ノ再犯トシテ犯  
罪ニ重キ刑ヲ科スルノ必要ヲ見サルト同時ニ之ヲ以テ他ノ犯罪ノ前科トシテ其ノ犯罪ニ付キ刑ヲ  
加重スルノ理由トナスヲ得サルモノトス是レ法律カ酒造税法違反ノ所爲ヲ以テ絕對的ニ再犯ノ原  
因トナラザルモノトシ刑法總則ニ對スル除外例ヲ設ケタル所以ナリ  
(參照) 此ノ税法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重、數罪俱發ノ例ヲ用キス但シ刑法第七十五條第一項ノ場  
合ハ此ノ限ニ在ラス(酒造税法第三十一條)  
第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院  
被告人 鴨 下 長 吉  
右國稅徵收法違反被告事件ニ付明治三十八年五月十二日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法  
トシ同院檢察長倉富勇三郎ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決  
スル左ノ如シ  
上告趣意書ハ原判決ハ刑法第九十二條ヲ適用セザル不法アリ原判決理由中末段ノ說明ニ依レハ被  
告カ國稅徵收法違反ノ行爲アリタル以前ニ於テ酒造税法違反ノ罪ニ依リ罰金ノ刑ニ處セラレタル  
事實ヲ認メタルモ酒造税法第三十一條ニ此税法ヲ犯シタルモノニハ刑法再犯加重ノ例ヲ用キスト  
ノ規定アルヨリ同法違反罪ノ刑ハ常ニ再犯加重ノ前科ト爲スヲ得サルモノナリト判定セリ然レト  
モ酒造税法第三十一條ハ同法違反ノ行爲カ再犯アル場合ニ於テ刑法再犯加重ノ規定ヲ之ニ適用セ  
サルノ法意ニシテ同法違反罪ノ刑ヲ以テ他ノ再犯罪ニ對スル加重刑ト爲サストノ趣意ヲ有スルモ  
酒造税法違反者ノ再犯處分  
三五

ノニ非ス何トナレハ酒造税法ハ同法違犯罪ニ付テノミ規定シタルモノニシテ他ノ犯罪ニ付テ再犯加重ヲ爲サ、ル規定ヲ設クヘキモノニ非ラサレハナリ而シテ現行刑法ニ於ケル再犯加重ノ規定ハ再犯者ハ刑罰法ヲ蔑如スルノ傾向ヲ有スルカ故ニ各本條ニ定メタル刑期ヲ以テ十分ナリト爲ス能ハストノ理由ニ依リ此ノ規定ノ適用ヲ受ケサル犯罪ノ刑ナルト否トヲ問ハス一般ニ前科ヲ有スル者ニ對シ適用セラ、モノナレハ酒造税法違犯罪ノ刑ヲ以テ前科ト爲サ、ルハ擬律ノ錯誤ナリト思料スト云フニ在リ○依テ按スルニ酒造税法第三十一條ニ「此税法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪輕減再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用キス」トアリテ法律カ税法違犯罪ニ對シテハ絕對的ニ再犯加重ノ例ヲ除外シ何等ノ區別ヲ設ケサルヨリ推論スルトキハ酒造税法違犯罪ノ所爲ヲ爲シタルカ爲メニ再犯者トシテ其ノ刑ヲ加重セラル、コトナカルヘキコト換言スレハ一ノ税法違犯罪ノ所爲ハ他ノ税法違犯罪ノ所爲トノ關係ニ於テ互ニ前科トナリ再犯トナルコトナカルヘキハ勿論他種ノ犯罪ニ對スル關係ニ於テモ亦タ互ニ前科トナリ再犯トナラサルモノト解釋スルヲ相當トス蓋シ上告論旨ノ主眼トスル所ハ酒造税法第三十一條ハ同法違犯罪ニ付テノミ規定セラレタルモノナレハ他ノ犯罪ニ付テ再犯加重ヲ爲サ、ル妨ケナク再犯者ハ刑罰法ヲ蔑如スルノ傾向ヲ有スルカ故ニ各本條ニ定メタル刑期ヲ以テ充分ナリトナスコトヲ得スト云フニアルモ第一既ニ說明スル如ク酒造税法第三十一條ハ同法違犯罪ニ對スル關係ニ於テハ絕對無條件ニテ再犯加重ノ除外例ヲ設ケ何等ノ區別ヲ爲サ、ルヲ以テ税法違犯罪ノ所爲ハ他ノ犯罪ノ前科トシテモ又々他ノ犯罪ノ再犯トシテ加重セラルヘキ犯罪トシテモ再犯加重ノ原因タルコトヲ得サルモノト解釋セサルヘカラス若シ夫レ立法

ノ趣旨ハ上告論旨ニ云フ如ク再犯ノ理由ヲ以テ税法違犯罪ノ所爲ニ對スル刑罰ノ加重ヲ禁スルノ一點ニ存シ税法違犯罪ノ所爲ヲ前科トシテ他種ノ犯罪ニ對スル再犯加重ヲ妨ケサルニアリトセンカスル區別ハ法文上ニ於テ之ヲ明確ナラシムルコトヲ要シ當然之ヲ推測スルヲ得ス何トナレハ凡ソ再犯ハ前科アリ再度ノ犯罪アリテ成立スルモノニシテ此二ツノ者ハ再犯加重ノ必要的前提ヲ爲スモノナレハ法律カ既ニ或犯罪ニ付キ再犯加重ノ例ヲ用キサル旨ヲ規定シタル以上ハ其犯罪ハ一般刑ノ適用上ニ於テ前科トシテモ再度ノ犯罪トシテモ再犯加重ノ原因タルコトヲ得サルモノト解スヘク他種ノ犯罪ヲ再犯タラシムヘキ前科タルコトハ敢テ之ヲ妨ケサルモノト解スルカ如キハ法律ノ區別セサル所ニ區別ヲ設クルモノニ外ナラスシテ解釋法ノ原理ニ反スルモノナレハナリ或ハ曰ハシ「税法違犯罪ノ所爲ヲ理由トシテ他ノ犯罪ヲ加重スルコトヲ得ストノ規定ハ加重セラルヘキ犯罪ニ付キテ之レヲ規定スヘク税法違反ノ所爲ニ付キテ之ヲ規定スヘキモノニアラス隨テ他ノ犯罪ニ付キテ之レヲ規定ナキ以上ハ刑法總則ノ規定ニ依ラサルヘカラスト然レトモ斯ルニ於テハ税法違反以外ノ總テノ犯罪ニ付キテ税法違反ノ所爲ハ前科トシテ再犯ノ原因タルコトヲ得サル旨ヲ規定スルコトヲ要スルコト、ナリ到底其繁ニ堪ヘサルニ至ルヲ以テ斯ル主義ヲ採用スルノ不可ナルハ論ヲ俟タサルノミナラス酒造税法違反ノ所爲カ他ノ犯罪ノ前科トシテモ又加重セラルヘキ再度ノ犯罪トシテモ再犯加重ノ原因トナラサルハ酒造税法違反罪ノ性質ニ基因スルモノナレハ之ニ關スル除外例ハ該犯罪ニ關スル立法規定中ニ之ヲ設クルヲ相當トスヘシ而シテ法律ハ税法違反者ニ付絶對ニ再犯加重ノ例ヲ除外シ何等ノ區別ヲ爲サ、ルヲ以テ法文ノ解釋トシテ前示ノ如ク斷定スルヲ

酒造税法違反者ノ再犯處分

可ナリトス第二税法違犯ノ所爲ハ他ノ犯罪ト其性質ヲ異ニシ諸種ノ犯罪中ニ在テ特別ノ地位ヲ占ム蓋シ法律カ税法違犯ノ所爲ニ對シ刑罰ノ制裁ヲ付スルニ一般犯罪ニ於ケルカ如ク違反者ノ有責違法ノ行爲ニ對シテ懲罰ヲ加フルヲ主眼トセスシテ寧ロ租稅徵收ノ的確ナルコトヲ期スル一種ノ政策ニ依リ專ラ國庫ニ收入スヘキ租稅ノ減少ヲ豫防シ税法違反ノ所爲ニ對シ税法上責任ヲ負フ者ヲシテ賠償ヲ爲サシムルヲ目的トスルモノニシテ是等責任者ニハ普通ノ犯罪行爲ニ要スル故意過失ノ責ムヘキモノナク隨テ刑罰法ヲ蔑如スル不良ノ徒ヲ以テ目スヘカラサル場合ト雖モ尙ホ且同法ニ定ムル罰金ノ制裁ヲ科スルモノナルコトハ酒造税法第三十一條税法違犯ノ所爲ニ付キテハ不  
論罪ノ例ヲ用キサルコトヲ規定シ尙ホ同法第三十二條ヲ以テ酒類製造人ヲシテ其雇人等ノ所爲ニ付責任ヲ負ハシメ其故意過失ノ有無ヲ問ハサルニ徴シテ明カナリ税法違犯ノ所爲ニシテ既ニ此ノ如キ性質ヲ有スル以上ハ一般犯罪ト同視スルコトヲ得サルモノアリ從テ其犯罪ノ性質ヨリ見テ之ヲ他ノ犯罪ノ再犯トシテ犯人ニ重キ刑ヲ科スルノ必要ヲ見サルト同時ニ之ヲ以テ他ノ犯罪ノ前科トシ其犯罪ニ付刑ヲ加重スルノ理由トナスコトヲ得サルモノトス是レ法律カ酒造税法違犯ノ所爲ヲ以テ絶對的ニ再犯ノ原因トナラサルモノトシ刑法總則ニ對スル除外例ヲ設ケタル所以ナリ故ニ何レノ點ヨリ觀察スルモ原院カ本件ニ付再犯加重ノ例ヲ用キサリシハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

證書騙取私文書偽造行爲事件

明治三十八年(レ)第七七六號  
明治三十八年六月二十七日宣告

(破毀)

判決要旨

一、參考人ニ對シ宣誓ヲ命シタルトキハ其手續ハ違法ニシテ同人ノ供述ハ縱令宣誓ノ手續ヲ履ミタレハトテ適法ノ證言ナリト云フヲ得ス

第一審 福岡地方裁判所

第二審 廣島控訴院

被告人 柳井爲之助

辯護人 高木益太郎

右證書騙取私文書偽造行使被告事件ニ付明治三十八年五月二十四日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人高木益太郎ノ辯明書一ハ原判決ハ「證人井上金次郎豫審訊問調書」ヲ探テ斷罪ノ資料ニ供シタリ因テ同人調書ヲ査閱スルニ記録百十一了裏面ニ「問其方ハ柳井爲之助ト親族ノ關係ナキヤ答柳井爲之助ハ自分ノ甥ニ當リマス於茲豫審判事ハ云々參考人トシテ訊問スル旨ヲ告ゲタリ」ト明記シアルニモ不拘同調書ノ末尾ヲ見ルニ同人カ證人トシテノ宣誓書(記録一八丁)ヲ綴附ケ特ニ契印ヲ施シアリテ參頭證尾實ニ奇々怪々ノ書面ニ係レリ原判決カ斯ノ如キ奇怪ナル證人調書ヲ探テ證言調書ノ效力アルモノトシ判決ノ基本トナシタルハ刑事訴訟法上無効ナル書面ニ據テ被告人ノ罪責ヲ確定シタル違法アルモノニシテ原判決ハ破毀ノ原由アルモノトスト云ヒ」ニハ原判決

參考人ノ宣誓

ヲ閱スルニ其證據理由中「證人井上金次郎ノ豫審訊問調書ニ云々ノ旨供述シタルコトノ記載アリ」ト説示セラル、モ今一件記録ヲ精査スルニ井上金次郎ハ證人トシテ曾テ何等ノ供述ヲ爲シタルコトナク唯參考人トシテ豫審訊問ニ應シタルコトアルノミ（記録百一丁乃至百十七丁）然ルニ原判決カ此參考人ノ供述ヲ以テ證人ノ供述ト爲シ證據證據ノ效アルモノトシテ判斷ノ資料ニ供シタルハ不法ニシテ原判決ハ破毀ノ原由アルモノトスト云フニ在リ○依テ記録ヲ調査スルニ原判決ニハ其證據理由ノ部ニ證人井上金次郎豫審訊問調書ニ云トアリテ同人ノ豫審延ニ於ケル供述ヲ證言トシテ採用シタルコト明カナリ而シテ右調書ニハ證人井上金次郎ノ宣誓書ヲ添附シ調書ト宣誓書トノ間ニ裁判所書記ノ契印アレトモ同人ハ證人タルノ資格ナキコト又同人ヲ參考人トシテ訊問ヲ爲シタルコトハ其豫審調書ノ初部ニ同人ノ供述トシテ柳井爲之助ハ自分ノ甥ニ當ルモノナリトノ記載豫審判事ハ柳井爲之助中畧證書騙取詐欺取財私書偽造行使被告事件ノ參考人トシテ訊問スル旨ヲ告ケタリトノ記載調書ノ末尾ニ於ケル參考人井上金次郎トアル署名ニ徴シ明瞭ナリ然ルニ同人ニ宣誓ヲ爲サシメタルハ違法ノ手續ニシテ右ノ如ク違法ノ手續ニ依リテ成立シタル同人ニ對スル訊問及ヒ同人ノ供述ハ證據タルノ效力ナシ又右ノ如ク違法ノ手續ニ基ケル同人ノ供述ハ宣誓ノ手續ヲ履ミタルモ適法ノ證言ナリト云フヲ得サルヤ勿論ナリトス然ルニ原院カ右金次郎ノ供述ヲ適法ナル證言トシテ本件斷罪ノ資料ニ供シタルハ違法ニシテ破毀ヲ免レサルモノトス

●葉煙草專賣法違反事件

明治三十八年（レ）第五〇三號  
明治三十八年五月八日判決

（棄却）

判決要旨

一、間接國稅犯則者處分法施行規則第十二條ニハ犯罪事件ノ調書ハ之ヲ作成シタル者ニ每葉契印スヘキコトヲ命スルモ之ヲ缺如シタレハトテ其ノ調書ノ無効ナルコトノ規定ナケレハ契印ナキ調書ト雖モ之ヲ罪證ニ供スルニ妨クルコトナシ

第一審 宇都宮地方裁判所太田原支部

第二審 東京控訴院

被告人 高橋 駒吉

辯護人 高木益太郎

右葉煙草專賣法違反被告事件ニ付明治三十八年三月十六日東京控訴院ニ於テ言渡レタル判決ヲ不法トシテ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依ツテ刑事訴訟法第二百八十三條定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人高木益太郎第一辯明書ノ一ハ原判決證據說明ニ明治三十七年四月十四日附熊田末吉ニ對スル尋問頗末書ヲ援用セリ依テ同人尋問頗末書（記録八七―九一）ヲ見ルニ記録ノ八十八枚目ト八九枚目トノ間ニ調書ノ作成者タル高橋富三郎ノ契印ヲ遺脱シタル無効ノ調書ナルニ之ヲ斷罪ノ資料ニ供シタル原判決ハ破毀ヲ免レスト云フニ在リ○依テ按スルニ間接國稅犯則者處分法施行規則第十二條ニ「犯則事件ノ調査及ヒ處分ニ關スル書類ニハ每葉契印スヘシ云々」ト規定スレトモ其

契印ナキ調書

方式違背ノ書類ヲ無効タラシムルノ制裁ヲ付セサルヲ以テ縱令其書類ニ契印ヲ缺クモ真正ニ作成セラレタルモノハ之ヲ採用スルニ於テ何等ノ不法アルコトナシ殊ニ所論尋問顛末書ノ一箇所ニハ作成者ノ一者タル高橋富三郎ノ契印ト認ムヘキモノナキモ他ノ一人タル吉成周三郎ノ契印ト認ムヘキモノアリ尙ホ其他ノ體裁ニ於テモ有效ノ書類トシテ缺クル所ナキヲ以テ本論旨モ亦理由ナシ

●詐欺取財及拐帶事件

明治三十八年(元)第七十五號 (破毀)  
明治三十八年七月四日判決

判決要旨

一、裁判所ハ被告事件ニ付キ管轄權ヲ有スルニアラサレハ其ノ事件ニ關シ一切ノ審判ヲナスノ權限ナシ故ニ苟モ事件ニ付管轄問題アルトキハ裁判所ハ何等ノ審判ヲナスコトナク先ツ第一ニ其ノ問題ヲ決セサル可ラス

一、裁判所カ被告事件ニ付キ管轄權ヲ有セサルトキハ本案ノ裁判ハ勿論公訴不受理ノ裁判ト雖モ亦之ヲナスノ權理ナシ從テ事件ニ付キ管轄問題ノ生シタルニ不拘之ヲ決セスシテ直チニ公訴不受理ノ裁判ヲナスハ不當ナリ

一、上告裁判所カ事件ヲ他ニ移送スルコトナク自ラ裁判ヲナスヘキ刑事訴訟法第二百八十七條ノ所謂擬律ノ錯誤中ニハ獨リ本案ニ關スル擬律錯誤ノ場合ノミナラス原裁判所カ第一

管轄違ヲ理由トスル上告裁判所ノ破毀



審ノ管轄ヲ不當ニ認メタル場合モ亦タ之レニ包含ス

説明

本件第三點ノ判旨ハ從來我カ大審院カ襲用シ來レル判例ヲ變更シタルモノニシテ特ニ讀者ノ注意ヲ要スル處ナリ左ニ其ノ判旨ノ要項ヲ摘示シテ説明ニ代ヘン

當院從來ノ判例ニ依レハ事件カ第一審裁判所ノ管轄ニ屬セサル場合ニ於テ控訴裁判所カ不當ニ其管轄ヲ認メタルニ依リ第二判決ヲ破毀スルトキハ管轄ニ關スル事實ノ確定セルト否トニ拘ラス破毀移送ノ判決ヲ宣言シタルモ是レ決シテ刑事訴訟法ノ趣旨ニ合フモノト云フ可ラス上告裁判所カ第二審判決ヲ破毀シ事件ニ付キ自ラ判決ヲ爲スヘキ場合ノ一ナル刑事訴訟法第二百八十七條ニ謂フ擬律ノ錯誤下ハ適法ナル事實認定アルモ之ニ對スル法律適用ニ於テ不法ナルモノアリ而モ之ヲ更正スルトキハ原判決ニハ何等瑕瑾ヲ留メサルニ至ル如キ場合ヲ云ヒ此點ニ付キ制限ヲ認メサルコト亦從來判例ノ認ムル所ナリトス蓋シ同條ノ趣旨タル畢竟事實ノ確定ヲ要スルモノナリ法律ノ適用ヲ矯正セハ足ルニ拘更ラニ事實裁判ヲシテ審理判決ノ手續ヲ爲サシムルカ如キハ管轄ニ關シテ無用ナルノミナラズ何等利益ノ見ルヘキモノナシトシ上告裁判所カ如キハ管轄ニ關シテ無用ナルノミナラズ外ナラス裁判管轄ニ關スル事實ノ確定シタル場合ニ於テモ上告裁判所ハ

管轄ニ關スル法律ノ適用ヲ正シ自ラ事件ノ裁判ヲ爲シ之ヲ完結セシムルノ便益ナルコトハ本案事件ニ付キ法律ノ適用ヲ是正スル場合トモ異ナル所ナシ而シテ前掲條文ニ於テ管轄問題ニ關シ何等ノ文字ヲ示サルモ管轄ノ判決ヲ爲スヘキ場合ヲ除外セルモノト認ムヘキ規定亦存セサルヲ以テ前掲立法ノ趣旨ニ鑑ミ上告裁判所カ第一審裁判所ハ管轄違ナリトスル判決ヲ以テ相當ト認ムヘキ場合ニ於テ之ニ對スル第二審判決ヲ破毀スルトキハ刑事訴訟法第二百六十二條第一項ニ從ヒ管轄問題ニ關シ自ラ其ノ判決ヲ爲スヘキモノトス

(參照) 擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス可シ(刑事訴訟法第二百八十七條)

控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ拘留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前掲條文ニ於テハ新ニ拘留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ(刑事訴訟法第二百六十二條第一項)

第一審 廣島地方裁判所尾道支部 第二審 廣島控訴院  
被告人 高橋仙次郎

右詐欺取財及拐帶被告事件ニ付明治三十八年五月十八日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ同院檢事長矢野茂ハ上告ヲ爲シタリ因テ裁判所構成法第四十九條ニ依リ刑事ノ總部聯合ノ上刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告趣意ハ本件ハ廣島地方裁判所尾道支部ト清國天津總領事トノ管轄權ニ付テノ問題ナレハ當院ハ正ニ管轄違ナリヤ否ヤニ付相當判決ヲ爲スヘキ等ナルニ同一裁判所ニ對シ同一事件ニ付キ重ネ

管轄違ヲ理由トスル上告裁判所ノ破毀

テ公訴ノ提起セラレタル場合ト同視シ輒ク公訴不受理ノ判決ヲ爲シタルハ頗ル不法ノ裁判ナリト  
 思料スト云フニ在リ○因テ按スルニ裁判所ハ被告事件ニ付管轄權ヲ有スルニアラサレハ其事件ニ  
 關シ一切ノ審理判決ヲ爲スヲ得ス故ニ苟モ裁判所ノ管轄問題アルトキハ先ツ第一ニ其問題ヲ決セ  
 サルヘカラス何トナレハ若シ裁判所ニ於テ管轄違ヲ認ムルトキハ其裁判權ハ之ト同時ニ止息シ公  
 訴不受理ノ判決ト雖モ之ヲ爲スヲ得ヘカラスアルヲ以テナリ而シテ本件ハ第一審裁判所ニ於テ管轄  
 違ノ言渡ヲ爲シタル判決ニ對シ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタル事件ニシテ原判決ニ依レハ本件ハ前既ニ  
 天津領事館ニ公訴ノ提起アリテ同領事館ニ繫屬中ナルコトヲ判示シアリ此事實ニ依レハ本件ニ付  
 テハ廣島地方裁判所尾道支部カ管轄權ヲ有セサルコトハ明白ナリトス何トナレハ特種ノ裁判所タ  
 ル領事館ニ適法ニ繫屬セル事件ハ故ナク他ノ裁判所ノ管轄ニ屬シ審理セラルヘキモノニアラサレ  
 ハナリ故ニ原院ハ本件ノ控訴ニ對シテハ控訴棄却ノ判決ヲ宣言セサルヘカラスルニ事茲ニ出テサ  
 リシハ失當ニシテ原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レヌ當院從前ノ判例ニ依レハ事件カ第一審裁判所  
 ノ管轄ニ屬セサル場合ニ於テ控訴裁判所カ不當ニ其管轄ヲ認メタルニ因リ第二審判決ヲ破毀スル  
 トキハ管轄ニ關スル事實ノ確定セルト否トニ拘ハラヌ破毀移送ノ判決ヲ宣言シタルモ是レ決シテ  
 刑事訴訟法ノ趣旨ニ合フモノト云フヘカラス上告裁判所カ第二審判決ヲ破毀シ事件ニ付自ラ判決  
 ヲ爲スヘキ場合ノ一ナル同法第二百八十七條ニ謂フ擬律ノ錯誤トハ適法ナル事實認定アルモ之ニ  
 對スル法律適用ニ於テ不法ナルモノアリ而モ之ヲ更正スルトキハ原判決ニハ何等瑕瑾ヲ留メサル  
 ニ至ル如キ場合ヲ云ヒ此點ニ付キ制限ヲ認メサルコト亦從來判例ノ認ムル所ナリトス蓋シ同條ノ

趣旨タル畢竟事實ノ確定ヲ要スルモノナク法律ノ適用ヲ矯正セハ足ルニ拘ハラヌ更ニ事實裁判所  
 ヲシテ審理判決ノ手續ヲ爲サシムル如キハ管ニ無用ナルノミナラス何等利益ノ見ルヘキモノナシ  
 トシ上告裁判所ヲシテ直チニ裁判ヲ爲サシムルモノニ外ナラス裁判管轄ニ關スル事實ノ確定シタ  
 ル場合ニ於テモ上告裁判所ハ管轄ニ關スル法律ノ適用ヲ正シ自ラ事件ノ裁判ヲ爲シ之ヲ完結セシ  
 ムルノ便益ナルコトハ本案事件ニ付キ法律ノ適用ヲ是正スル場合ト毫モ異ル所ナシ而シテ前掲條  
 文ニ於テハ管轄問題ニ關シ何等ノ文字ヲ示サ、ルモ管轄違ノ判決ヲ爲スヘキ場合ヲ除外セルモノ  
 ト認ムヘキ規定亦存セサルヲ以テ前掲立法ノ趣旨ニ鑑ミ上告裁判所カ第一審裁判所ハ管轄違ナリ  
 トスル判決ヲ以テ相當ト認ムヘキ場合ニ於テ之ニ對スル第二審判決ヲ破毀スルトキハ刑事訴訟法  
 第二百六十二條第一項ニ從ヒ管轄ニ關シ自ラ其判決ヲ爲スヘキモノトス

●肥料取締法違犯事件 明治三十八年(レ)第七八七號  
 明治三十八年七月四日判決 (棄却)

判決要旨

一、肥料取締法第七條ニ「肥料ノ偽造」トハ農植物ノ肥養トナラサ  
 ル物料ヲ以テ肥料ニ摸擬シ造リタル所爲ヲ云ヒ又々同條ニ  
 「他ノ物料ヲ肥料ニ混和シタルモノ」トハ數量ヲ増加スル爲メ  
 肥養トナラサル物料ヲ肥料ニ混和スルノ所爲ヲ指稱ス

肥料ノ偽造

一、他ノ物料ヲ肥料ニ混和シタル所爲ヲ以テ肥料ノ偽造ナリト認定スルハ違法ナリト雖モ此ノ兩者ノ處分ハ共ニ前示第七條ヲ以テ處罰スヘキモノナレハ法律適用ノ結果ヲ異ニセサルニ依リ之ヲ以テ破毀ノ原由トナスコトヲ得ス

三六

(參照) 肥料ヲ偽造若ハ他ノ物料ヲ混和シテ販賣シ又ハ情ヲ知テ之ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ肥料ハ沒收ス(肥料取締法第七條)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院  
被告人 鈴木 丈吉 辯護人 岩崎 勳

右肥料取締法違反被告事件ニ付明治三十八年五月二十四日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ辯護人岩崎勳上告趣意書ハ原判決ハ肥料取締法第七條前項ヲ不當ニ適用シタル違法アリ原判決ハ被告カ「肥料綿實粕ヲ製造ニ從事シ保證票ニハ其品質トシテ原品百分中窒素三、〇〇、六二七ノ成分アルコトヲ掲ケ且ツ之ヲ保證スル旨ヲ記シナカラ其實原品百分中僅カニ窒素二、二四、六二七ノ成分アルコトヲ過キスシテ多量ノ土砂ヲ混シタル」(原判決理由冒頭記載)事實ヲ以テ之ヲ「偽造」ナリト認定シ之ニ「肥料取締法第七條前段」ヲ適用シタリ然レトモ本件ノ如キ場合ニ於ケル偽造ナル意義ハ之ヲ貨幣若クハ私印私書ノ場合ニ於ケルト混同スルコトヲ得ス即チ貨幣若ク

クハ私印私書ノ場合ニ於ケル偽造ノ法理ヲ以テ直チニ本件ノ場合ニ適用シタルハ玉石混淆ノ嫌ナキ能ハス本件ノ如キ場合ニ於ケル偽造トハ有ルヘキモノ無キカ又有ルヘカラサルモノ有ルカ若クハ其有無ノ差異ノ程度ノ著大ナル場合ヲ指稱スヘク原判決表示ノ事實ハ有ルヘキモノ存在シ有ルヘカラサルモノハ之ヲ缺キ總テノ點ニ於テ單ニ有無ノ程度ニ於テ僅少ナル差異ノ存スルノミ故ニ原判決ノ認定スル事實ノミニテハ之ニ對シ肥料取締法第七條前項ヲ適用シタルハ違法ト云フノ外ナシト云フニ在リ○依テ按ズルニ農産物ノ肥養ト爲ラサル物料ヲ肥料中ニ混和シタルトキハ其分量上偽造アリト云フヲ得ヘキモ肥料取締法第七條ニ所謂肥料ノ偽造トハ農産物ノ肥養ト爲ラサル物料ヲ以テ肥料ニ擬シタルモノヲ造リタル場合ヲ指スモノニシテ一定ノ肥料ニ他ノ物料ヲ混和シタル場合ヲ除外シタルコトハ同條ニ肥料ヲ偽造若クハ他ノ物料ヲ混和シテ販賣シ云々トアリテ肥料ノ偽造ト肥料ニ他ノ物料ヲ混和セルトヲ區別シテ規定シタルニ因リ明カナリ原院ノ確定セル事實ハ肥料綿實粕ノ保證票ニ原品百分中窒素三、〇〇、六二七ノ成分アルコトヲ掲ケ其實原品百分中窒素二、二四、六二七含有シ多量ノ土砂ヲ混シタル肥料ヲ被告カ偽造シテ販賣シタリト云フニ在リテ右肥料百分中ノ主成分量ハ保證票ニ掲ケルモノヨリ少量ナリト雖モ右分量ノ磷酸窒素ヲ含有スル綿實粕ハ肥料トシテ無効ナルモノト云フヲ得サレハ被告ノ所爲ハ肥料取締法第七條ニ所謂肥料ノ偽造販賣ニアラスシテ肥料ニ他ノ物料ヲ混和シテ販賣シタルノ所爲ナリトス故ニ原院カ之ヲ肥料偽造トナシタルハ正當ナラサレトモ肥料ノ偽造ナルト他ノ物料ヲ混和シタルトニ依リテ法律適用ノ結果ヲ異ニセサルヲ以テ右肥料取締法第七條ヲ適用シタル原判決ハ結局相

肥料ノ偽造

三六九

當ニシテ從テ本論旨ハ其ノ理由ナキモノトス

●詐欺取財事件 明治三十八年(レ)第七五七號 明治三十八年六月二十六日判決 (棄却)

判決要旨

一、衣類ハ之ヲ解キ放シタルトキト雖モ其ノ性質ヲ變スルモノニアラス從テ騙取シタル衣類カ被告ノ手ニ存スル以上ハ其ノ解キ放サレタルト否トニ不拘刑法第四十八條ニ依リ還付ノ言渡ヲ爲スヘキモノトス

二、刑事訴訟法第二百二條ニ所謂所有者トハ汎ク押收物件ノ所持者ヲ指稱スルモノニシテ眞ノ所有者ノミニ限定シタル法意ニ非ス從テ沒收ニ係ラサル押收品ニ付キ差出人ニ還付スト判決シタルハ違法ニアラス

(參照) 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス(刑法第四十八條)

(參照) 被告人有罪ト爲リタルト否トナ間ハ沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可

シ(刑事訴訟法第二百二條)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 黒上益二 辯護人 (高木益太郎)

右詐欺取財被告事件ニ付明治三十八年五月二十日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告竝ニ辯護人高木益太郎ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人松本隆治上告趣意擴張書ノ第四ハ原判決(一)ハ押收物件中黒紋付袷伊勢崎名仙單衣羽衣シヨール各一枚ヲ被告ノ手ニ在リタル贓物ト認メテ刑法第四十八條後段ニヨリ被害者ニ還付シタルハ違法ナリ何トナレハ贓物トハ犯罪ニ因テ得タル儘ノ形ヲ有スルモノ、ミヲ云ヒ苟クモ原形ヲ變シタルモノハ假令被告ノ手ニ存スルモ贓物ト云フヲ得ス是レ一方ニ於テ損害賠償ノ請求ヲ被害者ニ認許シタル所以ナリ又刑法第四十八條ニ徴スレハ贓物ノ還給若クハ還付トアリテ字體自ラ變形セサルモノヲ還付スルノ意味タルコト明瞭ナリ果シテ然ラハ形ヲ變シタルモノハ最早贓物ニアラスト云ハサルヘカラス而シテ本件記録ヲ調査スルニ前記三點ノ衣類ハ悉ク解放サレアリシモノニテ最早衣類トシテノ原形ヲ存セス然ルニ原判決ハ之レヲ贓物トシテ被害者ノ請求ナキニ還付ノ裁判ヲ爲シタルハ請求ヲ受ケサル事實ニ付キ判斷ヲ與ヘタル違法アルモノナリ假リニ適法ナリトスルモ刑事訴訟法第二百二條ヲ適用セサルハ不當ナリ(二)ハ其他ノ物件ニ對シ全部差出人ニ還付シタルハ不法ナリ何トナレハ前記三點ノ物件ヲ除クノ外ハ其差出人ハ皆質取主タル伊東龜太郎山中

贓取後解キ放シタル衣類ノ還附○刑訴第二百二條ノ適用

福太郎ナリ而シテ該物品ハ質屋取締法第十六條ニ依リ警察官之レヲ徵集シテ已ニ被害者ニ還付シ  
 アルモノナレハ最早之ヲ質取主ニ還付スルヲ要セサルナリ否還付スルヲ得サルナリ然ルニ原審ハ  
 再ヒ之ヲ差出人タル前記質取主ニ還付ストノ判決ヲ與ヘタルハ違法ナリ且ツ刑事訴訟法第二百  
 條ハ「所有者ニ還付スル言渡ヲ爲スヘシ」トアルノミニシテ差出人ニ還付スヘシトアルコトナシ  
 蓋シ所有者ニアラスシテ差出人タルコトアリ本件ノ如キ即チ之レナリ又所有者ニシテ且差出人タ  
 ルコトアリテ差出人ハ常ニ所有者タルニ限ラサルカ故ナリ然ルニ原判決ハ押收物件中沒收ニ拘ハ  
 ラサル物品ヲ差出人ニ還付スト判定シタルハ不當ナリト云フニ在レトモ○衣類ハ解放シタルトキ  
 ト雖モ衣類タル性質ヲ變スルモノニアラサレハ原院ニ於テ被告カまつのヨリ騙取シタル衣類等ハ  
 點ノ内解放シタルモノアルコトヲ認ムルニ拘ハラズ黑紋付袴伊勢崎銘仙女單衣及ヒ羽衣シヨール  
 ヲ被告ノ手ニ現在スル贓品ト認メ刑法第四十八條ニヨリ還付ノ言渡ヲナシタルハ相當ニシテ此ノ  
 場合ニ於テ刑事訴訟法第二百二條ノ適用ヲ明示セサレハトテ右規定ニ從ハサリシモノト云フ可ラ  
 サルヲ以テ原院判決ハ相當ナリ故ニ論旨(一)ハ理由ナシ又々刑事訴訟法第二百二條ノ所謂所有者  
 トハ汎ク押收物件ノ所持者ヲ意味スルモノニシテ眞ノ所有者ノミニ限定シタル法意ニアラサルヲ  
 以テ原院カ沒收ニ係ラサル押收品ニ付キ差出人ニ還付スト判決シタルハ不當ニアラサルノミナラ  
 ス司法警察官カナシタル假還付ノ處分ノ有無ニ拘ハラズ裁判所ハ刑事訴訟法第二百二條ノ規定ニ  
 從ヒ還付ノ言渡ヲ爲スヘキモノナレハ原院カ警察官カ假還付處分ヲナシタル押收品ニ付キ更ニ差  
 出人ニ還付ノ判決ヲナシタリトテ之レヲ不法ト云フヲ得ス故ニ論旨(二)モ亦理由ナシ

●私印盜用私書偽造行使事件 明治三十八年(刑)第七八三號 (棄却)

判決要旨

一、公判ノ再開ハ裁判所ノ職權ヲ以テ決定ス從テ公廷ニ現ハレ  
 サル辯護人ノ申請ニヨリ再開ノ決定ヲ爲スモ違法ニアラス

第一審 鳥取地方裁判所 第二審 廣島控訴院  
 被告人 右田入藏 辯護人 高木益太郎

右私印盜用私書偽造行使事件ニ付明治三十八年五月十八日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不  
 法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ  
 如シ

辯護人高木益太郎辯明書第一點ハ本件記録ヲ閱スルニ第二五〇丁裏面原審公判始末書中「第二回  
 開廷」ト題シ「明治三十八年五月十八日午前十時同所ニ於テ同一ノ判事書記檢事黒川權列席公開  
 ス被告人出廷シタリ身體ノ拘禁ヲ受ケス前同一ノ辯護人出廷シタリ裁判長ハ辯護人ノ申請ニ因リ  
 辯論ヲ再開スル旨ノ決定ヲ言渡サレタリ」云々ト掲記シアリ然レトモ原院公判始末書ヲ通覽ス  
 ルニ辯護人ハ公判廷ニ於テ辯論再開ノ由請ヲ演述シタル事迹ノ見ルヘキモノナク唯記録第二百三  
 十一丁以下「公判再開申請書」ト題スル書面アルモ口頭辯論主義ヲ通則トセル我刑事訴訟法ノ明

文上公判再開ノ申請ハ特ニ書面ヲ以テ爲シ得ル旨ノ規定ナキヲ以テ右書面ハ其提出者ニ於テ更ニ其趣旨ヲ公廷ニ於テ演述スルニアラサレハ何等ノ效力ヲ生スヘキモノニアラス果シテ然ラハ原院カ公判再開ノ申請アリトシ其申請ニヨリテ公判ノ再開ヲナシタルハ失當ニシテ訴訟手續上ノ重大ナル違法アリ之ニ基ク公判ノ開廷ハ全部無効ニシテ從テ此公判ニ於テ爲シタル檢事ノ附帶控訴ハ何等控訴ノ效果ヲ生スヘキモノニアラス原判決カ其前文ニ「當院檢事ヨリ偽造證書ヲ沒收スヘキモノナリトノ附帶控訴ヲ爲シタルニ依リ」云ト判示シタルハ檢事ノ上訴ヲ採用シタル不法アリト云フニ在レトモ○公判ノ再開ハ法所ノ職權ヲ以テ決定シ得ヘク訴訟關係人ノ申請ニ基キテ決定スルヲ要スルモノニアラサレハ原院カ公判再開ヲ決定シタル職權行動ノ原由ハ所論ノ如ク公廷ニ現ハレサル辯護人ノ申請ニ在リトスルモ爲メニ原院カ爲シタル公判再開ノ決定ニ影響ヲ及ボスヘキモノニアラス因テ本論旨ハ其理由ナシ

●委託物費消事件

明治三十八年(九)第二一五號 (破毀)  
明治三十八年三月九日宣告

判決要旨

一、當事者雙方ノ違算ニ因リ偶然其一方ノ占有ニ歸シタル物件ハ刑法第三百九十五條ニ所謂受寄ノ財物又ハ委託ヲ受ケタル物件ニ非スシテ遺失物法第十二條ニ所謂誤テ占有シタル物件ニ該當ス從テ占有者カ不正ニ之ヲ處分シタル所爲ハ遺失物法第十六條ノ犯罪ヲ構成ス

物件ニ該當ス從テ占有者カ不正ニ之ヲ處分シタル所爲ハ遺失物法第十六條ノ犯罪ヲ構成ス

(參照) 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取携帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス(刑法第三百九十五條)  
誤テ占有シタル物件他人ノ置去リタル物件又ハ逸走ノ家畜ニ關シテハ本法及民法第二百四十條ノ規定ヲ準用ス但シ誤テ占有シタル物件ニ關シテハ第三條ノ費用及第四條ノ報勞金ヲ請求スルコトヲ得ス(遺失物法第十二條)  
拾得物其ノ他本法ノ規定ヲ準用スル物件ヲ隱匿シ若ハ不正ニ處分シタル者ハ三月以下ノ重禁錮又ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス(遺失物法第十六條第一項)

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院

被告人 諏訪 八左衛門

右委託物費消被告事件ニ付明治三十八年一月二十七日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
上告趣意書ハ原判決ノ認メタル事實ニ依レハ被告ハ「山内長次郎ヨリ大阪三井物産會社白木綿八十疋在中ナル荷物六十五箇ノ回送ヲ委託セラレタルニ現品ノ授受ニ際シ雙方ノ違算上六十六箇ノ授受アリシヨリ被告ハ爰ニ惡意ヲ生シ六十五箇ハ回送シ殘一箇ヲ同月二十一日同縣海東郡津島町富永新六方ニ於テ同人ニ賣却シ以テ費消シタリ」ト云フニ在リテ其費消シタリト云フ所ノ白木綿一箇ハ荷主タル長次郎ニ於テハ被告ニ委託スルノ意思ナク又被告ニ於テハ之レヲ受託スルノ意思ナカリシニ雙方ノ違算上偶然誤テ被告ノ占有ニ移リシ事實關係ナルコトハ明カニ原院ノ認メタル

誤テ占有シタル物件ノ不正處分

所ナリ抑モ刑法第三百九十五條ニ所謂受寄ノ財物トハ寄託關係ニ基キ保管スヘキ物ノ謂ヒニシテ  
本件ニ於テ原院カ認メタル如ク雙方ノ間ニ寄託關係ヲ生スルノ意思ナク違算ノ結果誤テ授受サレ  
タル財物ハ之ヲ包含セサルコト勿論ニシテ御院判決ニ於テモ亦明示セラル、所ナリ(明治三十  
一年(レ)第一六九號、同三十四年(レ)第六六九號同年(レ)第五四四號)然ルニ原院カ右ノ事實ニ對  
シ被告ニ委託物費消ノ責アリトシ刑法第三百九十五條ヲ適用處斷シタルハ擬律錯誤ノ不法アル判  
決ナリト信スト云フニ在リ○因テ原院判決ヲ闕スルニ所謂論ノ如ク一梱ノ荷物ハ當事者雙方ノ違算ニ  
依リ偶然誤テ被告ノ占有ニ歸シタル事實ニシテ刑法第三百九十五條ニ所謂受寄ノ財物又ハ委託ヲ  
受ケタル物件ニアラスシテ遺失物法第十二條ニ所謂誤テ占有シタル物件ナレハ被告カ不正ニ之ヲ  
處分シタルハ即チ同法第十六條ニ照シテ處斷スヘキ犯罪ナルニ原院カ刑法第三百九十五條ヲ適用  
シタルハ擬律錯誤ノ判決ナルヲ以テ本論旨ハ理由アリ

●公印盜用公文書偽造行使監守詐欺取財委託金費消事事件

明治三十八年(レ)第三三三號 (棄却)  
明治三十八年三月十日宣告

判決要旨

一 監守盜ハ職權ヲ以テ直接ニ金穀物件ヲ保管スル官吏ノミナ  
ラス其ノ保管ニ付キ監督ノ責アル者之ヲ窃取シタルトキモ  
亦タ此ノ罪ヲ構成ス

一 町村長カ收入役ニ代リテ過徴收ノ税金ヲ保管スル場合ニ於  
テハ其ノ保管行爲ハ法律上ノ職責ニ出テサルモ爲メニ保管  
ヲ監督スヘキ職權ヲ失フモノニ非ス從テ其保管金ヲ不正費  
消シタル所爲ハ監守盜罪ヲ構成ス

第一審 長崎地方裁判所 第二審 長崎控訴院  
被告人 吉田寅二 辯護人 高木益太郎

右公印盜用公文書偽造行使監守詐欺取財委託金費消被告事件ニ付明治三十八年一月二十四日長  
崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定  
式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
上告趣意書ノ第一點ハ原判決ニ依レハ被告ハ西彼杵郡脇脚村長ノ職ニ在リテ同村村稅地租割ノ  
過徴收ニ因リ村民ニ還付スヘキ金圓ヲ保管中費消シタルモノニシテ即チ監守盜罪ヲ構成スルモノ  
トセラレタリ然レトモ町村制第六十八條第二項第三號ニ依レハ町村長ハ町村ノ歲入ヲ管理シ歲入  
出豫算表其他町村會ノ議決ニヨリテ定リタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スルノ權限ヲ有  
スルモ町村長自ラ現實ニ收入支出又ハ保管ノ權限ヲ有セス町村ノ收入支出ハ同法第七十一條ニヨ  
リ町村收入役ノ權限ニ屬シ現實ノ收支保管ハ收入役以外ニ於テハ法律上何人ト雖モ有效ニ之ヲ代  
理シ得可キモノニアラス然ラハ町村長ハ町村稅ニ就キ現實ニ保管ノ權限ナキモノナルヲ以テ村稅

町村長ノ税金費消

過徴収金ヲ現ニ所持居ルモ是所謂職務上ノ保管ニアラスシテ他ノ名義ニ於テセル事實上ノ所持ニ過キサルヤ理ノ最モ觀易キ所ナリ然ルニ原審ニ於テ村長カ村稅ノ過徴収金ヲ職務ヲ以テ保管セルモノト斷シ之ニ擬スルニ監守盜罪ヲ以テセルハ法則ニ背キ事實ヲ確定シ從テ刑ノ適用ヲ誤リタル擬律錯誤ノ裁判タルヲ免レスト信スト云フニ在レトモ○村長ハ町村ノ歲入ヲ管理シ歲入出豫算表其他町村會ノ議決ニヨリテ定リタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スルノ權限ヲ有スル者ナルコトハ市町村制第六十八條ノ規定スル所ニシテ而シテ刑法第二百八十九條ニ官吏自ラ監守スル所ノ云々トアルハ單ニ官吏カ職責上保管スル場合ノミヲ謂フニ止マラス官吏自ラ保管セスト雖モ其保管ニ對シ監督權ヲ行フ場合ヲモ包含スヘキモノナレハ市町村長ニ於テ收入役ノ職責上保管スル物件ヲ竊取又ハ費消シタルトキハ本條ノ規定ヲ適用シテ處斷スヘキハ當然ナリ左レハ本件被告カ收入役ニ代リテ過徴収ノ金員ヲ保管シタル場合ニ於テハ假令其保管ハ法律上ノ職責ニ出テストスルモ之レカ爲メニ被告ニ於テ法律上有スル所ノ監督ノ職權ヲ失フヘキ者ニ非ラサレハ其保管金ヲ費消シタル場合ニ於テハ被告自ラ監守スル金員ヲ竊取シタルト謂フコトヲ得ヘキヲ以テ原院ニ於テ被告ノ所爲ニ對シ刑法第二百八十九條ヲ適用シタルハ違法ニ非ラス依テ本論旨ハ理由ナシ

●森林竊盜事件

明治三十八年(レ)第四八五號  
明治三十八年五月一日宣告 (破毀)

判決要旨

一、森林主事カ非現行犯事件ニ付キ證據物件ヲ差押ヘタルトキ

ハ壇ニ豫審處分ニ屬スル行爲ヲ爲シタルモノナレハ其處分ハ違法ニシテ之カ結果ヲ記載シタル實況書ハ無効ナリトス

第一審 福島地方裁判所 第二審 宮城控訴院  
被告人 八幡進之助 辯護人 高木益太郎

右森林竊盜被告事件ニ付明治三十八年三月二十二日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

辯護人高木益太郎第二辯明書ノ一ハ刑事訴訟法第四十七條ノ規定ニヨレハ林務官ハ司法警察官トシテ捜査行爲ヲ爲シ現行犯ノ特別場合ニ於テノミ強制的處分ヲ爲シ得ルニ止マルモノトス今原院ニ於テ證據ニ引用シタル明治三十七年四月二十九日附犯所實況書ヲ閱スルニ右ハ司法警察官タル森林主事折笠十三カ犯所ニ出張シタル結果ヲ錄取シタル書面ニシテ現行犯アリト思料シテ豫審處分ヲ爲シタルモノニアラス然ルニ右調書ノ内容ニ「盜伐木ヲ原料トシテ製炭シタル物件ハ同村大字同字荷田ノ民有地ニ於テ證據物件トシテ差押ヘタルモ雨露浸キノ爲メ字殿畑民有地ヲ借受ケ積置キ同地鈴木市藏ヲシテ保管セシメタリ」トノ記載アリテ明カニ豫審判事ニ屬スル差押行爲ナルヲ以テ越權ノ措置ニ出テタル無効ノ調書ナリト云ハサルヲ得ス然ルニ其無効ノ書類ニ依テ被告ヲ問責シタル原判決ハ破毀ヲ免レスト云フニ在リ○依テ所論犯所實況書ヲ閱スルニ同實況書ハ司法警察官タル森林主事折笠十三カ被告事件ニ付捜査處分ヲ爲シタルコトヲ記載シタルモノニシテ現

森林主事ノ豫審處分



行犯アリト思料シテ豫審ニ屬スル處分ヲ爲シタルニ非サルコトハ同實況書ニ徴シ明瞭ナリ從テ同實況書ニ記載セラレタル證據物件ヲ差押ヘ之ヲ鈴木市藏ニ保管セシメタル事實ハ明カニ搜查處分ノ範圍ヲ脱シ豫審處分ニ屬スル行爲ヲ爲シタルモノナレハ其行爲ハ法律ニ背違シ其結果ヲ記載シタル同實況書ハ無効タルヲ免レ然ルニ原判決ハ同實況書ヲ證據ニ採用シタルカ故ニ所論ノ如ク破毀ノ原由アルモノトス本論旨ニシテ既ニ上告ノ理由アルコトヲ認ムル以上ハ他ノ論旨ニ對シテハ別ニ説明ノ要ナシトス

二八〇

●私書偽造行使委託金騙取事件

明治三十八年(レ)第七三三號  
明治三十八年六月二十六日宣旨

(棄却)

判決要旨

一、刑法第三百九十五條後段ニ所謂詐欺ノ所爲トハ其所爲委託物ヲ取出ス時期ノ前ナルト否トヲ論セス苟クモ犯人ヲシテ其企圖シタル横領ノ目的ヲ達セシムルノ手段ト爲ルヘキモノハ總テ之ヲ包含ス

(審照) 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金銀物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取携帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス(刑法第三百九十五條)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 松村 裕 辯護人 高木益太郎 尾崎利中

右私書偽造行使委託金騙取被告事件ニ付明治三十八年五月十六日東京控訴院カ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

第二點ハ右被告人カ會社掛員ヲシテ作成セシメタル傳票中既ニ金錢ヲ出入シ了リ其後ニ於テ作成セシメタルモノアリ然ラハ則チ假令其傳票ハ偽造ナリトスルモ其偽造行使ニ依テ金錢ヲ騙取シタルモノニアラサルヤ明白ナリ然ルヲ原審裁判ハ傳票偽造行使ニ依テ金錢ヲ騙取シタルト爲シタリ是レ前後ヲ顛倒シタルモノニシテ理由ノ齟齬スル違法ノ裁判ナリトスト云フニ在レトモ○原判決ハ被告カ傳票ヲ偽造行使シタル毎ニ其偽造行使ノ後ニ於テ傳票ニ符合スル金員ヲ横領シタル事實ヲ認定シタルモノナリト解シ得ヘキノミナラス刑法第三百九十五條後段ニ所謂詐欺ノ所爲トアル中ニハ其所爲委託物ヲ取出ス時期ノ前ニアルト後ニアルトヲ問ハス苟モ犯人ヲシテ其企圖シタル横領ノ目的ヲ達スルコトヲ得セシムルノ手段トナルヘキモノハ總テ之ヲ包含スルモノナルカ故ニ原判決カ認ムル如ク傳票ノ偽造行使ニ依テ金錢ヲ騙取シタル事實ナルニ於テハ金錢ヲ取出シタル所爲カ傳票ヲ偽造行使シタル前ニアルモ亦刑法第三百九十五條後段ニ問擬スヘキモノナルヲ以テ本論旨ハ何レノ點ヨリ論スルモ其ノ理由ナシ

●公文書偽造行使事件

明治三十八年(レ)第一六五號  
明治三十八年三月二日判決

(棄却)

刑法第三百九十五條後段「詐欺」ノ意義

二八一

判決要旨

一村役場ノ書記カ擅ニ戶籍簿ヲ變造シタル後之ニ基キ戶籍吏ノ名義ヲ冒シ其ノ職印并ニ役場印ヲ盜捺シ戶籍謄本ヲ作成シタルノ所爲ハ戶籍簿變造行使竝ニ謄本偽造行使ノ二罪ヲ構成ス

第一審 仙臺地方裁判所古川支部

第二審 東京控訴院

被告人 佐々木源之丞

辯護人 中村徳重郎

右公文書偽造行使被告事件ニ付明治三十八年一月十八日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
辯護人中村徳重郎上告趣意辯明書ハ本件ハ役場ノ戶籍ヲ變造シ其變造シタル戶籍簿ノ謄本ヲ作成シタルモノナレハ單ニ戶籍變造ノミニ對シ刑ヲ科ス可ク謄本作成ニ關シテハ決シテ處罰セラルヘキモノニアラス何トナレハ變造シタル戶籍ト同様に謄本ヲ作成シタルモノニシテ從テ眞實ニアラス謄本ヲ作成シタルモノニアラサレハナリ之レ罪トナラサル者ニ對シ刑ヲ科シタル不法アルノ

ミナラス「熊谷こうノ夫某」ニ行使シタリト説明シ其行使ヲ受ケタル被害者氏名ヲ判定セサルハ違法ナリト云フニ在リ○依テ審按スルニ本件ノ戶籍謄本ハ被告自カラ變造シタル戶籍簿ニ基ツキ作成シタルモノナレハ其原本ト同様ナル内容ヲ有スル謄本ヲ作成シタルコト明白ニシテ謄本自體ニ原本ト相異ナリタル記載ヲナシタルモノニアラサルコトハ實ニ上告所論ノ如シ然レトモ本件ハ謄本作成ノ權限ナキ村役場書記カ戶籍吏岡本彦四郎ノ名義ヲ冒シテ其職印並ニ戶籍役場印ヲ盜捺シテ擅ニ戶籍謄本ヲ作成シタル點ニ於テ謄本偽造行使罪ヲ爲スモノナレハ其偽造ニ係ル謄本ノ記載カ原本ト同様ナルト否トハ敢テ犯罪ノ成否ニ影響スヘキモノニアラス原院認定ノ如ク被告カ戶籍吏岡本彦四郎戶籍事務主任書記青木新之助ノ不在ニ乘シ擅ニ高橋昌治ノ戶籍簿中其次女いさみの生年月日ヲ變造シ次テ戶籍吏ノ職印戶籍役場印ヲ盜捺シテ戶籍吏岡本彦四郎名義ノ戶籍謄本ヲ右變造ノ原簿ニ基ツキ作成シテ行使セシメタル以上ハ原簿ノ記載ト同様ナル謄本ヲ作成シタリトスルモ其公文書偽造罪ヲ構成スルハ勿論ナリ殊ニ戶籍簿ト謄本トハ一ハ永久ニ戶籍役場ニ備付ケテ身分證明ノ用ニ供シ一ハ請求ニヨリ之ヲ交付シ格段ナル關係ニ於テ當事者ヲシテ證明ノ用ニ供セシムルモノナレハ二者各別ノ效用ヲ致スニヨリ本件被告ノ所爲カ戶籍簿變造行使及ヒ謄本偽造行使ノ二罪ヲ構成スルヤ是レ亦論ヲ俟タサル所ナルヲ以テ原院カ被告ニ對シ戶籍簿變造行使及ヒ謄本偽造行使罪トシテ處斷シタルハ相當ナリ又タ原院判決ニハ熊谷コウ夫某ニ交付セシメテ行使ヲ遂ケタルモノト判示シアリテ偽造謄本行使ノ事實理由ノ説明トシテ毫モ缺クル所ナケレハ其謄本ノ交付ヲ受ケタル者ノ氏名等ヲ詳記セサレハトテ判決ノ理由ニ不備アリト云フヲ得ス本論旨ハ

町村役場書記ノ戶籍謄本偽造

總テ其理由ナシ  
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニヨリ本件上告ハ之ヲ棄却ス

●損害賠償請求事件 明治三十八年(オ)第二百二十三號  
明治三十八年六月五日判決 (棄却)

判決要旨

一、強制執行ノ爲メ所有權ヲ侵害セラレタル第三者ハ民事訴訟法(第五百四)ニ依リ異議ノ申立ヲ爲サスシテ民法(七)ニ依リ不法行為ヲ原因トシテ損害賠償ノ訴ヲ爲スヲ妨クス

(參照) 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨グル權利ヲ主張スルトキハ訴ヲ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセサルトキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張ス可シ(民事訴訟法第五百四十九條第一項)

故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リテ生ジタル損害ヲ賠償スル責ニ任ス(民法第七百九條)

第一審 函館地方裁判所 第二審 函館控訴院  
上告人 畑野定治 訴訟代理人 齋藤二郎  
被上告人 若狹直次郎

右當時者間ノ損害賠償請求事件ニ付函館控訴院カ明治三十八年三月九日言渡シタル判決ニ對シ上

告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由第五點ハ本件訴訟提起ノ當時ニ於テ係争ノ基本タル強制執行ノ手續カ既ニ業ニ何等ノ異議ヲ留メスシテ競賣ノ方法ニ依リ終了シ居リタルコトハ當事者間争ナキ所ナリトス而シテ強制執行ハ如斯方法ニ依リ終了スルニ因リ恰モ確定判決ニヨリ權利關係ノ確定スルト均シク其レ自身ニ於テ適法ナルコトヲ證明スルノ效力ヲ有スルモノナリ從テ爾後之ニ對シテ不法ヲ主張シ若クハ損害賠償ヲ要求スルカ如キハ斷シテ法ノ許サ、ル所ニシテ民事訴訟法第五百四十九條ニ依ラスシテ漫リニ差押物件ニ對シ所有權ヲ主張スル者ノ如キ殊ニ然リトナス然リ而シテ動産ニ對スル執行ハ執達吏ノ職權行為ニ因リ債權者ノ指揮ニ從フコトナク獨立ノ認定ニ基キ之カ實行ヲ爲スモノニシテ之等ノ行動ニ付キ債權者ノ素ヨリ干知スル所ニアラサルハ已ニ第二點ニ論スル所ノ如ク而カモ執行ノ委任ヲ爲シ執達吏ノ獨立的職權行為ニヨリ爲シタル結果ニ付キ其利益ヲ享受スルハ實ニ債權者ノ權利ナリトス然ルニ原判決ハ之等強制執行終了ノ確定效力執達吏ノ獨立的職權行為及ヒ債權者タル上告人ノ權利ヲ無視シ以テ上告人カ第三者ニ對スル債權ノ執行トシテ不法ニ被上告人ノ所有物件ニ對シ強制執行ヲ爲シタリトシテ何等異議ナク從テ執行不許ノ宣言アリシコトナキ強制執行ニ關シ上告人ニ對シ損害賠償ノ責ヲ負ハシメタルハ執行ノ確定力ヲ無視シ法則ヲ不當ニ適用

強制執行ノ異議ト損害賠償

シタル違法アルモノト思料スト云フニ在リ○依テ接スルニ第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ有スルトキハ債權者ニ係リ其強制執行ニ對シ異議ノ訴ヲ爲シ得ヘキハ民事訴訟法第四百四十九條ノ規定スル所ナルモ此規定アルカ爲メ第三者カ右異議ヲ爲サス自己ノ所有權ヲ奪取セラレタル以上ハ不法行爲ニ因リ自己ノ所有權ヲ侵害セラレタルコトヲ原因トシ民法第七百九條ニ基キ其不法行爲者ニ對シ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ禁止シタルモノトスヘキ理由ナキヲ以テ強制執行ニ因リ所有權ヲ侵害セラレタル第三者ハ民事訴訟法第五百四十九條ニ依リ異議ノ訴ヲ爲サスシテ民法第七百九條ニ基キ不法行爲ヲ原因トシ損害賠償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ルモノトスルハ本院ノ判例トシテ認ムル所ナリ依テ本論旨モ亦其理由ナシ

竊盜事件 明治三十八年七月六日判決 (棄却)

判 決 要 旨

- 一、委託物費消罪ハ委託契約ニ背ク罪(所謂背信ノ罪)ニアラスシテ受寄ノ財物ヲ擅ニ處分スルノ罪ナリ
- 一、受託者ニアラサル者カ受託者ト共謀シテ受託物ヲ費消シタル所爲ハ委託物費消罪ヲ構成ス
- 一、監守盜罪ハ特立ノ犯罪ニアラス其ノ罪質ハ竊盜又ハ委託物費消罪ニシテ常人ノ刑ヲ加重シタルモノニ外ナラス
- 一、官吏ニアラサル者カ官吏ト共謀シテ其ノ官吏ノ保管ニ係ル官金ヲ消費シタルトキハ官吏ハ監守盜ヲ以テ論シ非官吏者ハ委託物費消罪ヲ以テ問罪スヘルモノトス

說 明

(一) 受託者ニアラサル者カ受託者ト共謀シテ受託物ヲ消費シタル場合ニ於テ之ヲ

委託物費消罪ノ性質○非受託者ト受託者トノ共犯處分○監守盜ノ性質  
○官吏ト非官吏トノ共犯處分



分シタルトキハ其ノ所爲ノ實質ハ之レ一種ノ竊盜ニ外ナラス而モ此ノ二者ニ對シテ監守盜ナル罪名ノ下ニ嚴罰スル所以ノモノハ犯人ニ官吏タル身分アルノヲ以テ普通ノ委託物費消若クハ竊盜ニ對シ其ノ刑ヲ加重スルモノニ外ナラス換言セハ竊取ノ手段ヲ以テ監守盜ヲ犯シタルトキハ其ノ罪質ハ則チ普通竊盜ノ一種ニ過キスシテ單ニ其ノ刑ヲ加重シタルニ外ナラス又タ委託物費消ノ手段ヲ以テ此ノ罪ヲ犯シタルトキハ其ノ罪質ハ亦タ普通ノ所謂委託物費消罪ニシテ單ニ其ノ刑ヲ加重シタルニ外ナラス左レハ今非官吏者カ官吏ト共謀シテ監守盜罪ヲ犯シタルトキハ其ノ非官吏者ハ其ノ加重セラレタル監守盜ノ本刑ヲ受クルコトナキモ少クモ其ノ探レル手段ノ區別ニ從ヒ普通ノ委託物費消若クハ竊盜ノ處罰ヲ免カルハコト能ハサルヘシ

(參照) 官吏自ラ監守スル所ノ金穀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲後ニ處ス一因テ官ノ文書簿冊ヲ増減變換シ又ハ破毀シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス(刑法第二百八十九條)

第一審 橫濱地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 谷口嘉市郎

右竊盜被告事件ニ付明治三十八年五月二十四日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意ハ第一原判決ハ本件ヲ以テ委託物費消罪トシテ刑法第三百九十五條ヲ適用セラレタルモ凡ソ刑法上犯罪ノ成立スルニハ其ノ構成要素具備スルコトヲ要ス即チ委託物費消罪ニ於ケル構成要素タル一委託者タル資格ニ受寄物三費消行爲以上ノ三要素ヲ必要トスルヤ明カナリ然ルニ本件ニ於ケル物件ハ被告ノ爲メ受寄物ニ非ラス同時ニ被告ハ之カ受託者ニ非ラス尙費消行爲ニ就テモ相被告菊地五郎ノ依頼ニヨルモノニシテ被告ニ於テハ費消ノ意思ナク從テ其行爲ノアルヘキ等ナシ故ニ原院カ被告ヲ委託物費消罪ニ問ハレタルハ擬律ノ誤錯ト思料スト云フニ在リ○因テ按スルニ委託物費消罪ハ寄託契約ニ違反スルノ犯罪ニアラスシテ他人ノ所有權ヲ侵害シテ其委託ニ係ル物件ヲ擅ニ費消スルニ因テ成立スル犯罪ナルヲ以テ受寄者以外ノ者ト雖モ苟モ受託者ト共謀シテ犯罪成立ノ要素タル財物費消ノ行爲ヲ爲シタルトキハ即チ委託物費消罪ヲ以テ論セザルヘカラス而シテ原判決ヲ閱スルニ被告ハ本案ニ於ケル物件ノ受託者ニアラスト雖モ本案物件ハ共犯者タル橫濱監獄ノ看守菊地五郎カ職務上保管セルモノニシテ被告ハ右五郎ト共謀シテ之ヲ費消シタル事實ナレハ原院カ被告ヲ寄託物費消罪ニ問擬シタルハ相當ナリ又被告ニ於テ費消ノ意思ナク且其行爲ナカリシト主張スルモ右ハ原院カ職權ヲ以テ認定シタル事實ニ對シ漫ニ非難ヲ試ムルニ過キナルヲ以テ固ヨリ上告ノ理由トナラス

委託物費消罪ノ性質○非受託者ト受託者トノ共犯處分○監守盜ノ性質  
○官吏ト非官吏トノ共犯處分

第四尙刑法上共犯ト稱スルハ二人以上同一罪ヲ犯スニアラサレハ共犯例ノ適用ナキモノナルニ一方ハ監守盜罪ヲ以テ問擬セラレ被告ハ寄託物費消罪ヲ以テ問ハレタルハ失當ノモノト信ス尙第一ニ於テ陳述セル如ク被告ハ其犯罪構成要素ナキヲ以テ到底同一罪ヲ犯サント欲スルモ得ヘカラス實際ニ於テモ共同實行者タル能ハス假リニ一例ヲ舉レハ官吏收賄罪ニ於ケル官吏ノ資格ナキ一人ハ假令官吏ト共謀シテ賄賂ヲ收受シ之ヲ分配スルモ一人ニ收賄罪ノ成立セサルト同シク被告モ又監守官吏ノ資格ナク況ンヤ受託者ノ資格ナキハ勿論ナリ然ルニ被告ヲ以テ寄託物費消罪ノ共犯者トシテ第三百九十五條ヲ適用セラレタルハ不當ノ判決ナリト思料スト云フニ在レトモ○被告ハ菊地五郎ト共謀シテ同人ノ保管セル物件ヲ費消シタルモノナルコトハ前説明ノ如クニシテ即チ被告カ同人ト共ニ同一犯罪行為ヲ爲シタルヤ明白ナリ而シテ刑法第二百八十九條ノ罪ハ其罪質竊盜又ハ寄託物費消罪ニシテ唯犯人ノ官吏タル身分ニ因リ其刑ヲ加重シタルモノニ外ナラス故ニ共犯者タル五郎ハ其監守官吏タル身分アルカ爲メ監守盜罪ニ問擬セラレタルモノナレハ被告ヲ以テ五郎ノ共犯ト爲スニ毫モ妨ケアルコトナシ又官吏收賄罪ハ官吏其職務ニ關シ人ノ囑託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許スルニ因テ成立スル犯罪ニシテ官吏ニアラサル者ハ假令官吏ト共謀スルモ其犯罪ヲ實行スルニ由ナキヲ以テ官吏ニアラサレハ其實行正犯タルコト能ハサルハ所論ノ如シト雖モ寄託物費消罪ハ之ト異ナリ受託者ニアラスト雖モ犯罪ノ實行ヲ爲シ得ヘキコトハ己ニ第一點ニ於テ説明シタル如クナルヲ以テ本論旨ハ總テ其理由ナシ

誹毀並附帶私訴事件 明治三十八年七月二十五日宣告 (破毀)

判決要旨

一、誹毀事件ノ民事原告人カ廣告文ノ始ニ掲クヘキ廣告ナル文字ノ上ニ謝罪ノ二字ヲ冠スヘキ旨ヲ請求シタルコトナキ場合ニ謝罪廣告ト題シテ廣告スヘキコトヲ言渡スハ請求以外ニ涉リタル不法ノ判決ナリ

第一審 東京地方裁判所 第二審 名古屋控訴院  
 公訴私訴上告人 深井勘三郎 辯護人 鹽谷恒太郎  
 私訴被上告人 佐藤政五郎 外一名

右誹毀被告事件及之ニ附帶スル私訴事件ニ付明治三十八年六月三日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告趣旨書ノ第三ハ原判決ハ民事原告人ノ申立テサル事項ヲ原告ニ歸セシメタルモノニシテ民事第二百三十一條ニ違背シタル不法アリ原院ハ控訴人(民事原告人)ニ於テ左ノ通り判決ヲ求ムト申立タリト判示セル「被控訴人ニ於テ東京日日新聞、時事新報、東京朝日新聞、貿易新報、横濱

請求以外ニ涉ル判決

日報へ第二號活字ヲ以テ

謝罪廣告

明治三十七年六月十三日發行第三千八百六十八號萬朝報紙上橫濱電鐵架橋問題ト工事ノ不始末ト題スル記事中佐藤政五郎海老塚德三郎兩氏ニ對スル記事ハ事實全ク無根ニテ右兩氏ノ名譽ヲ毀損シタルコトヲ謹テ茲ニ謝ス

萬朝報元發行兼編輯人

深井勘三郎

判例彙報第六卷刑判例

右ノ廣告ヲ判決確定ノ翌日ヨリ二日間被控訴人ノ費用ヲ以テ爲ス可シ若シ右日限ニ被控訴人ニ於テ爲サ、ルトキハ控訴人ニ於テ之ヲ爲シ其費用金百五圓六十錢ヲ賠償ス可シ」然レトモ控訴人ハ「謝罪廣告」ト題シ廣告スヘキコトノ申立ヲ爲シタルコトナシ是レ原院公判始末書及控訴申立書ニヨリ明カナリ然ルニ原院カ恰モ「謝罪廣告」ト題シ一定ノ文詞ヲ廣告ス可シトノ申立アリタル如ク誤解シ本件判決主文ノ如ク「謝罪廣告」ト題シ廣告ス可シト判決ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在リ○因テ訴訟記録ヲ査閱スルニ民事原告人カ第一審裁判所ニ提出シタル私訴狀ニハ一定ノ申立トシテ廣告文ノ始メニ謝罪廣告ト題シアリタルモ第一審公廷ニ於テ被告代理人ヨリ謝罪ノ二字ニ對シ抗辯アリタル際民事原告人ノ代理人ニ於テ一定ノ申立中謝罪ノ二字ヲ訂正シタルコトハ第一審公判始末書ノ記事ニ徵シ明カニシテ其後民事原告人ノ代理人ヨリ第一審判決ニ對シ爲シタル控訴申立書ニモ一定ノ申立トシテ掲ケタル廣告文ノ始メニハ單ニ廣告ト題スルノミニシテ謝罪ノ

判例彙報第六卷刑判例

二字ヲ冠シタルコトナシ而シテ原院公判始末書ニ民事原告人ハ控訴申立書ノ通り一定ノ申立ヲ爲シタル旨ノ記載アルニ徵セハ民事原告人ニ於テ廣告文ノ始メニ掲クヘキ廣告ナル文字ノ上ニ謝罪ノ二字ヲ冠スルコトヲ請求シタルコトナキコトハ明白ノ事實ナルニ原院カ廣告ナル文字ノ上ニ謝罪ノ二字ヲ冠シ謝罪廣告ト題シ廣告ス可キ旨ノ言渡ヲ爲シタルハ即チ民事原告人ノ請求セサル事項ヲ民事原告人ニ歸セシメタルモノニシテ其不法タルヤ論ナキヲ以テ原院私訴判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ公訴ニ關スル本件上告ハ之ヲ棄却シ同法第二百八十六條ニ依リ私訴ニ關スル原判決中民事被告人ノ敗訴ニ係ル部分ヲ破毀シ同法第二百八十七條ノ規定ニ從ヒ原判決ノ事實及理由ニ依リ本院ニ於テ直チニ判決スルコト左シ如シ

上告人深井勘三郎ハ時事新報及ヒ貿易新報ノ普通廣告欄ニ「廣告」ノ二字ト「萬朝報元發行兼編輯人」深井勘三郎」ノ十五字ヲ二號活字ニテ

廣告

明治三十七年六月十三日發行第三千八百六十八號萬朝報紙上橫濱電鐵架橋問題ト工事ノ不始末ト題スル記事中佐藤政五郎海老塚德三郎兩氏ニ對スル記事ハ事實全ク無根ニテ右兩氏ノ名譽ヲ毀損シタルコトヲ謹テ茲ニ謝ス

萬朝報元發行兼編輯人

深井勘三郎

請求以外ニ涉ル判決



トアル廣告ヲ判決確定ノ翌日ヨリ二日間上告人ノ費用ヲ以テ爲ス可シ若シ右日限ニ上告人ニ於テ之ヲ爲サ、ルトキハ被上告人カ之ヲ爲スニ要スル費用トシテ時事新報ハ一日一行金四十五錢貿易新報ハ同上四十錢ノ割合ヲ以テ其費用ヲ支拂フ可シ

●詐欺取財及同未遂事件 明治三十八年(レ)第八〇七號 明治三十八年七月六日宣告 (破毀)

判決要旨

一、受託者カ擅ニ受託物ヲ入質セント欲シ其入質方ヲ他人ニ依頼シタルモ他人ニ於テ入質ノ手續ニ着手セル事實ナキ以上ハ受託者ノ所爲ハ委託物費消罪ノ準備行爲ト稱シ得ヘキモ未タ其未遂犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院 被告人 青野琢治

右詐欺取財及同未遂被告事件ニ付明治三十八年五月三十一日東京控訴院カ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
上告趣意書第二、原審ニ於テ認メラレタル第二ノ事實ハ即チ上告人カ會テ「ワカ」ヨリ借受使用スル懷中時計ヲ米吉妻「ヤヨ」ニ質入方ヲ依頼セシモ「ヤヨ」ハ之ヲ質屋ニモ持チ行カスシテ片

山「ワカ」ニ返還シタリト云フニ在リ然ルニ一件記録ニ依レハ上告人ハ酌量ノ餘尙酒ヲ欲シ「ヤヨ」ニ酒ヲ買ハノコトヲ強ヒ錢ヲ強ヒ「ヤヨ」ノ謝絶シタルヨリ騎虎ノ勢ヒ時計ヲ出シテ質ニ入レ其錢ヲ以テ酒ヲ買ヒ來ルヘシト請求シ「ヤヨ」ハ醉狂人ノ逆フノ無駄ナルヲ悟リ之ヲ諾シタルモノ、如ク僞似シ片山「ワカ」ニ該時計ヲ返還シタル事實ナルコトハ明白ナリ如上ノ事實ハ犯罪ヲ組成スルノ要素ヲ缺ク當ニ要素ヲ缺ク而已ナラス上告人時計ヲ入質シテ酒ヲ求メヨト言ヒタル如キハ殆ト無意識ニシテ罪ト爲ルヘキモノニアラス然ルヲ原裁判所ハ此事實ニ對シテ委託物費消罪ノ未遂犯ニ問擬セラレタルハ最モ不法ナリトスト云フニ在リ○依テ按スルニ原判決カ認メタル事實ハ被告カ片山「ワカ」ヨリ借受ケ居タル銀懷中時計ヲ擅ニ入質セントシ藤井「ヤヨ」ニ其入質方ヲ託シ交付シタルニ「ヤヨ」ハ之ヲ受取り乍ラ「ワカ」方ニ到リ情ヲ告ケタルヨリ事發覺シタリト云フニ在リテ被告カ企テタル委託物費消罪ハ委託物ヲ入質シテ費消スルニ依リ成立スルモノナレハ未タ入質ノ手續ニ着手シタル事跡ナキニ於テハ其實行ノ端緒タニアリタルモノト云フヲ得ス故ニ被告カ委託物ヲ入質セント欲シ其入質方ヲ藤井「ヤヨ」ニ依頼シタルモ「ヤヨ」ニ於テ入質方ノ手續ニ着手シタル事實ナキ以上、被告ノ行爲ハ委託物費消罪ノ準備行爲ト稱シ得ヘキモ未タ其未遂犯ヲ以テ論シ得ヘキ程度ニ達シタルモノニ非ス因テ原判決カ認メタル被告ノ所爲ハ罪トシテ論スヘキモノニアラサルニ委託物費消未遂罪ニ問擬シタルハ擬律ニ錯誤アル不法ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノトス

委託物費消罪ノ未遂

●故殺放火竊盜事件 明治三十八年(レ)第八五五號 (破毀)

判決要旨

一 住居人カ死亡シタル後其家ニ放火シタル所爲ハ死體ノ未タ其ノ屋內ニ存在シタルト否トナ不問刑法第四百二條ノ所爲

(火ヲ放テ人ノ住居シタル者)ニ該當セス

一 刑法第四百二條ノ放火罪ノ目的物タルヘキ家屋トハ單ニ人ノ居住ニ供シタルモノ、ミチ以テ足レリトス放火ノ當時其ノ家屋ニ住居人ノ存在シタルコトヲ必要トス

說明

刑法第四百二條ハ放火ヲテ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル犯罪ヲ規定ス而シテ同條ノ所謂人ノ住居シタル家屋トハ苟モ生命アル吾人有形人カ其家ヲ根據トシテ居住スルノ事實アルコトヲ必要トス人カ其家ニ居住スルモ放火ノ當時已ニ死云セルトモ遺骸尙其家ニ存在スルモ最早之ヲ以テ人ノ住居シタル家屋ナリトシテ死トモ從テ亦之ニ放火スルモ同條ノ規定ニ該當セス是レ他ナシ凡ソ人ニ非テ死トモ法律上ノ觀念ハ之ヲ以テ一ノ物體トナスヘクタルノ資格ヲ與ヘサルハ

ナリ又々人カ其ノ家屋ニ居住スル以上ハ放火ノ當時必スモ屋內ニ現在シタルコトヲ必要トセス住居人ハ偶々他出シテ其留守中ニ放火セラレタルトモ同條ヲ適用處斷スルニ妨クルコトナシ何トナレハ法文ニハ人ノ住居シタル家屋トアリ住居ト云フコトハ必スモ人カ其ノ屋內ニ居ルコトノミヲ意味スルニアラス他出シテ所用ヲ辨シ又ハ他出シテ遊歩ヲ爲ス間モ亦タ是レ住居ノ内容ニ外ナラス從テ放火ノ當時其ノ家ノ住人カ他出シテ不在ナリト云フノ故ヲ以テ其ノ家ヲ稱シテ人ノ住居シタル家屋ニアラスト云フヲ得ザレハナリ

(參照) 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス(刑法第四百二條)

第一審 長崎地方裁判所 第二審 長崎控訴院 被告人 香椎伊三治

判例刑卷六拾第報彙例判

右故殺放火竊盜被告事件ニ付明治三十八年六月六日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ 上告趣旨第二原判決ハ擬律ヲ錯誤セシ違法アリトス上告人カ未永テイノ家屋ニ放火セシモノトスルモテイハ單身該家屋ニ住居セシ事實及ヒテイノ死後放火セシ事實ハ原院ノ認ムル所ナレハ此事實ニ對シテハ刑法第四百三條ヲ適用スヘキニ同第四百二條ヲ適用セシハ擬律ヲ錯誤セシモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ死體ノ存在ハ人ノ居住ニ非ス而シテ刑法第四百二條ハ人ノ住居シタル家屋云々トアリテ現ニ人ノ住居シタル家屋ニ放火シタルモノヲ制裁スルノ法條ナルコト文理明白ナ

刑法第四百二條ノ適用○人ノ住居シタル家屋ノ意義

レハナリ人或ハ曰ハシ人ノ住居シタル家屋トハ人ノ住居ニ供シタル家屋ノ意義ナリト而モ被害者ノ死後ハ畢竟空居ニシテ會テ人ノ住居セシ家屋又ハ將來人ノ住居スヘキ家屋タルニ過キサレハ右ノ解釋ニモ相當セサルヲ如何セン故ニ本案ハ人ノ住居セサル家屋ニ放火セシモノトシテ刑法第四百三十三條ヲ適用スヘキ事犯ナリトスト云フニ在リ○依テ按スルニ原判決ハ被告カ明治三十八年一月二十五日深夜財物ヲ強取スル目的ヲ以テ末永林三郎方隱宅ニ侵入シ該家ニ獨棲シ居タル林三郎ノ姉テイヲ殺害シ財物ヲ奪取シ數回ニ之ヲ搬出シタル末其ノ犯跡ヲ蔽ハンカ爲翌二十六日午前三時頃同家ニ放火シ之ヲ燒燬シタル旨ノ事實ヲ認メアリテ被告カ放火シタルハ獨居ノ被害者ヲ殺害シ財物ヲ搬出シタル後ニシテ當時他ニ住人ノ現存セシニ非サレハ被告カ放火セシ家屋ハ刑法第四百二條ニ所謂人ノ住居シタル家屋ト云フヲ得ス何トナレハ同條放火罪ノ目的物ト爲リ得ヘキ家屋ハ本件ノ如ク單ニ人ノ居住ニ供シタル家屋タリシヲ以テ足レリトセス住人ノ存在スルヲ必要トスレハナリ然ルニ原判決ハ右認定ノ事實ニ對シ刑法第四百二條ヲ適用シアルカ故ニ所論ノ如ク擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ニシテ破毀ヲ免レス

●私文書偽造行使詐欺取財公印盜用公文書偽造行使等事件

明治三十八年(七)第七九〇號  
明治三十八年七月四日判決 (棄却)

判決要旨

一、私人ノ作成スヘキ文書ト雖モ町村役場備付ノ書類トシテ偽

造行使シタル行爲ハ公文書偽造行使ヲ構成ス

一、町村役場ノ書記カ他人ノ改印届ヲ偽造シ役場ニ備付ケタル行爲ハ官文書偽造罪ヲ構成ス

第一審 熊本地方裁判所 第二審 長崎控訴院

被告人 澤野 露太郎

右私文書偽造行使詐欺取財公印盜用公文書偽造行使私印盜用被告事件ニ付明治三十八年五月二十三日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣旨書第二點ハ原判決第一事實指示ノ部ニ「前略之ヲ同役場ニ備付ケテ其管掌ニ係ル公文書及公簿ヲ偽造行使シ云々」法律適用ノ部ニ於テモ「被告カ第一ノ公文書偽造行使ノ所爲ハ各明治二十三年法律第百號云々」ト判示シ公文書及公簿偽造行使ノ二罪ト認定シ各該當法條ヲ適用セラレタレトモ第一事實ノ部ニ於テ認メラレタル公文書偽造ノ點ハ發着簿ト題スル公簿中收受ノ部ニ「一七三二」同月同日「改印届」坂田宗彦「ナル記入ヲナシタルコトノミニシテ發着簿ニ右ノ記載ヲナシタルハ即チ原判決ノ所謂公簿ノ偽造ニ該當シ其他ニ公文書ヲ偽造行使シタル事實ヲ認メラレタルコトナシ或ハ右事實指示ノ前部ニ同日同役場ニ於テ之レヲ受理シタルモノ、如ク仕做シ之レヲ役場ニ備付ケ云々」記載アルハ第一審判決ノ所謂「其(改印届)欄外下部ニハ同役場ニ

町村役場ニ備付ケノ改印届ノ偽造

於テ其日之レヲ受理シタル意味文言並ニ受付番號等ノ記載ヲ爲シ云々」ニ該當スルノ意ニシテ此點ヲ以テ公文書偽造ノ事實ト認メラレタルモノナランモ「之レヲ受理シタルモノ、如ク仕做シ」トノ記載ノミニテハ如何ナル文書ヲ偽造シタルヤヲ知ルコト能ハスシテ公文書偽造ノ事實指示ト稱スルコトヲ得サルヤ明カナルヲ以テ原判決ハ發着簿偽造ノ事實ノミヲ認メタルニ拘ハラヌ之ヲ公文書偽造ノ二罪ニ間擬シタル不法若クハ罪トナルヘキ事實ノ記載ヲ欠ク刑事訴訟法第二百三條違犯ノ不法アルモノト思料スト云フニアレトモ公文書偽造行使罪ハ市町村ノ事務取扱上ニ於テ作成スル文書ヲ正當ノ權限ナクシテ作成行使スル場合ハ勿論本來私人ノ作成スル文書ト雖モ市町村役場備付ノ書類トシテ之ヲ偽造行使スルノ所爲ハ公文書偽造罪ヲ構成スルモノトス何トナレハ其文書ニシテ役場備付ノモノタル以上ハ市町村ノ文書トシテ所謂公文書ノ範圍ニ屬セサルヘカラサルヲ以テナリ果シテ然ラハ役場ニ提出セラレタル書類トシテ本件ノ改印届ヲ偽造行使シタル被告ノ所爲ハ公文書偽造行使罪ヲ構成スヘク此事實ヲ判文ニ掲ケタル原判決ハ犯罪事實ノ明示ニ於テ欠クル所ナキモノニシテ其以外ニ於テ何等犯罪事實ニ關スル記載ヲ要セサルモノトス故ニ原院カ被告ニ對シ改印届偽造行使ノ所爲アリトシテ擬律ヲ爲シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

●酒精及酒精含有飲料稅法違犯事件

明治三十八年(九)第八二九號  
明治三十八年七月六日宣告 (破毀)

判決要旨

一、明治三十五年法律第二十二號第一條ハ國稅ノ課稅標準額及ヒ稅額ハ四捨五入ノ法ニ依リ錢位ニ止ムヘキ旨ヲ規定スルカ故ニ納稅者ニ課スヘキ稅額ハ總テ此規定ニ從ヒ之ヲ算定スヘキモノトス從テ造石稅額ヲ以テ脫稅者ニ科スヘキ罰金ヲ定ムルノ標準ト爲シタル場合ニ於テモ亦其造石稅額ハ該規定ニ則リ之ヲ錢位ニ止メサルヘカラス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 廣島控訴院  
被告人 清水政次郎 辯護人 竹下延保

右酒精及酒精含有飲料稅法違犯被告事件ニ付明治三十八年六月七日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シ原院檢察長矢野茂ハ附帶上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
原院檢察長附帶上告趣意ハ原判決理由ニ曰ク「法律ニ照スニ被告ノ所爲ハ酒精及酒精含有飲料稅法第五條ニ違犯スルヲ以テ同第二條第十五條云々被告ヲ罰金六十七圓八十五錢五厘ニ處シ云々」ト判示シタルモ明治三十五年法律第二十二號第一條ニ依レハ國稅ノ課稅標準額及稅額ハ四捨五入ノ法ニ依リ錢位ニ止ムトアリテ本案被告カ負課セラルヘキ造石稅ハ其密造ニ係ル酒精ノ箇數十七

造石稅額ノ算定

箇五一ニ税法規定ノ税額即チ一箇七十五錢ト明治三十七年法律第三號非常特別税法第二條ノ增額即一箇ニ付二錢五厘ヲ添加シタル合計七十七錢五厘ヲ乘シタル金十三圓五十七錢一厘〇二五ノ中ヨリ其錢位以下ヲ切捨テ金十三圓五十七錢トナル而シテ右造石税ヲ基本トシテ其五倍ニ當ル罰金ハ應サニ金六十七圓八十五錢ナラサルヘカラス然ルヲ原判決カ前掲ノ如ク罰金六十七圓八十五錢五厘ニ處スヘキモノト説明シタルハ明治三十五年法律第二十二號第一條ヲ適用セザリシ不當アルモノナリト云フニ在リ○依テ按スルニ明治三十五年法律第二十二號第一條ハ國稅ノ課稅標準額及稅額ハ四捨五入ノ法ニ依リ錢位ニ止ムト規定シテ納稅者ニ課スヘキ稅額ハ總テ此規定ニ依リ算定スヘキモノナルカ故ニ本案ノ如ク造石稅額ヲ以テ脫稅者ニ科スヘキ罰金ヲ定ムルノ標準ト爲シタル場合ニ於テモ其造石稅額ハ亦右ノ規定ニ則リ錢位ニ止ムヘキモノトス然ルニ原判決ハ被告ニ科スヘキ罰金額ヲ算定スルニ方リ右ノ規定ヲ適用セザリシコト寔ニ所論ノ如クナルヲ以テ擬律ニ錯誤アル不法ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノトス

●恐喝取財事件 明治三十八年(レ)第八一八號 (破毀)

判決要旨

一、恐喝ヲ以テ證書ヲ騙取スル場合ニ之ヲ承諾スル被害者ノ意思表意ノ要素ニ錯誤アルトキハ證書ノ所有權ハ尙ホ被害者

ニ存シ犯人ニ移轉セス從テ犯人ノ得タル右證書ハ贓物トシテ之ヲ被害者ニ返還スヘク之ヲ沒收スルコトヲ得ス

第一審 宇都宮地方裁判所 第二審 東京控訴院  
被告人 添野傳藏 辯護人 佐久間長四郎

右恐喝取財被告事件ニ付明治三十八年六月六日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣旨書第二點ハ原判決ニ於テ押收ノ土地抵當借用證書ハ同第四十三條第三號第四十四條後段ニ依リ之ヲ沒收シタルモ事實認定ノ部ニ於テ該借用證書ハ石島庄七ヲ恐喝シテ騙取シタルモノナリトアル上ハ該借用證書ハ石島庄七ノ權利ニ屬スル借用證書タルコト勿論ナルヲ以テ其證書所有者ハ石島庄七ナリト決定スル上ハ之ヲ沒收スルコトヲ得ス然ルニ原判決ニ於テ沒收シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト思料スト云フニ在リ○依テ原判決ヲ按スルニ原院カ沒收シタル押收ノ土地抵當借用證書ハ被告等カ石島庄七ニ對シ告訴ヲ爲ス可シト詐言ヲ構ヘ之ヲ恐喝シテ義務免除ノ名ヲ以テ騙取シタルモノニシテ刑法第四十三條第三號ノ犯罪ニ因リ得タル物件ニシテ且ツ詐欺ニ因ル意思表示ニ依リ庄七ヨリ被告ニ移付シ庄七ヨリ取消ヲ求メタルコトナシト雖モ其義務免除ナル法律行為ハ告訴中止ヲ對價トシタルモノナルニ被告カ揚言シタル告訴ハ恐喝ノ手段ニ外ナラスシテ眞實告訴ヲ爲スモノニアラザレハ法律行為ノ要素ニ錯誤アルモノニシテ庄七ノ意思表示ハ無効ナ

騙取シタル證書ノ沒收

リトス故ニ本件證書ノ所有權ハ被告ニ移リタルニアラスシテ被害者タル石島庄七ニ存ス依テ同法第四十四條ニ依リ沒收スルコトヲ得スシテ贓物トシテ刑法第四十八條ニ依リ直チニ被害者タル石島庄七ニ還付スヘキモノナルニ之ヲ沒收シタルハ擬律錯誤ノ失當アルモノトス

三〇六

●公私文書偽造行使詐欺取財並附帶私訴事件 明治三十八年(レ)第八四〇號 明治三十八年七月二十五日宣告 (棄却)

判決要旨

一、特定ノ人ノ文書ヲ偽造スルニ當リ空想假設ノ氏名ヲ以テスルトキハ罪ナラスト雖モ其ノ本名ヲ用ユルコトヲ避ケンカ爲メ殊更ラニ之レニ類似ノ氏名ヲ用ユルトキハ文書偽造行使罪ヲ構成ス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院  
公訴私訴上告人 鈴木卯之助 辯護人 菅原 喬  
私訴被上告人 藤元 治郎

右公私文書偽造行使詐欺取財被告事件並ニ附帶私訴ニ付明治三十八年六月二日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

六四

被告卯之助辯護人菅原喬公訴上告趣意書第一點ハ原判決ハ被告カ明治三十七年十二月十六日本件被害者藤元治郎ヲ誘ヒ公證人崎山敬介役場ニ至リ同公證人ヲシテ土見長右衛門名義ノ抵當權設定金百二十圓貸借公正證書ヲ偽造セシメタリト認定シ被告ヲ公正證書偽造行使罪ニ問ヒタルモ本件一件書類中證人堂見長次郎豫審調書ニ證人ノ居村ニ堂見ノ姓ヲ唱フル者ハ證人ノ弟ノ外ナク又長右衛門ト稱スルモノアルモ姓ヲ異ニスル旨ノ供述記載及ヒ證人ハ養子ナキトノ供述記載及ヒ證人上田留吉豫審調書中ニ堂見長次郎ニハ養子ナシトノ供述記載アルニ依リ本件公正證書面ノ名義人土見長右衛門ナル氏名ハ全ク架空ノ名稱タルコトハ明ナリ而シテ凡ソ文書ニ於テ債務者トシテ無ノ氏名ヲ用ヒ文書ヲ作成シ之ヲ行使シタル場合ニ於テ文書偽造行使罪ノ性質上權利義務ノ主體ト爲リ得ヘキ人ノ資格ヲ詐ハルコトヲ要スルハ論ヲ俟タス之則チ御院判決例(明治三十五年(レ)第三八一號事件)ニモ約束手形ニ虛無ノ人名ヲ署シ之ヲ行使シタル所爲ハ記錄者ノ資格ヲ詐ハリタル事實ナキニ依リ約束手形偽造行使罪ヲ成立セスト判示セラレタル所以ナリ然レハ公正證書モ一ノ文書ナルニ依リ之ヲ論及シ虛無ノ氏名ヲ以テ公正證書面ノ債務者ト爲ス場合ニ於テモ亦同一ノ結果ヲ見サル可ラス從テ本件公正證書作成モ犯罪ヲ構成セサルコトハ疑ヲ容ル、能ハス然ルニ原院カ本件公正證書面ノ土見長右衛門ナル名稱カ虛無ナルコトヲ認メタルニ拘ハラヌ公正證書偽造行使ヲ以テ處斷シタルハ不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○因テ按スルニ被告カ本件公正證書ニ記載シタル土見長右衛門ナル氏名ノ者ナキコトハ原判決文中土見長右衛門ナル氏名ノ下ニ括弧ヲ以テ實ハ堂見長次郎ト記載シアルニ徴シ自ラ明カニシテ一面虛無ノ人名ヲ以テ公正證書ヲ作成シタ

本名ニ類似セル氏名ヲ用ユル文書ノ偽造

三〇七

ルカ如キ觀ナキニアラサルモ特定ノ人ノ文書ヲ偽造スルノ意ヲ以テ故ラニ其本名ヲ用ユルヲ避ケ  
類似ノ氏名ヲ記載シタルトキハ文書偽造行使異ヲ構成スルコトハ本院カ明治三十四年九月二〇四  
號私書偽造行使詐欺取財事件ニ付已ニ判示スル所ニシテ本件ニ付原院カ土見長右衛門ナル氏名ノ  
下ニ特ニ括弧ヲ以テ實ハ堂見長次郎ト記載シタルモ亦土見長右衛門ナル氏名カ虛無ノ人名ナルコ  
トヲ表示スルノ意ニハアラスシテ其實堂見長次郎ナル者ノ代理資格ヲ詐ハリ公正證書ヲ偽造スル  
ニ當リ被告カ故ラ其本名ヲ用ユルヲ避ケ土見長右衛門代理人トシテ之ニ署名シタルモノナルコト  
ヲ明示セントスル趣旨ナルコトヲ推知スルニ足レリ左レハ被告カ土見長右衛門ノ代理人トシテ公  
正證書ニ署名シタルハ虛無ノ人名ヲ署シタルニアラスシテ現ニ生存セル堂見長次郎ノ資格ヲ詐ハ  
リ署名シタルモノナレハ被告ノ所爲カ公正證書偽造行使罪ヲ構成スルヤ論ナキヲ以テ本論旨ハ上  
告ノ理由ナシ

●放火事件

明治三十八年八月十七日判決

(棄却)

判決要旨

一、住家トシテ平常使用スル建物ハ住居者カ一時外出シテ不在  
ナル時ト雖モ尙ホ刑法第四百二條ニ謂フ人ノ住居シタル家  
屋ニ該當ス從テ之ニ放火シ燒燬シタル者ハ同條ノ制裁ヲ免  
カレサルモノトス

說明

刑法第四百二條ノ所謂人ノ住居シタル家屋トハ必スモ住居人カ其屋內ニ在ルコ  
トヲ要セス所用ノ爲メ外出シタル留守中ト雖モ其家屋ハ尙人ノ住居シタル家屋  
ニ外ナラサルハ吾人カ本誌前號紙上ニ於テ説明スル所ナリ今也本判決ニ遭遇シ  
テ益々前説明ノ正確ナリシヲ證スルニ足レリ而シテ本件ニ就キ更ラニ一歩ヲ進  
メテ講究スヘキハ同法條ノ所謂人ナル意義是ナリ刑法第四百二條ノ所謂人ノ住  
居シタル家屋トアル其人ナル意義ハ自己ヲ除キ自己以外ノ人ノ凡テヲ包含ス  
故ニ自己ノ住居スル家屋ト雖モ自己以外ニ妻子其他家族同棲スル場合ニ自ラ之  
ニ放火シタルトキハ尙ホ本條ノ制裁ヲ免レス是ニ反シ自己一人獨住スル場合ニ  
自ラ之ニ火ヲ放チタルハトテ本條ノ罪ヲ構成セス蓋シ自己モ尙ホ是レ一箇ノ人

刑法第四百二條ノ適用

ノル以上ハ放火スル者ノ他人タルト自己タルト構成スルニ似タリト雖モ刑法ノ意ハ  
家屋ニ放火シタルニ相違ナキヲ以テ本罪ヲ構成スルニ住居シタル家屋ニ放火シタル者  
斯ル場合ヲ包含セザルナリ案スルニ刑法カ人ノ住居シタル家屋ニ放火シタル者  
ヲ以テ他家屋ノ放火犯ニ比シ一層刑罰ヲ嚴重ニシ特ニ之ヲ死刑ニ處スル所以  
ノモノハ其ノ危害ノ及フ處置ニ家屋ニ止マラス直チニ住居人ノ生命ヲ迫害シ其  
害惡ノ度之レヲ自餘ノ放火ニ比シ一層酷ナルニ由ル獨住者カ自ラ其ノ住宅ニ放  
火シタルハトテ自ラ好シテ死地ニ入ルニアラソンハ斯ル患ノ存スヘキ理ナク之  
ヲ以テ刑法第四百二條ニ擬スルハ頗ル其ノ權衡ヲ失スルニ至レハナリ則チ此場  
合ニ於テハ刑法第四百七條ヲ以テ問擬スルヲ至當ナリトス自己ノ獨住スル家屋  
ニ自ラ放火スルモ刑法第四百二條ノ範圍ニ入ラサルコト以上ノ如シトセハ更ラ  
ニ一步ヲ進メ之ヲ他人ニ教唆シ他人ヲシテ右ノ家屋ヲ燒燬セシメタルキハ如  
何本問ヲ斷スルニ先チ暫ク被教唆者ノ地位ニ立チ考フルニ被教唆者ハ自己ノ家  
屋ニアラス又タ自己ノ住居スルニアラス即チ他人ノ家屋ニ他人ノ住居シタルモ  
ノヲ燒燬シタルニ外ナラサレハ本問ノ教唆被教唆ハ之ヲ刑法第四百二條ニ問擬  
スルニ於テ些ノ疑ナキニ似タリ然レトモ此ノ議論ハ頗ル大早計ナルヲ免カレス  
案スルニ我カ刑法中身體財產ニ對スル罪ハ之レカ被害者タル者ノ承諾ノ有無ニ  
因リ犯罪ノ成立ニ至大ノ關係ヲ有スルモノナルヲ忘ル可カス然リ而シテ凡ソ承

諾ヲシテ其ノ承諾カ如何ナル場合ニ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及スヘキヤハ其ノ犯罪  
必要トス故ニ承諾カ如何ナル場合ニ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及スヘキヤハ其ノ犯罪  
行為カ被害者ノ處分權内ニ屬スヘキ事項ナルト否ヲ以テ之レカ標準トナササル  
ヲ得ス例ハ國家ノ公益若クハ人ノ生命ハ吾人之レカ處分權ヲ有セサルカ故ニ  
之ヲ目的トスル犯罪ハ法律ニ於テ特別ノ明文刑法第三百二十條ノ如シ存スルニ  
アラスシハ承諾ハ犯罪ノ構成ニ何等ノ影響ヲ及スコトナシ反是テ財產ニ至テハ  
全々吾人ノ處分權内ニ屬スルカ故ニ之ヲ目的トスル犯罪ハ被害者ノ承諾カ犯罪  
ノ成立ニ影響ヲ及スルヲ原則トス例ハ竊盜若クハ委託物費消ニ重典賣ノ如  
キ是ナリ凡ソ此等ノ犯罪ハ總シテ言ヘハ所有者ノ承諾ヲ得スシテ擅ニ之ヲ橫領  
處分スルノ罪アラサレハ故ニ若シ承諾ヲ得テ之レヲ行フニ於テハ一トシテ犯罪ヲ構  
成スルモノアラサレハ罪ナリ  
今也放火罪ヲ案スルニ本罪ハ其ノ危害ノ及フ所社會ノ公安若ハ個人ノ身體生命  
ニ關スルコト少カラズト雖モ少クモ其ノ一半ハ財產ニ對スル罪ナリ則チ放火罪  
ハ家屋若クハ其屋内ノ財器重寶ヲ燒燬スルノ罪ナリ「已」ニ論スルカ如ク財產ニ對  
スル罪ハ被害者ノ承諾カ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及スルカ故ニ放火罪ニ在テモ少クモ  
其ノ財產ニ對スル範圍ニ於テ承諾ノ成立ニ影響ヲ有無ハ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及  
ス思フニ自己ノ家屋ニ放火スルニ當リ自ラ之ヲ爲サスシテ他人ヲ教唆シ他人ヲ

刑法第四百二條ノ適用



シテ之ヲ實行セシムルハ取リモ直サス是レ他人ニ對シ自己ノ家屋ヲ燒燬スルコトヲ承諾スルモノナリ果シテ然ラハ其ノ放火行為ノ性質ハ所有者自ラ之ヲ燒燬シタルト同一ノ結果ヲ生スヘク從テ本問放火被殺被殺ノ處分ハ共ニ刑法第四百七條ノ適用ヲ受クルノ至當ナルヲ信スルナリ

何ソヤ現ニ人ノ住居シタル家屋ニ放火シナカラハ刑法第四百七條ニ擬シ他ハ之ヲ同第四百三條ニ問罪スル如キハ決シテ法律ノ適用其當ヲ得タル者ニアラスト然レトモ此ノ攻撃ハ未タ余輩ノ議論ヲ破ルニ足ラス蓋シ人ハ犯人タルト同時ニ之ガ被害者タルコト能ハス犯罪ハ素ト一ノ不法行為ナリ不法行為ハ犯人ト被害者ト其人ヲ異ニスルニ於テ始メテ成立スヘク自己ニ對スルハ是レ一ノ事實ニシテ不法行為ニアラサルナリ今以上説明ノ場合ヲ考テルニ家ノ住居人ハ人ニ嚙

(重照) 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス(刑法第四百二條)

第一審 甲府地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 杉本キチ

辯護人 花井卓藏

右放火被告事件ニ付明治三十八年六月二十九日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
上告趣意ハ原判決ハ被告ノ所爲ニ對シ刑法第四百二條ヲ適用處斷セリ然ルニ被告カ白鳥久吉ノ家

刑法第四百二條ノ適用

屋ニ放火シタルコト被告カ白鳥久吉ノ内縁ノ妻タルコトハ原判決ノ明カニ判示スル所ナレハ假リニ被告ハ原判決認定ノ如キ行爲ヲ爲シタルトスルモ被告ハ自己ノ家屋ニ放火シタルモノニ過キサレハ刑法第四百七條ニ問擬スヘキ筋合ナルニ拘ハラズ前示法條ヲ適用シテ處斷シタルハ擬律錯誤ノ不法アルモノトスト云フニ在リ辯護人花井卓藏上告趣意擴張書ハ第一點原判決ニ依レハ「被告キチハ云々白鳥久吉内縁ノ妻トシテ久吉ト同棲中明治三十八年二月十七日云々遂ニ同家ヲ燒燬セント決意シ同日午後二時頃同家東方約四尺ヲ距ル久吉所有ノ云々放火シ少シク燃上リ云々消止メラレ云々」トアリ而シテ原院ハ擬スルニ刑法第四百二條ノ律ヲ以テセリ然レトモ同條ハ火ヲ放シ他人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ヲ制裁スヘキ法條ニシテ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ヲ制裁スヘキ法條ニ非ス抑モ同條ハ現行刑法草案第四百四十五條ニ胚胎セルモノナルヲ以テ本論旨ハ究メテ當レリ然ルニ原判決爰ニ出テタルハ擬律錯誤ノ不法アルモノト信スト云ヒ」第二點凡ソ放火失火ノ犯罪ハ身體生命ニ及ボス危害ヲ防護スル公益ノ趣旨ニ出テ財產ヲ保護スル私權ノ觀念ニ出テタルモノニ非ス換言セハ公益本位ノ規定ニシテ私益本位ノ規定ニ非ス故ニ性質上人ノ住居シ得ヘキ家屋ナリト雖モ現ニ人ノ住居セサルニ於テハ刑法第四百三條ヲ擬律スヘク同法第四百二條ヲ擬律スヘキモノニ非ス果シテ然レハ放火ニ際シテ其家屋ニ人ノ住居セシヤ否ヤハ事案ノ判斷上缺クヘカラサル事實ナリト謂ハサルヘカラス然ルニ原判決ハ久吉ノ外出ヲ認メ其家ニ歸リタル事實ヲ認メス又其他ノ家族現ニ家中ニ在リシヤ否ヤノ事實ヲ認メスシテ概シテ刑法第四百二條ヲ適用シタルハ理由不備及擬律錯誤ノ不法アルモノト信ス（明治二十七年第二百五十七號同年五月二

十一日宣告能勢次郎放火未遂被告事件御院判決參照）ト云フニ在レトモ○原判決ノ認定事實ニ依レハ被告ハ内縁ノ夫タル白鳥久吉ト同棲中其家宅ヲ燒燬セント決意シ之ニ隣接セル同人所有ノ一部ハ概及馬糞置場一部ハ同人父平三郎ノ住居セル建物ニ放火シタルモノニシテ即チ該家屋建物ハ被告ノ所有ニ非サルノミナラス被告以外ニ人ノ住居スル所ナレハ刑法第四百七條ニ所謂自己ノ家屋ニ非サルハ論ヲ俟タヌ又苟モ住家トシテ他人カ平常使用シ居ル建物ハ其住居者カ一時外出シテ不在ナルトキト雖モ尙ホ之ヲ刑法第四百二條ニ所謂人ノ住居スル家屋ト云ハサルヘカラス故ニ放火又ハ燒燬ノ當時之ニ他人ノ現在シタルヤ否ヤハ同條ノ犯罪構成ニ何等ノ影響ヲ及ボスヘカラサルヲ以テ原判決カ本件犯罪ノ當時建物内ニ他人ノ現在セル事實ヲ認定セシメテ同條ヲ適用シタルトテ所論ノ如キ不法アリト謂フヲ得ス

官文書偽造行使事件

明治三十八年八月十七日宣告

（棄却）

判決要旨

一、警察官吏カ行政警察上ノ職權ニ基キ人民ニ對シテ發スル諭告書ハ官文書ノ性質ヲ帶フルモノトス而シテ該文書中偶々警察署ノ權限ニ屬セサル事項ノ記載アルモ之カ爲メニ其性質ヲ變スルコトナシ

警察官吏ノ諭告書ノ性質○實害ノ要件

一、不真正ナル官文書ヲ真正ノ官文書ナリトシテ行使シ自己ノ欲望ヲ達セント企テタル以上ハ其目的ノ利害得失如何ニ拘ハラズ文書偽造行使罪ノ成立ニ必要ナル實害ノ要件ハ之ヲ具備シタルモノトス

第一審 福島地方裁判所 第二審 宮城控訴院  
被告人 矢野 倉治郎

若官文書偽造行使被告事件ニ付明治三十八年六月二十二日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
被告ノ上告趣意書ハ續々記述スル所アルモ要スルニ本案被告カ梁川警察分署名義ヲ以テ養父春吉ニ宛テ送付シタル絶家ヲ再興シテ老母ニ適當ノ住居ヲ與フルニ非サレハ本署ニ於テ處分スヘキ旨記シタル文書ノ如キハ警察官署ノ權限ニ屬セサル事項ヲ記載シタル文書ナレハ假令實在スル警察署ノ名義ヲ冒シテ之ヲ作成行使スルモ官文書偽造行使罪ヲ以テ論スヘカラス況ヤ實際桑折警察署梁川分署ナルモノアルモ梁川警察分署ナルモノアルコトナケレハ實在セサル梁川警察分署ノ名ヲ用ヒ文書ヲ作成行使スルモ官文書偽造行使罪ヲ構成セサルヤ辯ヲ待タヌ加之被告カ該文書ヲ作成シタルハ養父春吉カ祖母クニノ希望ニ背キ絶家ノ再興ヲ爲サスクニ所有名義ノ地所ヲ管理シテ之カ收獲ヲ私シクニニ對スル奉養缺クル所アルヲ以テ其過失ヲ矯正シクニノ希望ヲ達セシメンカ爲

メニ外ナラスシテ春吉ニ於テ絶家ヲ再興スルモ其資産ハ絶家ノ遺産アリテ春吉ノ資産ヲ分ツニアラサレハ春吉ハ爲メニ一毫モ損失ヲ受クルモノニアラス故ニ孰レノ點ヨリ觀察スルモ原院カ本件被告ノ所爲ヲ以テ官文書偽造行使罪トシテ處罰シタルハ擬律錯誤ノ不法判決ナリト云フニ在レドモ○原院ノ認メタル事實ニ依レハ被告ハ梁川警察分署ノ名義ヲ以テ作成シタル本件ノ文書ニハ單ニ絶家ヲ再興シテ老母ニ適當ノ住居ヲ與フルニアラサレハ本署ニ於テ處分スヘキ旨ヲ記載シタルニ止マラスシテ其親ヲ不潔ノ場所ニ住居セシムルハ衛生上及ヒ火災取締上危害アルヲ以テ本月三十日迄ニ相當ノ處置ヲ爲サレハ於テハ本署ニ於テ處分スヘキ旨記載アリタルモノニシテ該文書ハ即チ梁川警察署カ公共ノ身體財產ニ對スル危害ヲ未然ニ豫防スルヲ目的トスル行政警察上ノ職權ニ基ツキ人民ニ對シテ發シタル一片ノ諭告書タルノ形式ヲ有スルモノナレハ該文書ハ警察官吏カ其職務上ニ於テ作成スル官文書ノ性質ヲ帶フルモノニシテ該文書中ニ偶偶警察署ノ權限ニ屬セサル絶家再興ニ關スル事項ノ記載アルカ爲メ其性質ヲ變スルコトナシ故ニ之ヲ作成行使シタル被告ノ所爲ハ明カニ官文書偽造行使罪ヲ構成スルモノニシテ上告前段ノ論旨ハ理由ナク又梁川分署ト云ヒ梁川警察分署ト云ヒ其意義結局同一ナルヲ以テ何レノ稱呼ヲ用キテ文書ヲ作成スルモ官文書ノ偽造タルヲ免レサルヲ以テ此點ニ關スル論旨モ亦タ其理由アルヲ見ス終リニ被告ハ本件官文書ノ偽造行使ハ何等實害ヲ生セサルモノ、如ク主張スルモ被告ハ不真正ナル官文書ヲ真正ナル官文書ナリトシテ之ヲ行使シ自己ノ欲望ヲ達セント企テタルモノニシテ被告ノ所爲ハ文書ノ信用ヲ毀損スヘキ有害ノ結果ヲ生スルコト明カナルヲ以テ被告カ該文書ノ行使ニ因リテ達セントスル

警察官吏ノ諭告書ノ性質○實害ノ要件

目的ノ利害得失如何ニ拘ハラズ文書偽造行使罪ノ成立ニ要スル實害ノ要件ヲ具備スルモノトス故  
ニ本論旨モ亦タ理由ナシ

●酒造税法違反事件 明治三十八年(九)第八九六號 (破毀)

明治三十八年八月十八日宣告

判決要旨

一、酒造税法第二十四條ノ犯罪ヲ構成スルニハ單ニ造石數ノ查  
定ヲ免レ又ハ免レントスルノミチ以テ足レリトセス其之ヲ  
免ル、爲メ詐欺其他不正ノ所爲アルコトヲ要ス從テ造石數  
ノ查定ヲ免ル、爲メニ行ヒタル不正ノ所爲ヲ明示セサル判  
決ハ違法ナリ

(參照) 酒類ヲ製造スル者誰儀其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ造石數ノ查定ヲ免カレ又ハ免カレトシタルトキハ其ノ石數ノ造石  
稅五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス(酒造税法第二十四條)

第一審 高知地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 工藤 傳助 辯護人 片寄 伴之助

右酒造税法違反被告事件ニ付明治三十八年六月十二日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法ト  
シ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書ハ第一點前段ハ酒造税法第二十四條ニ「酒類ヲ製造スルモノノ詐欺又ハ不正ノ所爲ヲ以  
テ造石數ノ查定ヲ免レ又ハ免レントシタルモノ」トアリ故ニ濁酒ノ造石數ノ查定ヲ免ル所爲ハ詐  
欺又ハ不正ノ所爲ヲラサルヘカラス然ルニ原判決ハ查定ヲ免レシト認メシモノニ付テハ單ニ(查  
定ヲ免レテ販賣シ)ト判示セラレ如何ナル詐欺如何ナル不正ノ所爲ヲ以テ查定ヲ免レシカヲ示サ  
ス販賣ハ當初ヨリ營業ノ目的ナリ故ニ販賣其事ハ不法ノ事ニアラス只タ查定ヲ如何ニシテ免レン  
カハ犯罪ノ係ル所ニシテ主要ナルニ不拘何等ノ説明ヲ與ヘラレサルハ理由ノ不備ナリト云フニ在  
リ○依テ按スルニ酒造税法第二十四條ニ「酒類ヲ製造スル者詐欺其他不正ノ所爲ヲ以テ造石數ノ  
查定ヲ免レ又ハ免レントシタル者」トアリテ本條ノ犯罪ヲ構成スルニハ查定ヲ免レ又ハ免レント  
スルノミチ以テ足レリトセス其之ヲ免ル、爲メ詐欺其他不正ノ所爲アルコトヲ要ス然ルニ原判決  
ニハ「内六石二斗一升ハ查定ヲ免レ販賣ヲ爲シ」トノミアリテ查定ヲ免レルカ爲メニ行ヒタル不  
正ノ所爲ヲ明示セサルヲ以テ犯罪構成ノ一要件ヲ明示セサルノ違法ヲ免レサル判決ニシテ上告論  
旨ハ其理由アリ而シテ原判決ニ認定スル所ニヨレハ濁酒六石二斗一升ニ付查定ヲ免レタル所爲ト  
濁酒一石八斗七合ニ付查定ヲ免レントシタル所爲ハ意思繼續ノ一行爲ニ出テタルモノナルヲ以テ  
既ニ濁酒六石二斗一升ニ付查定ヲ免レタル點ニ於テ前述ノ如ク理由ノ不備アリトスル以上ハ原判  
決中濁酒ニ關スル部分ハ總テ之ヲ破毀スヘキモノトス依テ右ノ部分ニ關スル上告趣意ノ後段論旨  
及ヒ辯護人擴張論旨第一點ニ對シテ説明ヲ與フルノ要ナシ

●私書偽造行使詐欺取財並附帶私訴事件

明治三十八年(レ)第八六五號  
明治三十八年七月三十一日判決

(破毀)

判決要旨

一、公判期日ハ訴訟關係人ノ出頭スヘキ時刻ヲ過キタレハトテ直チニ經過シ去リタルモノト云フ可ラス從テ日ヲ同クスルトキハ其ノ時刻經過後ニ開廷スルモ之ヲ以テ新期日ニ開廷セルモノト云フヲ得サレハ右開廷ニ當リ辯護人出廷セサルトキハ闕席ノ儘審理ヲ爲スモ違法ニアラズ

一、公判ニ於テハ既ニ供述ヲ爲シタル證人ハ公廷ニ留アルヘキモノナレハ他ノ證人ノ迅問ハ勢ヒ其ノ證人ノ面前ニ於テセサルヘカラサルコト、ナルハ法律上當然ノ事ニ屬ス隨テ刑事訴訟法第二百二十七條ハ公判ノ場合ニ適用スヘキモノニアラス

(參照) 證人ハ他ノ證人及ヒ被害者ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被

告人ト對質セシムルコトヲ得(刑事訴訟法第二百二十七條)

第一審 長野地方裁判所

第二審 名古屋控訴院

公訴私訴上告人

米澤莊十郎  
外三名

辯護人

播磨辰次郎  
高木益太郎  
原鹿造

私訴被上告人

株式會社信濃銀行

法律上代理人

小坂善之助

右私書偽造行使詐欺取財被告事件及附帶私訴事件ニ付明治三十八年六月一日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ各被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト如左

被告莊十郎辯護人高木益太郎上告辯明書四、原院ニ於テハ其第一回公判期日タル明治三十八年五月二十三日ノ期日ヲ小川辯護人ニ對テ同日午前八時ニ出頭スヘキコトヲ命シ置キテカラ(記錄一八一九送達證書參看)同日午前十一時ニ開廷シ右辯護人闕席ノ儘審判ヲ遂ケタル事跡アリ而シテ期日ハ必ス之ヲ確定スヘキコト裁判所ト辯護人トノ間何等徑庭アルノ理ナケレハ原院ハ結局其通知シタル期日ヲ徒過シ更ニ新ニ定メタル期日ニ私ニ其公判ヲ開キタルモノニシテ其新期日ニ右辯護人闕席ノ儘審理ヲ始終シタルハ被告人ノ辯護權ヲ制限シタル不法ヲ免レス原判決ハ破毀ノ原由アルモノトスト云フニ在レトモ○午前八時トハ公判期日ノ始メヲ示シタルモノニシテ其時刻ヲ過クシテハ直ニ期日ハ經過シタルモノト云フヘカラス故ニ同日午前十一時ニ開廷シタルハ新期日ニテアラス以テ同日呼出ヲ受ケタル辯護人カ出廷セザリシ爲メ辯護人闕席ノ儘審理ヲ爲シタルハ違

時刻經過ノ公判開廷○公判ノ證人訊問

法ニアラス

被告矢口憲吉米澤莊十郎宮原直太郎辯護人上原鹿造上告理由擴張書八點原院ニ於ケル證人訊問ノ  
狀況ヲ見ルニ一ノ證人一應ノ取調ヲ受ケタル者ハ之レヲ傍聽席ニ退カシメ他ノ證人ノ訊問ハ此退  
キタル證人ノ面前ニ於テ之ヲ爲シ而シテ一旦傍聽席ニ退キタル證人ハ再ヒ他ノ證人ノ面前ニ於テ  
引續キ訊問ヲ受ケタル形跡アリ此等ノ手續ハ明カニ刑訴第百二十七條ニ違背セルモノニシテ不法  
タルハ勿論ナリ若シ果シテ此違法ノ手續ニ出テサリシナラハ各證人ノ證言ハ被告ノ爲メ大ナル利  
益アリシヤモ斗リ難ク結局此點ニ於ケル違法ノ手續ハ原院公判手續全部ニ影響スヘキモノニシテ  
原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトスト云フニ在レトモ○刑事訴訟法第百二十七條ハ一ノ  
訓示的規定ニ過キササルヲ以テ之ニ違背スルモ審理手續ノ無効ヲ惹起スヘキモノニアラサルノミナ  
ラス公判ニ於テハ刑事訴訟法第百九十三條ノ規定アリテ既ニ供述シタル證人ハ公判廷ニ留マルヲ  
以テ其面前ニ於テ他ノ證人ヲ訊問スルハ法律上當然ノ事ニシテ同法第百二十七條ノ規定ハ右ノ場  
合ニ適用スヘキモノニアラス故ニ本論旨モ亦タ其ノ理由ナシ

●取引所法違犯事件

明治三十八年(レ)第一〇五五號  
明治三十八年九月二十五日判決

(棄却)

判決要旨

一、取引所外ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一若クハ類似ノ方法

ニ據リ取引ヲ實行シタル所爲アル以上ハ其ノ取引カ當事者  
ノ意思表示ニ瑕瑾アリ若クハ意思ノ合致ヲ欠キタルカ爲メ  
民法上取消シ若クハ無効ニ歸スル場合ト雖モ取引所法第二  
十五條ノ制裁ヲ免カル、コトヲ得ス

第一審 神戸地方裁判所

第二審 大阪控訴院

被告人 酒井 虎

外一名

辯護人

尾高 宗義  
野添 宗義

右取引所法違反被告事件ニ付明治三十八年七月二十六日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法  
トシ被告兩名ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左  
ノ如シ

被告兩名上告趣意書第一ハ取引所法第二十五條違反ノ所爲ハ賣買當事者ノ雙方カ取引所外ニ於テ  
取引所ノ定期取引ト同一又ハ類似ノ方法ニ依リ賣買取引ヲ爲スノ意思ヲ以テ賣買取引ヲ實行スル  
ニ依リテ成立スルモノニシテ當事者ノ一方ハ取引所ニ於テ賣買取引ヲ爲スノ意思ヲ表示シタルニ拘ハ  
ラス相手方ハ取引所外ニ於テ賣買取引ヲ爲スノ意思ヲ以テ之ヲ承諾シタルカ如キ場合ハ同條ノ犯罪ヲ  
構成スルモノニアラサルコト明文ノ解釋上絲毫モ疑ヲ容レサル所トス然ルニ原判決ハ「被告虎一  
ハ(中略)神戸市水木通三丁目ニ店舗ヲ設ケ神戸米穀株式外四品取引所ノ仲買人トナリ被告房次郎

取引所外ニ於ケル所引行爲

ハ(中署)被告虎一ノ雇人兼代理者トナリ共ニ仲買業ニ從事中明治三十八年一月五日ヨリ同年四月四日ニ至ル間(中署)酒井菊次郎外數名ヨリ定期米合計二十六萬五千五百石ノ賣買注文ヲ受ケテカヲ被告兩名共謀シ繼續ノ意思ヲ以テ前記月日間ニ同取引所ニ於テ其内僅カニ五萬八千五百石ノ賣買取引ヲ爲シタルノミニテ殘餘ノ二十萬七千石ニ付テハ取引市場ニ上シタル分ト同一ノ手續ヲ以テ各注文者ヨリ一月限乃至六月限受授ノ約ニテ每百石ニ付二十圓乃至五六十圓ノ證據金ト三圓乃至三圓四十錢ノ手数料ヲ徵シタルモ被告兩名ハ取引所ノ市場ニ及ホサズ被告虎一自ラ其取引ノ對手トナリ取引所外ナル前記被告虎一ノ店舗ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一ノ方法ナル買戻轉賣等ニヨリ損益ノ計算ヲ爲シ賣買取引ヲ爲シタルト謂ヒ被告ニ對スル注文者ハ取引所ニ於テ定期米賣買ヲ爲スノ意思ヲ以テ其注文即チ委託ヲ爲シタルニ拘ハラズ受託者タル被告カ其委託ニ係ル取引ヲ實行セシテ委託者ノ意思ニ背キ委託ノ目的外ニ涉リ而カモ委託者ノ相手方トナリ取引所外ニ於テ取引ヲ爲スノ意思ヲ以テ賣買ヲ承諾シタル事實即チ委託者ト被告トノ間ニ於ケル取引ハ取引所ニ於ケル賣買トシテモ取引所外ニ於ケル賣買トシテモ當事者雙方ノ意思ノ一致ヲ缺クニ因リ孰レモ成立セザル所爲ナルコトヲ認定シナカラ之レヲ取引所法第二十五條ニ問擬シタルハ法律ノ誤解ニアラサレハ其ノ適用ヲ誤リタル失當ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ審按スルニ明治二十六年三月法律第五號取引所法第二十五條ニハ取引所外ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一又ハ類似ノ方法ヲ以テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得ストアルニヨリ該條ノ違反ヲナスニハ賣買取引ノ行爲アルコトヲ必要トスルコト勿論ニシテ眞實賣買取引ヲ爲サズ單ニ名ヲ賣買取引ニ籍リ相場ノ昂低ヲ生

スル損益ノ計算ニ基ツキ輸贏ヲ決スルヲ目的トスル如キ場合ニハ其所爲他ノ犯罪ヲ構成スルコトアルモ取引所法第二十五條ノ違反ヲ爲スモノニ非サルコトハ本院明治卅四年(レ)第一八九四號ノ判例ニ徴シ明ナル所ナリ然レトモ眞實賣買取引ヲ爲スノ意思ヲ以テ取引所ノ定期取引ト同一若クハ類似ノ方法ニ據リ取引ヲ實行シタル所爲アルトキハ其賣買取引カ意思表示ノ瑕瑾若クハ意思ノ合致ヲ缺ク爲メ民法上取消シ得ヘキ行爲トナリ若クハ全然效力ヲ生セザル場合ト雖モ當事者間ニ取引ヲ實行シタル以上ハ事實上取引ヲ實行シタル所爲アルニヨリ之ヲ以テ取引ノ所爲ナシト云フヲ得サルハ勿論ナリトス上告論旨ハ賣買取引ノ民法上ノ成立ト取引所法第二十五條ニ所謂取引實行ノ所爲トヲ混同シタル議論ナリ若シ賣買取引カ意思ノ合致ヲ缺ク爲メ民法上ノ成立ナル場合ニハ取引ノ所爲ナシトセハ取引所法第二十五條ニ違反シ取引カ不法ナル爲メ不成立トナル場合ニ於テハ該條ノ規定ハ遂ニ之ヲ適用スルヲ得サルニ至ラントス故ニ該條ノ違反ハ取引所外ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一若クハ類似ノ方法ニヨリ賣買取引ヲ實行シタル所爲アルトキハ成立スルモノニシテ前示本院判例ニ於テ取引行爲アルヲ要スト説明シタルモ亦々事實上取引實行ノ所爲アルヲ必要トスル趣旨ニ外ナラスシテ其賣買取引カ民法上有效ナルコトヲ以テ違反罪成立ノ要件トシタルニアラサルヤ言フ俟タス而シテ本件原院ノ認メタル事實ハ酒井菊次郎外數名ヨリ數回ニ神戶米穀株式外四品取引所ニ於ケル定期米合計二十六萬五千五百石ノ賣買注文ヲ受ケテナカラ被告兩名ハ共謀シ其内二十萬七千石ニ付テハ一月乃至六月限ヲ受授ノ約束ニテ百石ニ付二十圓乃至六十圓ノ證據金ト三圓乃至三圓四十錢ノ手数料ヲ受取リタルモ之ヲ取引所ノ市場ニ上ホサズ被告虎一自ラ其

取引所外ニ於ケル取引行爲

取引ノ對手トナリ取引所外ナル被告ノ店舗ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一ノ方法ナル轉賣買戻等  
ニヨリ損益ノ計算ヲナシ賣買取引ヲ爲シタリト云フニ在リテ被告等カ他人ヨリ取引所ニ於ケル賣  
建買建ノ注文ヲ受ケテナカラ取引所ニ於テ其取引ヲ爲サス取引所外ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一  
ノ方法ニヨリ注文者トノ間ニ賣買取引ヲ實行シタル所爲アルコトヲ明ニシアレハ假令ヒ注文者タ  
ル酒井菊次郎外數名ハ實際取引所ニ於ケル取引ナリト信シ被告虎一カ賣買ノ對手者ナルコトヲ知  
ラスシテ取引ヲ爲シタルニモセヨ被告等ノ實行シタル所爲ハ前記法條ニ所謂取引所外ノ取引行爲  
タルコト勿論ナルニヨリ本件カ取引所法第二十五條ノ違反トナルヤ毫モ疑ナシ故ニ原院判決ハ相  
當ニシテ論旨ハ理由ナシ

三六

● 贓物故買事件

明治三十八年(レ)第九七六號 (棄却)  
明治三十八年九月十五日判決

判決要旨

一、誤テ占有シタル物(例ヘハ十個ノ引渡ヲ受ケヘキ者カ誤テ十一個ノ引渡ヲ  
ノ混入シタル)ヲ隱匿シ返還セサルトキハ犯人ハ遺失物隱匿罪  
ヲ以テ處罰セラレ其物件ハ贓物トシテ被害者ニ返還スヘキ  
モノトス然レトモ犯人カ其物件ニ工作ヲ加ヘ而シテ其ノ工

六六

作カ民法第二百四十六條第一項但書及第二項ノ條件ヲ充シ  
タルトキハ其ノ物件ハ犯人ノ所有ニ歸ス

一、前項ノ物件ニ對シ犯人カ工作ヲ加フルモ前記條件ヲ充タサ  
、ルトキハ其ノ物件ハ尙ホ贓物タルヲ不免情ヲ知テ之ヲ買  
得シタル者ハ贓物故買罪ヲ構成ス

一、誤テ占有シタル洋服地ヲ以テ之ヲ徒步外套ニ仕立ツルモ其  
ノ工作ハ未タ以テ前記ノ條件ヲ充シタルモノト云フヲ得ス  
從テ情ヲ知り之ヲ買得シタル者ハ贓物故買罪ヲ構成ス

(參照) 他人ノ動産ニ工作ヲ加ヘタル者アルトキハ其加工物ノ所有權ハ材料ノ所有者ニ屬ス但工作ニ因リテ生シタル價格カ  
著シク材料ノ價格ニ超ユルトキハ加工者其物ノ所有權ヲ取得ス加工者カ材料ノ一部ヲ供シタルトキハ其價格ニ工作ニ因リ  
テ生シタル價格ヲ加ヘタルモノカ他人ノ材料ノ價格ニ超ユルトキニ限リ加工者其物ノ所有權ヲ取得ス(民法第二百四十六  
條)

洋取取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一日以上一年以下  
ノ重懲罰ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス(刑法第四百一條)

第一審 仙臺地方裁判所 第二審 宮城控訴院

贓物ニ對スル加工

三七



被告人 嶺岸 總治

辯護人 小笠原 勇藏

右贓物故買被告事件ニ付明治三十八年六月三十日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

辯護人小笠原勇藏ノ擴張書第二點前段ハ原院判決ハ擬律錯誤ノ失當アルモノトス抑モ原院判決ノ認定事實(第一ノ點)ニヨレハ被告德治ハ被告光之助カ第二師團經理部並ニ同師團各隊ヨリ錯誤ニヨリ引キ渡シテ受ケタル徒步外套九枚ヲ其情ヲ知リテ買取リタルモノト云フニ在リ而シテ被告光之助ニ對スル犯罪事實(第三第四)ハ被告光之助ハ第二師團經理部及各隊ヨリ兩回ニ徒步外套服地九枚分ヲ過剰ノ引渡シテ受ケ占有中擅ニ自宅ニ於テ徒步外套ニ仕立テ之ヲ被告德治ニ賣渡シタリト云フニ在リテ被告德治カ光之助ヨリ買取ケタル右徒步外套九枚ハ刑法ノ所謂贓物タル性質ヲ有セサルモノト云ハサル可ラス何トナレハ光之助カ第二師團經理部及ヒ各隊ヨリ計算ノ錯誤ニヨリ過剰ノ引渡シテ受ケタル服地ハ之ニ光之助ノ手工下及ヒ裏地トテ附着セラレ新ニ徒步外套ニ變形シタルト同時ニ已ニ贓物タルノ性質ヲ失ヒタルモノト云フ可ケレハナリ從テ之ヲ買取ケタル所爲ハ假令其情ヲ知レリトスルモ直ニ以テ贓物故買罪ヲ成立スルニ至ラサルモノトス然ルニ原院判決ハ被告カ右所爲アリトシテ刑法第四百一條ヲ適用處斷セラレタルハ蓋シ擬律ノ錯誤ヲ免レサルモノト云フ可シト云フニ在レトモ

○原審相被告光之助カ第二師團經理部及ヒ同師團各隊ヨリ引渡テ受ケ占有シタル徒步外套九枚分ノ服地ハ遺失物法第十條ノ所謂誤テ占有シタル物ニシテ同被告カ之ヲ徒步外套ニ仕立テ被告德治ニ賣渡シタル行爲ハ同法第十六條ノ罪ヲ構成スルモノナレハ

其服地ハ即チ刑法第四百一條ノ「其他ノ犯罪ニ關スル物件」トアルニ該當スルコト勿論ナリ然ルニ被告光之助ハ右服地ヲ以テ徒步外套ニ仕立タルモノニシテ民法第二百四十六條ノ所謂他人ノ動産ニ工作ヲ加ヘタルモノナレハ若シ同條ノ規定ニ依リ其加工物ハ光之助カ加工ニ因テ所有權ヲ取得シタルモノナリトスレハ其ノ外套ハ犯罪ニ關スル物件タルヲ失ハスト雖トモ之レヲ處分スルハ光之助ノ權利ニシテ之レヲ買得シタル被告德治ヲ以テ刑法第四百一條ノ贓物故買者トスルヲ得ス然レトモ民法第二百四十六條ハ加工物ノ所有權ハ材料ノ所有者ニ屬スルヲ以テ原則トシ同條第一項但書及第二項ノ場合ニアラサレハ加工者其加工物ノ所有權ヲ取得スルコトヲ得サルモノトス而シテ原院判決認定ノ事實ニ依レハ光之助ハ服地ヲ徒步外套ニ仕立テタリト云フマテニシテ其外套ノ價格カ著ク服地價格ヲ超過シタル事實及ヒ同條第二項ニ相當スル事實アルコトナケレハ加工物タル徒步外套ハ材料ノ所有者タル第二師團經理部及同師團各隊ニ屬シ被告光之助ハ自由ニ之ヲ處分スルノ權利ヲ有セサルヲ以テ其情ヲ知リテ之ヲ買得シタル被告德治ノ行爲ハ刑法第四百一條ノ犯罪ヲ構成スルモノト謂ハサルヲ得ス故ニ原院判決ハ相當ニシテ上告ハ其理由ナシ

●酒精及酒精含有飲料稅法違犯事件

明治三十八年(レ)第一〇三三號 (棄却)  
明治三十八年九月二十二日判決

判決要旨

一、被告カ軍隊ニ召集中ノ故ヲ以テ普通裁判管轄ニアラストナシ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其ノ判決確定スルモ後チ解隊セラレ

軍隊ノ召集解除ト裁判管轄トノ關係

テ普通人タル身分ニ復歸シタルトキハ爾後其ノ被告ニ對スル裁判管轄ハ普通裁判所ヲ以テスヘキモノトス

第一審 高知地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 岡田多助 辯護人 山浦權馬

右酒精及ヒ酒精含有飲料稅法違反事件ニ付キ明治三十八年七月一月大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書第二點ハ原判決ハ理由ヲ付セス且ツ確定判決ヲ無視セル違法アリ本件ニ付上告人ハ普通裁判所ノ管轄ニアラストシテ言渡サレタル判決ノ確定セシ事ハ爭ナキ事項ナリトス故ニ上告人ハ本件ニ付普通裁判所ヨリ離脱シタル事明ナリ故ニ若シ再ヒ上告人ヲ普通裁判所ニ繫屬セシメシトセハ少クモ新ナル事由ニ基ク乎若クハ右確定判決ヲ廢棄若クハ變更セサルヘカラサルニ之ヲ不問ニ付シ去リ如何ナル時期ニ於ケル如何ナル起訴事實ニ基クヤノ理由ヲ付セスシテ直ニ管轄ヲ認容セラレタルハ違法ナリト云フニ在レトモ○原判決ニハ「云々既ニ召集解除ト爲リタル以上ハ單ニ豫備ノ軍籍ニ在ルニ止リ陸軍治罪法第一條第七條ニ依リ軍法會議ノ審判ヲ受クヘキ身分ニ非サレハ本件ハ高知地方裁判所ノ管轄ニ非スト謂フヲ得ス抑モ身分ニ依リテ裁判管轄ノ定マル場合ニ於ケル管轄違ノ判決效力ハ身分其物ニ伴フモノニシテ先ニ言渡サレタル管轄違ノ判決ハ判決當時

ニ於ケル被告ノ身分ニ依リ普通裁判所ノ管轄ニ非サルコトヲ宣告シタルニ止リ事件ヲ軍法會議ニ繫屬セシメタルモノニ非サレハ其身分ノ消滅シタルニ及ヒ特ニ其管轄違ナル軍法會議ニ起訴シテ其判決ヲ受クルノ要ナク直ニ普通裁判所ニ起訴スヘキモノニシテ云々」トアリテ右ハ則チ本件カ普通裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノナルコトノ理由ヲ説示シタルモノナルコト其文詞ニ徴シテ之ヲ見ルニ足レハ所論ノ如ク原判決ニ理由ヲ缺如セルモノト云フヲ得ス且又本件ノ如ク被告カ召集中ノ身分タリシ故ヲ以テ普通裁判所ノ管轄ニ屬スルモノニアラストシ管轄違ノ判決ヲ言渡サレタル場合ニ在リテハ一方ニ於テハ其判決ハ確定スルモ他ノ一方ニ於テハ被告ハ召集解除ト爲リ其身分ニ變更ヲ生シタルモノナレハ陸軍治罪法第七條ニ「歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ召集中ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス」トアルニ從ヒ普通人トシテ取扱フヘキハ當然ニシテ爾來被告ノ裁判籍ハ普通裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノトス左スレハ原院カ本件ヲ高知地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト爲シタルハ相當ニシテ所論ノ如ク確定判決ヲ無視シタル不法アリト云フヲ得ス要スルニ本項論旨モ亦總テ其理由ナシ

●肥料取締法違反事件 明治三十八年(レ)第八七號 (棄却)

判決要旨

一、肥料取締法第七條ニ所謂肥料ヲ偽造若クハ他ノ物料ヲ混和

肥料ノ偽造

スルトハ一定ノ原料竝ニ製造方法ヲ以テ製造シ且一定ノ名稱ヲ有スル肥料中ニ他ノ物料ヲ混和シ又ハ他ノ物料若クハ製造方法ヲ以テ之ヲ偽造スルノ謂ニシテ其混和シタル物料又ハ偽造肥料ノ原料ト爲リタル物料カ農産物ノ肥養ト爲ルト否トハ問フ所ニ非ス

(參照) 肥料ヲ偽造若ハ他ノ物料ヲ混和シテ販賣シ又ハ情ヲ知テ之ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ四十以上三百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ肥料ハ沒收ス(肥料取締法第七條)

一、肥料取締法施行規則第七條ハ同規則第一條第三項ノ手續ヲ履行セサル者ニ對スル制裁ニ外ナラスシテ實體上一定ノ肥料ヲ偽造シ又ハ之ニ他物ヲ混和シ以テ人ヲ欺キタル場合ニ適用スヘキ規定ニ非ス

(參照) 肥料ノ製造販賣ノ免許ヲ受ケントスル者ハ左ノ事項ヲ記載シタル願書ヲ地方長官(東京府ハ警視總監以下之ニ差出スヘシ)製造場及販賣所ノ位置ニ、肥料ノ名稱ニ、原料ノ種類ニ、肥料ノ製造方法ニ、肥料ノ販賣ノ免許ヲ受ケントスル者ハ販賣所ノ位置及肥料ノ名稱ヲ記載シタル願書ヲ地方長官ニ差出スヘシ前二項ニ掲ケタル事項ヲ變更セントスルトキハ其認可ヲ受ケヘシ(肥料取締法施行規則第一條)

第一條第三項、第二條、第三條、第五條若クハ第六條ニ違背シタル者又ハ帳簿ノ検査ヲ拒ミタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス(肥料取締法施行規則第十條第一項)

第一審 水戸地方裁判所 第二審 東京控訴院  
被告人 田所熊治郎 辯護人 中村可雄

右肥料取締法違反被告事件ニ付明治三十八年六月十九日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ辯護人中村可雄ノ上告趣意擴張書ハ肥料取締法ニ於テ肥料ト稱セルモノハ農産物ノ肥養ニ供スル物料ト云フ事ハ同法第一條ニ明ニ規定スル所トス而テ同法第七條ニ肥料ヲ偽造若クハ他ノ物料ヲ混和シタル所謂偽造トハ全ク農産物肥養ニ供スル事能ハサル物料ヲ肥料ノ如クニ裝フタル場合ヲ云ヒ他ノ物料ヲ混和スルトハ亦全ク農産物ノ肥養ニ供スル事能ハサル物料ヲ混和スル場合ヲ指シタルコトハ同法第一條ト照應シテ誠ニ明了ナル解釋ト信ス而テ本件被告事件ニ於テ被告カ使用スル糞糞モ亦農産物ニ對シテ營養分ヲ有シ肥料ノ一種ト稱シ得ル事ハ鑑定ニヨツテ明了ナリトス然ラハ即チ本件被告事件ノ事實トシテハ被告ハ所謂肥料ニアラサル他ノ物料ヲ混和シテ之ヲ眞誠ノ肥料ノ如ク裝フテ販賣シタルモノニ非スシテ油脂ナル肥料製造ノ免許ヲ受ケナカラ油脂ト權實粕トノ混和物ヨリ成ル肥料ヲ製造シタルモノニシテ所謂免許ヲ受ケシテ肥料原料ノ變更ヲナシタルモノト云フ可ク依テ被告ノ所爲ハ明治卅四年五月農商務省令第五號肥料取締法施行規則第一條第三項ニ違背シタルモノト云ハサル可ラス原判決ハ肥料取締法第七條ニ所謂肥料トハ概括的

ノ意味ニアラスシテ或原料ニヨル一定ノ肥料ヲ指示スルモノナルカ故ニ假ヒ肥料ノ性質ヲ有スル  
 物料ト雖モ免許ヲ受ケタル一定ノ原料以外ノ物料ヲ混和シ之ヲ一定ノ原料ヲノミ用ヒテ製造シタ  
 ル肥料トシテ販賣スルトキハ同法第七條ニ違背スル行爲ナリト説明スレトモ同條ニ所謂肥料トハ  
 一定ノ原料ニノミヨル肥料ナリトハ何ヲ根據トシテ之ヲ解釋スヘキヤ寧ロ同法第一條ニ肥料ノ説  
 明ヲ與ヘ而シテ同第七條ニ他ノ物料ト云フカ故ニ茲ニ所謂肥料トハ農産物ニ對シテ肥料ヲ與フ可  
 キ物料ヲ云ヒ他ノ物料トハ其以外ヲ云フモノト解釋スルヲ正當ト信ス依テ原判決ハ擬律ニ錯誤ア  
 ル不法ノ判決ト思量スト云フニ在リ○因テ按スルニ肥料取締法第一條ニ所謂肥料トハ汎ク農産物  
 ノ肥養ニ供スル物件ヲ總稱シタルコトハ所論ノ如シ然レトモ肥料ノ種類ハ固ヨリ數多アリテ其原  
 料若クハ製造方法ノ異ナルニ從テ各一定ノ名稱ヲ有スルヤ勿論ナリトス故ニ肥料ヲ製造販賣シ又  
 ハ之ヲ販賣セント欲スル者ニシテ同法第二條ニ從ヒ地方長官ノ免許ヲ受ケルニ當リテハ其肥料ノ  
 名稱原料ノ種類製造方法等ヲ定メテ出願スルヲ要スルコト同法施行規則第一條ノ規定スル所ナレ  
 ハ同法第七條ニ所謂肥料ヲ偽造若ハ他ノ物料ヲ混和スルトハ即一定ノ原料並ニ製造方法ヲ以テ製  
 造シタル一定ノ名稱ヲ有スル肥料中ニ他ノ物料ヲ混和シ又ハ他ノ物料若ハ製造方法ヲ以テ之ヲ偽  
 造スルノ謂ニシテ其混和シタル物料又ハ偽造肥料ノ原料トナリタル物料カ農産物ノ肥養トナルト  
 否トヲ問フヘキモノニ非サルヤ同法ノ解釋上疑ヲ容レサルノミナラス若シ同法第七條ヲ所論ノ如  
 ク解釋セハ肥養ノ成分極メテ乏シキ物料ヲ以テ肥養分饒多ナル肥料中ニ混和シ若ハ之ヲ偽造スル  
 モ苟モ其物料ニシテ幾分ノ肥養分ヲ有スルトキハ法律ノ制裁ヲ免カル、ニ至リ取締法ノ精神ニ背

馳スルヲ以テ其解釋ノ不當ナルヲ明ナリトス又論旨ハ本件被告ノ所爲ヲ以テ免許ヲ受ケスシテ肥  
 料原料ノ變更ヲ爲シタルモノニシテ肥料取締法施行規則第一條第三項ニ違背シタルモノナリト主  
 張スルモ同條項ノ規定ハ單ニ肥料ノ名稱原料等當初出願許可ヲ受ケタル事項ヲ變更スルノ手續ヲ  
 定メタルニ過キス從テ同規則第十條ハ即チ右手續ヲ履行セサル者ニ對スル制裁ニ外ナラスシテ實  
 體上一定ノ肥料ヲ偽造シ又ハ之ニ他物ヲ混和シ以テ純粹ナル肥料ナリトシテ人ヲ欺キタル場合ニ  
 適用スヘキ規定ニアラス而シテ原判決ニ依レハ被告ノ上告趣意書ニ對シ説明シタルカ如ク被告ハ  
 菜種油粕製造販賣ノ免許ヲ受ケタルモノニシテ菜種ニ種ノ實ヲ混和シテ肥料ヲ製シ之ヲ以テ純良  
 ナル菜種油粕ナリトシテ販賣シタル事實ナレハ原院カ肥料取締法第七條ニ問擬シタルハ相當ニシ  
 テ本論旨ハ其理由ナキモノトス

官印官文書偽造行使詐欺取財事件

明治三十八年(刑)第八七〇號  
明治三十八年八月一日宣告 (破毀)

判決要旨

一 裁判所カ辯護人ヨリ印影ノ鑑定及ヒ證人喚問ノ申請ヲ受ケ  
 一 タル場合ニ於テ證人喚問ノ申請ノミニ付キ決定ヲ與ヘタル  
 ハ違法ナリ

第一審 岡山地方裁判所  
 第二審 大阪控訴院

被告人 黒瀬 實太

辯護人 高木益太郎

右官印文書偽造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十八年六月九日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人高木益太郎辯明書一ハ原院公判始末書ヲ閱スルニ記録次九三丁裏ニ「西尾辯護人ノ押收ノ十五號證十六號證トノ印影對照同一ナルヤ否ヤノ鑑定ヲ求メ其理由ヲ述ヘタリ」板野辯護人ハ右同一ノ鑑定ヲ求メ——其理由ヲ述ヘタリト掲記シアリテ則チ被告實太辯護人ヨリ印影鑑定ノ申請アリタルモノナルニ裁判所ハ之ニ對シ何等其許否ノ裁判ヲ與ヘス其儘審理ヲ終結シタル違法アリ此違法ノ審理ニ基ツク原判決ハ破毀ノ原由アルモノナリト云フニ在リ○因テ原院公判始末書ヲ查スルニ「西尾辯護人ハ押收ノ十五號十六號證ノ印影對照同一ナルヤ否ヤノ鑑定竝難波芳治ヲ證人トシテ喚問ヲ求メテ其理由ヲ述ヘタリ板野辯護人ハ右同一ノ鑑定ヲ求メ宮田務服部照次郎片山多作富田菊吉片岡徳次郎鳥越嘉作ヲ證人トシテ喚問ヲ求メテ其理由ヲ述ヘタリ遠藤辯護人ハ市川久八ヲ證人トシテ喚問ヲ求メタリ」トアリテ被告辯護人ヨリ印影ノ鑑定及ヒ證人喚問ノ申請ヲ爲シタルコトハ明カナリ然ルニ右辯護人ノ爲シタル證據調ノ申請ニ付テハ原院公判始末書中「裁判長ハ富田建吉鳥越嘉三郎市川久八ヲ證人トシテ囑託訊問スルモト其他ノ證人ハ必要ヲ認メサルニ付請求却下スト言渡ヲ爲シタリ」トノ記載アルノミニシテ其他ニ何等ノ記載アルコトナシ而シテ右記載ノ趣旨ハ富田建吉外ニ一名ノ囑託訊問ハ之ヲ許容シ其他ノ證人喚問ノ申請ハ之ヲ却下ストノ

意ニ外ナラザルコト明白ニシテ右ノ言渡中ニ印影鑑定ノ申請ニ對スル決定ヲモ包含シタルモノト解スルニ由ナク又其他ノ證人トアルハ其他ノ證據調ノ誤記ナリト認ムル能ハサルノミナラス富田建吉外ニ名ヲ除キ其他ノ證人ニ付テ特ニ請求ヲ却下スル旨言渡シタル事跡ニ徴スルモ印影鑑定ノ申請ニ對シ許否ノ決定ヲ爲サ、リシコトハ明瞭ニシテ原院ハ辯護人カ爲シタル印影鑑定ノ申請ニ對シ何等ノ決定ヲ與ヘス審理ヲ終了シタル違法アルヲ以テ原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトス已ニ此點ニ於テ原判決ノ全部ヲ破毀スル上ハ他ノ論旨ニ對シテハ逐一説明ヲ爲スノ要ナシ

官印偽造行使事件 明治三十八年(レ)第一〇二號 明治三十八年九月十八日宣告 (棄却)

判決要旨

一、請負工事ニ用ユル石材カ検査ニ合格シタルヲ表示センカ爲メ之ニ押用スル府縣廳ノ印章ハ刑法第百九十六條第一項ノ所謂商品ニ押用スル官ノ印章ニ該當ス

(參照) 産物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス(刑法第百九十六條第一項)

第一審 京都地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 高橋直右衛門

右官印偽造行使被告事件ニ付明治三十八年七月十日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ

商品ニ押用スル官ノ印章

被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
 上告趣意書第一點ハ原院ニ於テ被告ハ工用石材ハ監督官吏ニ於テ検査合格ノ證トシテ京都府廳所  
 用ノ丸ニ京字ヲ刻シタルゴム印章ヲ押捺シタルモノタルヲ要スルヲ以テ其検査不合格ノ石材ヲモ  
 使用セシメントノ目的ヲ以テ丸ニ京字ヲ刻シタル木製印章ヲ彫刻セシメ検査不合格ノ石材ニ押用  
 シタルモノト認定シ之ヲ刑法第九十六條第一項ニ該當スルモノト判決セラレタリ然ルニ原院カ  
 認定セラレタル事實ナリトスレハ刑法第九十六條第一項ニ該當スルモノニ非サル也該條項ノ記  
 號印章ハ產物商品ニ限リ押用スルモノナリ而テ該條ハ信用ヲ害スル罪ノ章中ニ在テ社會一般ニ及  
 フ所ノ信用ヲ害スル罪ナリ畢竟產物商品ノ正確ヲ保有セシムルカ爲メ押捺スルモノニシテ之ヲ偽  
 造押用スル時ハ不正確ノ物廣ク社會ニ行ハレ信用ヲ害スルヲ以テ之ヲ禁スルモノナリ其實物ヲ舉  
 タレハ度量衡輸出織物蠶種等產物商品トシテ廣ク社會ニ行ハル、所ノモノナリ本件ニ於テハ元來  
 請負契約ニシテ請負人カ自己ノ材料ヲ以テ築積シ出來ノ上引渡ヲ爲スモノニシテ出來ノ上ハ充分  
 検査ヲ遂ケ善良ナレハ受取り然ラサレハ斥ケテ更ニ改築セシムルカ又ハ保證金ヲ沒收シテ他人ニ  
 爲サシムルモノナリ固ヨリ又損害ナキモノナリ其請負人ノ手中ニアル材料中ニ於テ注文ニ對テ使  
 用スヘキモノヲ定メ其印トシテ用ユルハ雙方間一時約束ノ印シ也又石材ハ固ヨリ產物商品タルモ  
 ノニ非ラスシテ現ニ今石垣ニ築積セントスル材料ナリ如此物體名稱及全體ノ性質情狀押捺ノ趣旨  
 等全ク異ルモノニシテ社會全般ニ涉ルモノニ非ルナリ然ルニ之ヲ刑法第九十六條第一項ニ該當  
 スルモノトセラレタルハ擬律ノ錯誤ニシテ違法ノ判決ナリト云フニアレトモ○原判決ノ認ムル所

ニ依レハ被告カ偽造行使シタル印章ハ工事請負人カ其請負ヲ爲シタル工事ニ用ユヘキ石材ノ検査  
 ニ合格シタルモノナルコトヲ表示スル爲メ押用スル京都府廳ノ印章ニシテ右材ノ商品タルコト  
 勿論ナレハ之レニ押用スヘキ印章ヲ偽造行使シタル被告ノ所爲カ刑法第九十六條第一項ニ該當  
 スルヤ論ヲ俟タルヲ以テ本論旨ハ上告ノ理由ナシ

判決要旨

●森林法違犯事件

明治三十八年(レ)第一〇三四號 (棄却)  
 明治三十八年九月二十六日宣告

一、犯人カ其ノ盜伐シタル材木ヲ原料トシ茸木ヲ製造シタル以  
 上ハ之ニ椎茸ノ發生スルト否トヲ論セス森林法第三十八條  
 第二號ニ該當スルモノトス

(參照) 森林竊盜ニシテ左ニ記載シタル所爲アルトキハ二圓以上贓額二倍以下ノ罰金及二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス但  
 シ罰金ハ贓額以下ニ下スコトヲ得ス「贓物ヲ原料トシテ木炭、樟腦、椎茸、松根油其ノ他ノ物品ヲ製シタルトキ(森林法第三十  
 八條第一項第二號)

第一審 宮崎地方裁判所 第二審 長崎控訴院  
 被告人 甲 變 總 次 郎 外一名

右森林法違犯被告事件ニ付明治三十八年七月二十一日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法ト

森林法第三十八條二號ノ適用

シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ  
 被告兩名ノ上告趣意書第一點ハ原院ハ被告等カ吹山園有林内ニ於ケル拂下木伐採中拂下以外ノ立  
 木ヲ盜伐シ之ヲ原料トシテ茸木ヲ製造シタル事實ヲ認メ其所爲ハ森林法第三十八條第二號ニ該當  
 スルモノト爲シ而シテ同號ノ何レニ該當スルヤヲ示サ、レトモ同法文ニハ「赃物ヲ原料トシテ木  
炭、樟腦、椎茸、松根油其他ノ物品ヲ製シタルトキ」トアリテ判文ノ意カ「赃物ヲ原料トシテ其  
他ノ物品ヲ製シタルトキ」ト云フニ該當スルモノトナシタルコト疑ナシ然レトモ所謂其他ノ物品  
 トハ赃物ヲ原料トシテ作製セラレタル凡テノ物品ヲ指稱スルニアラスシテ其作製セラレタル物品  
 カ化學的變化ヲ來シタルモノナルコトヲ要スルハ其前文ニ例示セル物品カ何レモ化學的變化ヲ來  
 セル物品ナルヲ視テ明ナリ今被告等カ製造シタル茸木ト云フハ伐木ノ枝葉ヲ剪除シ其枝幹ノ大ナ  
 ル部分ヲ長サ五六尺宛ニ切斷シタルニ過キサレハ右條文ニ所謂物品ニ該當スルモノニアラス若シ  
 之ニ反シ本案茸木ノ如キモ同法文ニ包含スルモノトセハ盜伐木ヲ以テ薪ニ製シ又ハ丸太ニ切斷シ  
 タルトキノ如キモ猶同條ニ該當スト云ハサルヘカラス果シテ然ラハ苟モ盜伐ヲ爲ス以上ハ或ル目  
 的ニ使用センカ爲メニシテ盜伐シタル儘之ヲ放置スル如キハ殆ント絶無ナリ既ニ一ノ目的ニ使用  
 センカ必ス特種ノ名稱ヲ付シ得ヘキ物品ニ製作セサルヘカラサルヲ以テ何レノ場合ト雖モ同法文  
 ノ支配ヲ受ケサルハ莫ク斯クナレハ通常盜伐ヲ規定セル森林法第三十七條ハ終ニ之ヲ適用スル場  
 合ナキニ至ラン假ニ前段ノ所論ハ其當ヲ得ストスルモ該文ニハ特ニ「椎茸」ヲ製シタル場合ヲ明揭  
 セルヲ以テ視レハ本案茸木ヲ製シタル場合ハ同法文ノ間フ所ニアラサルコト明ナリ何トナレハ椎

茸ハ作製サレタル茸木ヨリ産出スルモノナルニ依リ茸木ヲ製シタル所爲ヲ處罰スルモノトセハ其  
 椎茸ヲ製シタル場合ヲ重ネテ處罰スルノ規定ヲ設クルノ理由ナケレハナリ是故ニ原院カ被告等ノ  
 所爲ニ對シ森林法第三十八條第二號ヲ適用シタルハ失當ノ判決ナリトスト云フニ在レトモ○茸木  
ハ椎茸製造ノ用ニ供スルモノナルヲ以テ盜伐ノ目的タル材木ヲ原料トシ犯人カ茸木ヲ製造シタル  
事實アルニ於テ之レニ椎茸ノ發生ヌルト否トヲ問ハス森林法第三十八條第二號ニ適合スルモノト  
ス故ニ原院カ其判決ニ被告カ拂下以外ノ立木ヲ盜伐シ之ヲ原料トシテ茸木ヲ製造シタル事實ヲ認  
メ之ヲ以テ森林法第三十八條第二號ヲ適用處斷シタルハ相當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

●詐欺取財及附帶私訴事件 明治三十八年(レ)第一〇六〇號 明治三十八年九月二十六日判決 (破毀)

判決要旨

一、刑事裁判所ノ判決カ公訴ノ一部ヲ遺脱シタルトキハ之ニ對  
 シ補充判決ヲ許スノ規定ナシ從テ檢事若クハ被告カ其遺脱  
 セラレタル部分ニ對シ裁判ヲ求メント欲セハ上訴ノ申立ヲ  
 爲サ、ル可ラス  
 一、控訴ノ審理ハ第一審ニ對スル覆審ナルカ故ニ未タ第一審ノ

補充判決

審理ヲ經サル事項ニ對シテハ控訴ヲ提起シ得サルヲ原則ト  
ス然レトモ第一審裁判所カ判決ヲ遺脱シタル事項ハ未タ初  
審ヲ經サルモノナリト雖モ第一審カ不當ニ公訴ヲ受理シタ  
ル場合ノ控訴ニ準シ控訴裁判所ハ此ノ點ニ對スル上訴ヲ受  
理判決スルノ義務アリ

說明

補充判決 凡ソ訴訟事件ニ對シ一ヒ判決ヲ下スルハ之ニ由テ事件ハ裁判ヲ離脱  
セラレ事件ト裁判所ト關係全ク斷絶ス故ニ裁判所ハ各判決事件ニ付キ例  
令誤認若ハ判決ノ遺脱ヲ認ムルモ之ヲ探テ再ヒ審判スルニ由テ又當事者ニ於  
テモ同一事件ニ付キ同一裁判所ニ再度ノ訴訟手續ニ關スル近世ノ立法者ハ以上  
爲スノ外裁判ヲ求ムル途ナシ然レトモ訴訟手續ニ關スル近世ノ立法者ハ以上  
ノ法則ヲ絕對ニ適用スルコトヲ避ケ特ニ法文ヲ設ケテ許セリ故ニ補充判決ハ  
ハ其ノ裁判所ニ於テ再ヒ補充ノ判決ヲ設ケテ許セリ故ニ補充判決ハ  
知ルノ觀念ヨリ推論スルキハ一例外ニシテ其原則ノ適用ニアラサルヲ  
知ルノ觀念ヨリ推論スルキハ一例外ニシテ其原則ノ適用ニアラサルヲ

二條以下ニ於テ特ニ補充判決ヲ許スルノ規定ヲ設ケタリト雖モ刑事訴訟法ニ於テ  
ハ之ニ關スル以テ何等法文ノ設ケナキ我カ刑事訴訟法ノ本ニ在テハ判決ノ補充ハ  
可ラサルヲ以テ何等法文ノ設ケナキ我カ刑事訴訟法ノ本ニ在テハ判決ノ補充ハ  
之ヲ許サハルモノト論定セサルヲ得ス是レ本件判旨第一項ノ存スル所以ナリ  
遺脱事項ニ對スル控訴ノ提起 控訴ノ性質ハ第一審ニ對スル殺害制度ナルカ故  
ニ苟クモ之レカ審判ヲ求メシキハ其ノ事件カ第一審ノ判決ヲ受ケタルモノ  
ナルコトヲ必要トス第一審カ判決ヲ遺脱シタル事項ハ未タ第一審ノ判決ヲ經サル  
事件ニシテ以上ノ法則ニ照ストキハ之レニ對シ上訴ヲ許サハルモノト論決セサ  
ル可ラサルニ反シ大審院カ之ヲ積極ニ決スル所以ノモノハ若シ之ニ對シ上訴ヲ  
提起スルコトヲ得ストセンカ當事者ハ第一審裁判所カ判決ヲ遺脱シタルカ爲メ  
之ニ對シテ遂ニ裁判ヲ求ムルコト能ハサルニ至ルト今一ツハ控訴裁判所カ受理シ  
タル事件ノ中ニ於テ原裁判所カ管轄遠ヲ不當ニ認メタルモノナルトキハ其ノ本  
案ニ付テハ未タ第一審ノ判決ヲ經サルモノナルカ故ニ之ヲ第一審ニ差戻シ第一  
審裁判所ヲシテ之レカ審理ニ當ラシメテ結果ヲ生スル不當公訴不受理ノ場合ニハ  
百六十二條第二項ト雖モ同一ノ結果ヲ生スル不當公訴不受理ノ場合ニハ  
何等規定ナキヲ以テ控訴裁判所ハ未タ第一審ノ判決ヲ經サル事項ナルニ拘自  
ラ之ヲ裁判セサル可ラサルニ至ルヘシ今本件ニ於ケル判決ノ遺脱ハ不當公訴不

補充判決

三三



受理ノ場合ト其ノ關係殆ント同一ノ地位ニ在ルカ故ニ已ニ不當公訴不受理ノ事  
件ニ對シ控訴裁判所自ラ之ヲ審判スルコトヲ許ス以上ハ之ト同一ノ地位ニアル  
判決遺脱ノ事項ニ對シテモ亦タ控訴審ノ判決ヲ受クヘキモノトナスヲ以テ法律  
ノ精神ヲ得タルモノト認定シタルニ依ル」是レ本件判旨第二項ノ存スル所以ナ  
リ

第一審 岡山地方裁判所 第二審 廣島控訴院

公訴私訴上告人 進藤 梅松  
私訴被上告人 杉江 正敏  
辯護人 高木益太郎

右詐欺取財被告事件及附帶私訴ニ付明治三十八年七月二十四日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル公私  
訴ノ判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決  
スルコト左ノ如シ

辯護人高木益太郎上告趣意辯明書一ハ記録ヲ閱スルニ其第九四丁九五丁豫審請求書ニハ被告ノ犯  
罪事實トシテ第一被告カ岩田村長ヨリ秣納入命令書ヲ騙取シタルコト第二被告カ留守第五師團經  
理部ヨリ運賃ヲ騙取シタルコトノ二箇ノ犯行ヲ掲記シ又其第二〇四丁二〇五丁豫審終結決定書ニ  
ハ前同一事項ノ記載アリテ本件被告ニ對シテハ獨立シタル二箇ノ詐欺取財罪ニ對スル起訴アリ共  
ニ公判ニ付セラレタルコト明白ナルニ第一審第二審共被告カ運賃騙取ノ點ニ付テノミ裁判ヲ與ヘ  
別ニ被告カ納入命令書ヲ騙取シタルトノ點ニ付テハ何等ノ判斷ヲ下サハルハ請求セラレタル事項

ヲ裁判セサル違法アルモノナリト云フニ在リ○依テ記録ヲ調査スルニ豫審請求書及ヒ豫審終結決  
定ニ依レハ本件公訴ノ事實ハ二箇ニシテ其第一ハ被告カ第五師團經理部發行ノ糧秣納入命令書ヲ  
騙取セント企テ明治三十七年十一月二十九日山陽鐵道岡山驛ニ於テ自村村長尾俊憲ニ對シ豫テ  
庭瀬驛丸五運送店ヨリ受取リシ秣(既ニ納入済ノ分)ノ受取證數通ヲ示シ秣ノ現存スルモノ、如ク  
欺キ村長ヲシテ納入命令書交付ノ請求書竝ニ理由書ヲ作成シ之ヲ吉備郡役所ニ提出セシメ郡役所  
ヨリ役場ニ廻送セラレタル秣三千貫ノ納入命令書ヲ十二月一日役場ニ於テ騙取シタルノ事實其第  
二ハ同前經理部ヨリ秣ノ運搬費ヲ騙取セント企テ廣島市ニ於テ宮本權ヨリ同年十月中秣三百八十  
四貫六百目十一月末四千四百五十貫ヲ買入レタル後十二月五日前記三千貫ノ命令書及ヒ巽キニ受  
ケタル五百貫千五百貫ノ命令書ヲ以テ右買入レタル秣ヲ經理部秣壓搾所ニ納入シ恰モ居村ヨリ運  
搬シタルモノ、如ク裝ヒ運賃二百八圓二十八錢九厘ヲ騙取シタルトノ事實ニシテ第二事實ニ於ケ  
ル運賃ノ騙取ハ第一事實ニ於ケル秣納入命令書騙取ノ結果ニアラサルコト明瞭ナリ然ルニ第一審  
裁判所ハ第二事實ノミヲ認定シ被告ノ所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成スルモノトシ刑法第三百九十四條第  
三百九十四條ヲ適用シ被告ヲ重禁錮罰金ノ刑ニ處シタルトモ公訴第一ノ事實ハ犯罪ノ證據十分ナ  
ラストモシヤ將タ罪トナラストモシヤ將タ第二事實ノ一部ヲ爲スモノト爲シタルヤ是等ノ點ニ付  
テハ裁判理由中ニ何等ノ説明ナク且此事實ニ對スル判決主文モ存セサルヲ以テ第一審裁判所ハ公  
訴第一事實ニ對スル判決ヲ遺脱セルモノト云ハサルヘカラス而シテ刑事訴訟法ニハ民事訴訟法ニ  
於ケルカ如ク補充判決ヲ求ムル手續存セサルヲ以テ當事者ハ裁判脫漏ノ點ニ對シ補充判決ヲ求ム

補充判決

ルヲ得サルモノナレハ公訴事實ノ一部ノミニ依リテ有罪ノ判決ヲ受ケタル場合ニ於テ其公訴ノ權  
利拘束ヲ免レントスルニハ控訴ノ申立ヲ爲スノ外他ニ方法ナク又裁判所モ職權ヲ以テ補充判決ヲ  
爲ス能ハサルヲ以テ一ノ公訴ニ對シ終局判決ヲ與ヘタルトキハ縱令其公訴ニ包含スル事實ノ一箇  
又ハ數箇ニ付キ裁判ヲ遺脱スルモ公訴全部ノ繫屬ヲ離レタルモノト云ハサルヘカラス從テ右ノ如  
キ場合ニ於テハ第二審裁判所ハ第一審判決ニ對スル控訴ニ依リテ全部ノ公訴ヲ受理スルモノトス  
而シテ右ノ場合ニ於テ第二審裁判所ハ第一審ノ判決ヲ經サル事件ヲ直チニ審判スルニ至ルモノナ  
レトモ右ノ如キ覆審ノ原則ニ對スル例外ハ刑事訴訟法第二百六十二條第二項ノ如キ差戻ノ規定ナ  
キヲ以テ觀レハ第一審裁判所カ不當ニ公訴不受理ノ判決ヲ爲シタル場合ト同シク同法ニ於テ之ヲ  
認メタルモノト云ハサルヘカラス故ニ本件ニ於テ原院ハ公訴第一ノ事實ニ付キ第一審ノ判決ヲ經  
サルニ拘ハラス審判ヲ爲スヘキモノナルニ之ヲ爲サハリシハ訴ヲ受ケタル事件ニ付判決ヲ爲サハ  
ル不法アリテ破毀ヲ免レサルモノトス  
原院ノ私訴判決ハ公訴判決ノ證據理由ヲ採用セルヲ以テ公訴判決ヲ破毀スル以上ハ私訴判決モ亦  
破毀ヲ免レス

三六

●私印盜用私書約束手形偽造行使詐欺取財事件 明治三十八年(レ)第九一九號 (棄却)

判決要旨

一、銀行會社ノ取締役カ自己ノ權限内ニ於テ自己ノ名義ヲ以テ

三九

文書ヲ作成スルニ當リ不實ノ記載ヲ爲スモ文書偽造罪ヲ構  
成スルモノニアラス

一、銀行會社ノ取締役カ記載スルノ權限ナキ事項ヲ其ノ設備ノ  
帳簿ニ記載シ又ハ作成スルノ權限ナキ文書ヲ作成シ自己ノ  
權限内ニ於テ記載若クハ作成シタルモノ、如ク裝ヒ以テ之  
ヲ行使セル所爲ハ文書偽造罪ヲ構成ス

一、銀行取締役カ銀行ノ業務執行ノ爲メニ出テスシテ擅ニ自己  
又ハ他人ノ爲メ取締役ノ名義ヲ濫用シ手形ヲ振出又ハ裏書  
ヲ爲シ若クハ借用證書ヲ作成シ之ヲ行使シタル所爲ハ文書  
偽造行使罪ヲ構成ス

一、竊取ニ係ル手形ニ裏書ヲ偽造シテ之ヲ行使シタル所爲ハ手  
形ノ裏書偽造罪ヲ以テ論スヘキモノトス

第一審 前橋地方裁判所 第二審 東京控訴院

銀行取締役ノ名義濫用○竊取ニ係ル手形ノ裏書偽造

三四七

被告人 白石錦之助  
辯護人 指田義雄  
宮古啓三  
菅原亥三  
之助

右私印盗用私書約束手形偽造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十八年六月二十二日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

辯護人宮古啓三郎菅原亥之助上告趣旨擴張辯明書第三點ハ原判決ハ擬律ニ錯誤アルモノナリ(一)原判決ハ被告カ尾島銀行ノ日記帳ニ虚偽ノ記入ヲ爲シタル事實(第一ノ事實並ニ第二ノ事實)ヲ認メテ之ヲ日記帳定期預金記入帳ノ偽造變造ト爲シ刑法第二百十條第一項第二百十二條ヲ適用處斷シタリ是レ擬律ニ錯誤アルモノニシテ此ノ如キハ私文書偽造變造罪ヲ構成スヘキモノニアラス抑モ我刑法ニ於テハ文書偽造罪ヲ構成スルニハ文書作成者ノ名義ヲ冒用スルコトヲ以テ一ノ要素トス故ニ文書ノ作成カ自ラ作成シタル文書ハ如何ニ虚偽ノ事實ヲ記載スルモ如何ニ不正ノ記載ヲ爲スモ文書偽造罪ヲ構成スルコトナク又タ文書作成者自身ニアラサルモ苟モ其ノ文書ヲ作成スヘキ權限アル者カ作成シタル文書モ又タ如何ニ虚偽ノ記載ヲ爲スモ如何ニ不正ノ記載ヲ爲スモ文書偽造罪ヲ構成セサルヲ原則トシ唯刑法第二百五條ノ特別ノ規定ヲ以ツテ官吏其管掌ニ係ル(權限ニ屬スル)文書ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキヲ唯一ノ例外トシテ文書偽造罪ニ問擬スルノミ然リ而シテ株式會社ノ取締役ハ會社ノ營業ニ關スル一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有スルモノナレハ會社事務ノ範圍ニ屬スル帳簿ノ記入ノ如キハ假令虚偽ノ記入ヲ爲スモ如何ニ不正ノ

判例彙報第六卷刑例

判例彙報第六卷刑例

記載ヲ爲スモ是レカ爲メ民事上其他ノ責任ヲ生スルハ格別文書作成者ノ名義ヲ冒用シタルモノニ非サルヲ以テ刑法上ノ偽造罪ヲ構成スルモノニアラス此論ノ正當ナルコトハ商法第二百六十一條第八號第九號ノ趣意ニ依リテモ之ヲ證スルコトヲ得ヘシ其規定ニ依レハ取締彼カ株券、債券、定款、株主名簿、社債原簿、總會ノ決議錄、財産目錄、貸借對照表、營業報告書等ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトギハ五圓以上五百圓以下ノ過料ニ處セラル、モノトセリ蓋シ立法者ハ之等ノ行爲ハ素ト刑法上ノ制法ヲ受クヘキモノニアラサルヲ以テ特ニ此規定ヲ設ケテ是等ノ行爲ヲ豫防セントシタルニ外ナラス若シ或論者ノ如ク取締役カ帳簿ニ虚偽ノ記載ヲ爲シテ之ヲ行使スルニ於テハ何等ノ資格ナキ者カ其資格ヲ冒シテ偽造シタルト同一ニシテ偽造罪ヲ構成スルモノナリトセハ右商法ノ規定ハ既ニ刑法ニ於テ嚴重ナル體刑ノ制被ヲ加ヘテ豫防シタル行爲ニ對シテ更ニ輕微ナル過料ノ制裁ヲ加ヘテ豫防セントスルノ趣意ニ歸シ殆ント無意味ノ規定ト爲ルノミナラス他一般ノ過料ハ刑罰ト重複セサルニ拘ラス獨リ前掲ノ過料ノミカ刑罰ト重複スルニ至ル等ノ點ヨリ之ヲ見レハ取締役カ帳簿ニ不正ノ記載ヲ爲スカ如キハ何等資格ナキ者カ其資格ヲ冒シテ偽造スルトハ異リテ刑法ノ偽造罪ノ範圍ニ入ラサルモノタルヲ推知シ得ヘシ故ニ原判決ハ擬律ヲ誤レリ(二)假ニ原判決ノ認メタル帳簿ニ虚偽ノ記載ヲ爲シテ銀行ニ備置キタル行爲カ偽造罪ヲ構成スルモノトスルモ日記帳ノ如キハ會社内部ノ記録ニシテ賣買、貸借、贈與、交換等ノ如キニ以上ノ人格間ノ權利義務ニ關スル證書ニアラサルニ拘ハラス之ヲ刑法第二百十條第一項ニ該當スル犯罪ト爲シタル原判決ハ擬律ヲ誤リタル違法アルモノナリ(三)第二事實中定期預金記入帳中千百圓ノ算用數字千位

銀行取締役ノ名義濫用○竊取ニ係ル手形ノ裏書偽造

ノ(一)ノ文字ヲ削除シタル點ハ第一審判決ノ如ク刑法第四百二十四條ヲ適用スルカ至當ナルヘキニ原判決カ之ヲ適用セスシテ刑法第二百十條第一項ヲ適用シタルハ違法ナリト云フニ在リ○因テ按スルニ文書ヲ作成スルノ權利アル者カ自己ノ名義ヲ以テ文書ヲ作成スルニ當リ不實ノ記載ヲ爲スモ文書偽造罪ヲ構成セサルコトハ所論ノ如シト雖モ本件被告ハ銀行取締役ノ資格ヲ以テ記載スルノ權限ヲ有セサル事項ヲ銀行ノ帳簿ニ記載シ又ハ作成スルノ權限ヲ有セサル文書ヲ作成シ恰モ自己ノ權限内ニ於テ記載若クハ作成シタルモノ、如ク裝ヒ以テ之ヲ行使シタル事實ニシテ即チ作成者ノ名義ヲ冒用シタルモノナレハ文書偽造罪ヲ構成スルモノト云ハサル可カラズ論旨ハ自己ノ管掌ニ係ル官文書ノ形式ヲ以テ不正ノ文書ヲ作成シタル官吏ヲ罰スルハ刑法第二百五條ノ特別規定アルカ爲ニシテ之ニ類スル規定ナキ私文書ニ於テハ其管掌者カ不正ノ文書ヲ作成スルモノ之ヲ罰スルヲ得スト主張スルモ刑法第二百五條ハ官吏カ其管掌スル文書ヲ偽造スルハ管掌者ニ非サル者カ官文書ヲ偽造スルヨリモ其害多ク加重ノ刑ヲ科スルノ必要アルヲ以テ特ニ其規定ヲ設タルモノニシテ假ニ同條ノ規定ナシトスルモ官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シタルハ之ヲ罰スルヲ得サルニアラズ唯之ニ加重ノ刑ヲ科スルヲ得サルヘキノミ故ニ私文書ニ關シ同條ニ類スル規定ナキカ爲メニ文書ノ作成者カ其權限内ニアラサル文書ヲ不正ニ作成シタル場合之ヲ不問ニ付スヘキ理由トナラス又商法第二百六十一條ノ規定ハ特別ノ目的ノ爲メ設ケタル制裁ニシテ固ヨリ刑罰ノ性質ヲ有スルモノニアラサルヲ以テ假令其規定ニ違反シテ之カ適用ヲ受クルコトアルモ爲メニ刑法ノ適用ヲ妨クヘキモノニアラズ故ニ本論旨(一)ハ其理由ナク其(二)ニ付テハ辯護人指田義雄聲明

書第七點ニ對スル說明ニ依リ其理由ナキコトヲ了解スヘシ又其(二)ニ付テハ帳簿中千百圓ヲ表示シタル算用數字ノ千位ノ(一)ヲ削除シタルハ即チ千百圓ノ記載ヲ百圓ト變更シタルモノナレハ其文書毀棄罪ニアラサルヤ勿論ナルヲ以テ原判決ハ相當ナリ

第四點ハ原判決ハ被告尾島商會ノ爲メニスル目的ヲ以ツテ尾島銀行專務取締役タルノ資格ヲ冒用シ其名義ヲ以テ約束手形ノ裏書ヲ爲シ是レニ銀行ノ行印ヲ押捺シタルノ事實(第三ノ事實)及ヒ尾島商會ノ債務ヲ借用金證書ニ更ムル爲メニ尾島銀行ノ取締役タル資格ヲ濫用シ尾島銀行ノ債務者ト連記シタル證書ヲ作成シ之レニ銀行ノ行印ヲ押捺シタル事實(第四ノ事實)ヲ認定シ前者ヲ刑法第二百九條第二項及ヒ第二百八條第二項第一項ニ該當スル犯罪トシテ處斷シ後者ヲ刑法第二百十條第一項及ヒ第二百八條第二項第一項ニ該當スル犯罪トシテ處斷シタリ然レトモ之レ刑法ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリト信ス刑法ノ文書偽造罪ヲ構成スルニハ證書作成者ノ名義ヲ冒用スルコトヲ要素トスルコトハ既ニ上告第二點ニ於テ詳論スル所ノ如シ而シテ被告ハ銀行取引ヲ營業トスル尾島銀行ノ取締役ニシテ同銀行ヲ代表シテ約束手形ヲ發行シ又ハ裏書ヲ爲シ資金ノ必要アルニ際シテハ其借入ヲ爲スカ如キハ固ヨリ其權限内ニ屬スル事項ニシテ從テ之カ爲メニ要スル行印使用ノ如キモ被告ノ權限内ノ事項ニ屬スヘキモノナレハ假リニ之等ノ權限ヲ濫用シタルハトテ偽造罪ノ要素タル名義冒用ノ行爲アリト云フヲ得サルヲ以テ偽造罪ヲ構成セサルモノナリ或ハ曰ク銀行取引ヲ營業トスル株式会社ノ取締役カ會社ヲ代表シテ約束手形ヲ發行シ又ハ其裏書ヲ爲シ之ニ必要ナル會社ノ印章ヲ押捺シ得ヘキコトハ勿論ナリト雖モ取締役ノ名義ヲ濫用シテ約束手形

銀行取締役ノ名義濫用○竊取ニ係ル手形ノ裏書偽造

ノ發行及其裏書ヲ爲シ之ニ會社ノ印章ヲ押捺スルカ如キハ假令取締役カ爲シタルトキト雖モ會社ヲ代表シテ爲シタルモノト云フヘカラス即チ會社ノ業務執行上約束手形ヲ振出し又ハ其裏書ヲ爲スハ取締役ノ權限ニ屬スト雖モ取締役ノ名義ヲ濫用シ手形ノ振出及ヒ其裏書ヲ爲スカ如キハ取締役ノ權限ニ屬スルモノニハアラスシテ取締役ノ職ニアル者カ自身一個ノ資格ヲ以テ爲シタル行爲ニ外ナラサレハ其行爲ハ何等資格ナキ者カ取締役ノ資格權限ヲ冒シテ爲シタルト同一ニシテ其手形及ヒ裏書偽造罪ノ構成要件ヲ具備スルヤ論ヲ待タスト蓋シ原院モ之ト同シキ見解ヲ以テ判決セラレタルモノナルヘシ然レトモ此議論ハ非常ナル誤謬ニ陥リタルモノナリト信ス右ノ議論ニ依レハ取締役ノ名義ヲ濫用シタル約束手形ノ發行又ハ裏書ハ假令取締役カ爲シタルトキト雖モ會社ヲ代表シテ爲シタルモノト云フヘカラスト云フナリ然レトモ代理人カ本人ノ爲メニスルコトヲ示シテ爲シタル法律行爲ハ直接ニ本人ニ對シテ效力ヲ生スルモノナリ取締役ハ會社ノ法定代理人ナリ其代理人カ會社ノ爲メニスルコトヲ表示シテ爲シタル手形ノ發行又ハ裏書ハ直接ニ會社ニ對シテ效力ヲ生スルコトハ民法上及ヒ商法上一點ノ疑ヒナキ所ナルニ何故ニ會社ヲ代表シテ爲シタルモノト謂フコトヲ得サルヤ實ニ了解ニ苦シム所ナリ又右論者ハ會社ノ業務執行上約束手形ノ振出し又ハ其裏書ヲ爲スハ取締役ノ權限ニ屬スト云ヘリ其業務執行上トハ如何ナル意味ナルヤ不明ナリト雖モ惟フニ會社ノ業務執行トシテ爲スノ意思ヲ以テスルノ意味ナルヘシ果シテ然ラハ右ノ論者ハ代理人カ本人ノ爲メニスル意思ヲ以テ法律行爲ヲ爲スト自己ノ爲メニスル意思ヲ以テ法律行爲ヲ爲ストニ依リテ代理行爲ト否トヲ區別セントスルモノニシテ明ニ誤謬ナリ民法ニ於テハ代理行爲

爲ト否トノ區別ハ偏ニ本人ノ爲ニスルコトヲ示スト示サ、ルトニアリ詳言スレハ代理人カ本人ノ爲メニスルコトヲ示シテ爲シタル法律行爲ハ假令内心自己ノ爲メニスルノ意思ヲ以テスルモ代理行爲トナリ又本人ノ爲メニスルコトヲ示サシテ爲シタル法律行爲ハ假令内心本人ノ爲メニスル意思ヲ以テスルモ代理行爲トハ爲ラサルナリ(民法第九十九條第九十三條參照)然ラハ則チ右ノ論者カ謂フ所ノ取締役ノ名義ヲ濫用シテ手形ノ發行又ハ裏書ヲ爲スカ如キハ取締役ノ職ニアル者カ自身一己ノ資格ヲ以テ爲シタル行爲ニ外ナラストノ議論モ亦全然誤謬ナルコト再ヒ説明ヲ待タスシテ明ナリ又右ノ論者ハ取締役ノ名義ヲ濫用シテ手形ノ振出し又ハ裏書ヲ爲スカ如キハ取締役ノ權限ニアラスト論スレトモ之レ權限ノ何タルヲ誤解スルモノナリ抑モ取締役ノ權限トハ其會社ヲ代表シ得ル事項其物ノ範圍ヲ云フモノニシテ客觀的ニ定マルモノナリ取締役カ之ヲ爲スカ正ナルヤ將タ不正ナルヤ等ノ主觀的事情ニ依テ定マルモノニアラサルナリ別言スレハ取締役ノ權限ハ會社ノ業務ノ範圍ニ屬スル事項ナルヤ否ヤニ依テ定マルモノニシテ取締役カ之ヲ善用スルト惡用スルトニ依リテ消長スルモノニアラサルナリ(商法第七十條第六十二條第三十條第三項參照)故ヲ以テ第三者ハ其會社ノ登記シタル目的ニ就テ調査スルトキハ直ニ取締役ノ權限内ノ行爲ナルヤ否ヤヲ鑑別シ得ヘキモノナルカ故ニ安全ニ取締役ト取引ヲ爲スコトヲ得ルナリ若シ論者ノ言ノ如ク取締役ノ會社ニ對スル不正ニ依テ權限内ナルヤ否ヤヲ決スヘキモノトセハ第三者ハ到底取締役ノ權限内ノ行爲ナルヤ否ヤヲ鑑別スルコト能ハサル場合多ク遂ニ安心シテ取締役ト取引ヲ爲スコト能ハサルニ至ラシ是レ豈ニ商法ノ精神ナランヤ商法第四百三十五條ニ於テ手形ニ署名シタル

銀行取締役ノ名義濫用○竊取ニ係ル手形ノ裏書偽造

者ハ其手形ノ文言ニ從テ責任ヲ負フヘキモノトセルモ畢竟手形取引者ヲシテ其手形ヲ見テ安シク  
 ナ取引セシムルノ趣旨ニ外ナラスシテ論者ノ誤レルコトヲ知ルヘキナリ此ク論シ來レハ令假被告  
 カ其取締役タルノ名義ヲ濫用シタルニモセヨ其裏書又ハ借用證書ノ交付ハ民法及商法上尾島銀行  
 ヲ代表シテ爲シタル法律行為ニシテ尾島銀行モ亦手形若クハ證書ニ對シテ責任ヲ辭スルコトヲ得  
 サルモノナルコト明ナリ然シテ右ノ如キハ偽造ノ觀念トハ徹頭徹尾相容レサル觀念ニシテ原判決  
 ノ違法ナルコトヲ證明スルモノナリ民法及商法上會社ニ對シテ效力ヲ生スル文書ノ作成モ刑法上  
 取締役ノ偽造罪ヲ構成スルニ妨ケナシトハ何人モ主張セサルヘキナリ猶一言センニ原判決ノ如ク  
 取締役カ其名義ヲ濫用シテ手形ノ振出若クハ裏書ヲ爲シタル行為ハ偽造罪ヲ構成スルモノトセハ  
 其偽造ニ係ル物件ハ必ス沒收セサルヘカラサルハ言ヲ俟タサル所ニシテ原判決モ亦之ヲ沒收シタ  
 リ是レ法理上正當ノ結果ナルヤ既ニ前述ノ如ク此ノ如キ手形ハ民法及商法上會社ニ對シテ直接ニ  
 效力ヲ生スルモノナレハ其手形ノ所持人及後者ハ會社ニ對シテ手形上ノ權利ヲ有スルモノナルニ  
 取締役ニ對スル刑罰ハ手形ノ所持人及後者ノ手形上ノ權利ヲ失ハシムル不條理ナル結果ヲ生ス  
 ルナリ他一般ノ文書偽造ノ場合ニハ其ノ文書ノ所持人ハ何等ノ權利ヲ取得スルコトナキヲ以テ其  
 文書カ沒收セラルヘモ法律上何等ノ痛痒ヲ感スルコトナキモ本件ノ如キ場合ニアリテハ手形ノ所  
 持人及後者ハ何等權利防禦ノ途ヲ與ヘラレス(刑事訴訟法上規定ナキヲ以テ手形所持人及後者ハ  
 權利防禦ノ爲メニ訴訟ニ參加スルカ如キ途ナシ)シテ他人ニ對スル刑罰ノ爲メニ自己ノ權利ヲ失  
 却セサルヘカラサルニ至ル而シテ此ノ如キ不條理ハ原判決ノ論旨ノ結果ナルヲ思ヘハ此點ヨリ見

ルモ決シテ法律上正當ノ適用ニアラサルヲ知ルヘシト云フニ在リ○然レトモ文書ノ作成者カ其資  
 格ヲ以テ作成スルノ權限ヲ有セサル文書ヲ作成シテ之ヲ行使スルトキハ文書偽造罪ヲ構成スルコ  
 トハ前項説明スル所ノ如シ而シテ銀行ノ取締役カ手形ヲ發行シ其裏書ヲ爲シ或ハ資金ノ必要アル  
 ニ際シ其借入ヲ爲スカ如キ又右等ノ行為ノ爲メ銀行印ヲ使用スルカ如キハ通常其代理權内ニ屬ス  
 ル行為ナルヘシト雖モ取締役ノ名義ヲ以テ爲シタル此等ノ行為ハ悉ク其權限内ノ行為ナリト斷定  
 スルヲ得ス取締役ノ權限ハ銀行ノ業務執行上ニ於テノミ正當ニ存スルコトヲ得ヘキモノナレハ其  
 業務執行ニ關係ナキ行為ニ付テハ假令同種類ノ行為ト雖モ取締役ニ何等權限ノ存スヘキモノニア  
 ラス故ニ取締役カ銀行ノ業務執行上ニ出テスシテ擅ニ自己又ハ他人ノ爲メ取締役ノ名義ヲ冒用シ  
 テ手形ノ振出又ハ裏書ヲ爲シ若クハ借用證書ヲ作成シ擅ニ銀行印ヲ押捺シテ之ヲ行使スルトキハ  
 其所爲犯罪ヲ構成スルモノト云ハサルヘカラス本件原院ノ認ムル所ニ依レハ被告ハ銀行取締役勤  
 務中銀行ノ業務執行上ニアラスシテ自己ノ利益ヲ圖リ擅ニ銀行取締役ノ名義ヲ冒用シテ本案ノ借  
 用證書並ニ約束手形ノ裏書ヲ偽造シ之ニ銀行印ヲ捺捺シ以テ之ヲ行使シタル事實ナレハ原院ノ法  
 律適用ハ相當ナリ而シテ論旨ハ民法、商法ノ規定ヲ援キ論議スル所アルモ右援用スル所ノ法律規  
 定ハ通常ノ場合ニ適用スヘキモノニシテ本件ノ如ク代理人ノ行為カ犯罪ヲ構成スヘキ場合ニ於テ  
 尙之ヲ適用スヘキ趣旨ナリト解スルヲ得ス故ニ本論旨亦理由ナシ

第六點ハ原判決ノ認メタル第三ノ事實ニ於テハ尾島商會支配人増田賢二振出尾島銀行專務取締役  
 白石錦之助宛ノ二通ノ約束手形ノ裏書換言スレハ尾島銀行專務取締役白石錦之助ヨリ今井治郎三

銀行取締役ノ名義濫用○竊取ニ係ル手形ノ裏書偽造

三五六

郎へノ裏書ノミヲ偽造ト認メタルモノニシテ右尾島商會支配人増田賢二カ尾島銀行專務取締役白石錦之助ニ宛テ、振出シタル事實ハ之ヲ不正トハ認メサルモノナリサスレハ此二通ノ約束手形カ共ニ尾島銀行ノ所有ニ歸シタルコトハ原判決モ之ヲ認ムル所ト云ハサルヘカラス已ニ此二通ノ約束手形カ尾島銀行ノ所有ナル以上ハ被告カ之ヲ今井治郎三郎ニ交付シタル事實ヲ以テ真正ノ裏書讓渡ニ非ストセハ勢ヒ被告ニ於テ此手形ヲ尾島銀行ヨリ竊取シタルモノト云ハサルヘカラス結果トナル果シテ然ラハ其竊取シタル約束手形ニ裏書ヲ爲シテ之ヲ今井治郎三郎ニ交付スルモ是レ竊取シタル手形ヘ文字ヲ記入シタルニ止マリ記入ハ竊取ノ當然ノ結果ニシテ決シテ別ニ一罪ヲ構成スヘモノニ非ス然ルニ原院カ二通ノ約束手形ハ尾島銀行ノ所有ナルコトヲ認メナカラ（若シ之ヲ認メサルモノトセハ此點ハ必然決定スヘキ問題ニシテ之ヲ決定セサレハ其以後ノ事實ニ對シテ法律ノ適用ヲ爲スニ支障ヲ生スルニヨリ理由不備ノ裁判ナリ）竊取其他被告ノ占有ニ歸シタル事實ヲ認メシテ直ニ裏書偽造ヲ以テ論シ之レニ對スル刑ノ適用ヲ爲シタルハ違法ナリト云フニ在レトモ○尾島銀行專務取締役タル被告ニ宛振出タル約束手形カ必スシモ直チニ同銀行ノ所有ニ屬スルモノト云フヘカラス而シテ原判決ハ本件約束手形カ同銀行ノ所有ニ屬スルコトヲ認メタルコトナク又被告カ之ヲ竊取シタル事實ヲ認メサルノミナラス假令竊取シタル手形ト雖モ之ニ裏書ヲ偽造シテ行使スルトキハ約束手形ノ裏書偽造罪ヲ免カレサルヲ以テ本論旨ハ理由ナシ

●詐欺取財事件

明治三十八年（レ）第八六四號  
明治三十八年十月三日判決（破毀）

判決要旨

一、刑法第三條ニ依リ新法ノ效力ナ既往ニ溯ラシメンニハ新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ於テ其ノ刑ヲ輕クシタル時ノミナラス其他酌量減輕再犯加重等罪責ニ影響ヲ及スヘキ一切ノ法律規定ニ付テモ亦々溯及ノ效ヲ認ムルコトヲ得

一、銀行取締役カ自ラ銀行員ヲ雇傭スルノ意ナク偽テ銀行員ヲ募集スル旨ノ廣告ヲ新聞紙上ニ登載シ此ノ廣告ニ依リ銀行員ヲラントコトヲ志望シ來ル者ヨリ身元保證金ノ名義ヲ以テ一定ノ金員ヲ差出サシメ之ヲ騙取シタル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス

一、數人共謀シテ詐欺取財罪ヲ犯スニ當リ共謀者中ノ或者ニ於テ實行ノ所爲ヲ擔任シ他ノ者ハ之レニ干與セサリシトスルモ其ノ實行ノ所爲ハ共謀者全員ノ爲メニ共同ノ犯罪ヲ實行

刑法ノ溯及○銀行員募集ニ關スル身元保證金ノ騙取○詐欺取財ノ實行者○審判ニ係ル被告事 三五七  
件ノ分離併合○證言ノ意義○刑罰第百九十三條

シタルニ外ナラザレハ實行ニ干與セザルノ故ヲ以テ其ノ罪責ヲ免カル、コトヲ得ス

一 刑事裁判ハ必要ト認ムルトキハ被告事件ノ審判ヲ分離シ又ハ併合スルコトヲ得分離併合ノ手續ハ別ニ法律ノ規定ナキヲ以テ單ニ判事カ公廷ニ於テ其ノ意思ヲ發表スルヲ以テ足リ形式ヲ以テ之ヲ宣告スルノ要ナシ

一 參考人ノ供述ヲ以テ證人ノ供述トシテ罪證ニ供スルハ法律ノ禁スル所ナリト雖モ之ヲ證言ノ一トシテ罪證ニ供スルハ違法ニアラス

一 刑事訴訟法第百九十三條ノ規定ハ一ノ訓示的規定ニ過キサレハ之レニ違背シタレハトテ其ノ證言ノ效力無効ナルモノニアラス

說 明 (判文指示)

判旨(一)刑法第三條第二項三若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サルモノハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷スルアリ此ノ規定ニヨルトキハ刑事裁判所ハ新法發布前ノ犯罪ニ對シテ擬律ヲ爲スニ當リテハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キトキハ其ノ效ヲ既往ニ溯ラシメ其ノ發布以前ノ犯罪ニ適用セザル可ラス是レ罪ノ有無刑罰ノ輕重ヲ定ムル法律規定ニ付キテ然ルノミナラス酌量減輕再犯加重其ノ他被告ノ罪責ニ影響ヲ爲スヘキ一切ノ法律規定ニ付キテモ亦タ然ラザルヲ得ス故ニ舊法ノ下ニ再犯加重ノ例ニ依ルヘキ犯罪ニ付キテ新法カ再犯加重ノ例ニ依ラザル旨ヲ規定シタルトキハ其ノ犯罪ハ如何ナル場合ニ於テモ犯罪ノ前科ニ對スル再犯タルコトヲ得ザルト同時ニ再犯罪ニ於ケル前科タルコトヲ得ス而シテ此ノ後ノ場合ニ於テハ其ノ犯罪カ舊法ノ下ニ於テ確定判決ヲ經タル場合ニ於テモ尙ホ然リトス何トナレハ或犯罪カ再犯罪ノ前科タルト他ノ前科ニ對スル再犯罪タルハ其犯罪ノ性質如何ニ依リ定マルモノニシテ確定判決ハ舊モ其ノ性質ニ影響ヲ及スモノニアラザルト以テナリ而シテ木件ニ在テ被告ハ明治十五年中出版條例違犯ノ所爲ニ依リ確定判決ヲ經タルコトハ原院ノ事實トシテ確定シタル所ニシテ該犯罪ニ付キテハ其當時再犯加重ノ例ニ依リタルコトハ明カナルモ現行法タル出版法ハ出版條例違犯ノ所爲ニ對シテ再犯加重ノ例ヲ用キサルコトヲ規定セルヲ以テ被告カ明治十五年中ニ確定判決ヲ經タル前記ノ犯罪カ現行法ノ下ニ於テ再犯罪ニ於ケル前科タルコトヲ得サルモノナリ

判旨(三)數名共謀シテ詐欺取罪ヲ犯サントスルニ當リ共謀者中ノ或ル者カ實行ノ所爲ヲ負擔シ他ノ者ハ之ニ干與セザリシ場合ト雖モ犯罪ノ實行ヨリ生スル全部ノ責任ハ共謀者全員ニ於テ之ヲ負擔

刑法ノ溯及○銀行員募集ニ關スル身元保證金ノ關取○詐欺取財ノ實行者○審判ニ係ル被告事 三五九



スルコトヲ要シ、實行者ヲシテ、獨リ其ノ責メニ任セシメ、他ノ者ヲシテ、其ノ責ヲ免カレシムルコトヲ得サルモノトス。何トナレハ、實行者ハ、要スルニ共謀者ノ全員ノ爲メニ共同ノ犯罪ヲ實行シタルモノニ過キスシテ、其ノ實行行爲ハ、共謀者全員ニ於テ之レヲ爲シタル者トモ、モ異ナル所ナキヲ以テナリ。故ニ本件ニ在テ、共謀者ノ一人カ實行ヲ爲サ、リシトスルモ、本件詐欺取財ノ犯人トシテ、刑罰ノ責任ヲ辭スルコトヲ得サルモノトス。

(參照) 證人ハ五ニ宣誓ヲ接ス可カラス、又供述前辯論ニ立會フ可カラス、既ニ供述ヲ爲シタル後ハ、公庭ニ留ル可シ、但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ、此限ニ在ラス(刑事訴訟法第九十三條)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 平塚茂 外四名

辯護人 川島雄一、信田英四、兒島一、指田玉、南由義、高木益太、南木益太、高木益太、南木益太

右詐欺取財被告事件ニ付明治三十八年六月十日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告茂助聖珠虎太及茂助辯護人信岡雄四郎ヨリ上告ヲ爲シ被告宇八卯之助ノ分ニ付テハ辯護人川島龜夫ヨリ上告ヲ爲シタリ。因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ。被告虎太上告趣意書第一點ハ本件被告中ノ自分ニ對シ輕罪ノ再犯者トシテ其初犯ハ出版條例違犯ノ外他ニ何等ノ犯罪ヲ犯シタル事實ナシ然ラハ第一審以來認メラレタル出版條例違犯ヲ以テ初犯ト認定セラレタルヤ明カナリ抑モ出版條例並ニ現行ノ出版法ノ規定ヲ見ルニ何レモ同法違犯者ニ

ハ刑法ノ再犯加重ノ例ニ依ラズト規定セラレ居レリ然ルニ被告ヲ再犯者トシテ一等ヲ加重セラレタルハ明カナ法律ヲ不當ニ適用セラレタル不法ノ裁判ナリト信スト云フニアリ。○依テ按スルニ刑法第三條第二項ニ「若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス」トアリ此規定ニヨルトキハ刑事裁判所ハ新法發布前ノ犯罪ニ對シテ擬律ヲ爲スニ當リテハ新舊ノ法ヲ比照シ新法輕キトキハ其效力ヲ既往ニ溯ラシメテ其發布以前ノ犯罪ニ適用セサルヘカラス是レ罪ノ有無刑罰ノ輕重ヲ定ムル法律規定ニ付キテ然ルノミナラス酌量減輕再犯加重其他被告ノ罪責ニ影響ヲ及ボスヘキ一切ノ法律規定ニ付キテモ亦然ラサルヲ得ス故ニ舊法ノ下ニ再犯加重ノ例ニ依ルヘキ犯罪ニ付キテ新法カ再犯加重ノ例ニ依ラサル旨ヲ規定シタルトキハ其犯罪ハ如何ナル場合ニ於テモ他ノ前科ニ對スル再犯罪タルコトヲ得サルト同時ニ再犯罪ニ於ケル前科タルコトヲ得ス而シテ此後ノ場合ニ於テハ其犯罪カ舊法ノ下ニ於テ確定判決ヲ經タル場合ニ於テモ尙ホ然リトス何トナレハ或犯罪カ再犯罪ノ前科タルト他ノ前科ニ對スル再犯罪タルヤハ其犯罪ノ性質如何ニ依リテ定マルモノニシテ確定判決ハ毫モ其性質ニ影響ヲ及ボスモノニアラサルヲ以テナリ而シテ本件ニ在テ被告ハ明治十五年中出版條例違反ノ所爲ニ依リ確定判決ヲ經タルコトハ原院ノ事實トシテ確定シタル所ニシテ該犯罪ニ付キテハ其當時再犯加重ノ例ニ依リタルコトハ明カナルモ現行法タル出版法ハ出版條例違反ノ所爲ニ對シテ再犯加重ノ例ヲ用キサルコトヲ規定スルヲ以テ被告カ明治十五年中ニ確定判決ヲ經タル前記ノ犯罪ハ現行法ノ下ニ於テ再犯罪ニ於ケル前科タルコトヲ得サルモノナリ左スレハ原院カ本件被告ノ犯罪ヲ再犯ナリトシテ其刑ヲ加重スルコト

刑法ノ溯及○銀行員募集ニ關スル身元保證金ノ騙取○詐欺取財ノ實行者○審判ニ係ル被告事 三六一 件ノ分離併合○證言ノ意義○刑罰第九十三條

ヲ得サル筋合ナルニ事茲ニ出テサリシハ失當ニシテ上告論旨ハ理由アリ原判決ハ破毀ヲ免レサルモノトス

第二點ハ詐欺取財罪ヲ構成スルニハ欺罔手段ハ必要欠クヘカラサルモノト信ス欺罔ノ手段ヲ欠クニ於テハ本罪ヲ構成セス然ラハ一箇ノ犯行ヲ詐欺取財罪ト斷定スルニハ如何ナル所爲カ欺罔手段タルヤヲ明示セサルヘカラス本件ニ於テ銀行員募集ノ新聞廣告カ手段ナルヤ將又募集ニ應シテ來行シ失レ々々銀行ヘ定期預金ヲ爲シ其定期預金證書ヲ應募員一旦受領シ然ル上ニ該預金證書ヲ身元保證トシテ銀行ヘ預ケ入レタル事實關係ナレハ預金ヲナサシメタル方法カ欺罔手段ナルヤ此點ニ對シ原院ハ判示シ居ラス結局理由不備ノ裁判タルヲ免レスト信スト云フニ在レトモ○原院ノ認メタル株式會社帝國勸業貯蓄銀行ノ取締役被告虎太ハ同銀行ノ株主タルヲ奇貨トシ被告茂助ト三名共謀シ名ヲ銀行員雇用ニ要スル身元保證金ニ籍リ志望者ヨリ金員ヲ騙取センコトヲ企テ二六新聞報知新聞等ニ銀行員ヲ募集スルニ付望ノ者ハ茂助方ニ來談スヘキ旨廣告シ其廣告ヲ信シテ銀行員タランコトヲ申出テタル本件ノ被害者ヨリ身元保證金トシテ金員ヲ騙取シタルモノニシテ原判文ニ名ヲ銀行員ノ雇用ニ要スル身元保證金ニ籍リ志望者ヨリ金員ヲ騙取セント企テトアルヲ以テ被告等ハ銀行ノ爲メニ正當ニ銀行員ヲ雇入ルルモノニアラサルニ拘ハラズ正當ノ權限アルモノ如ク裝ヒ新聞廣告ヲ利用シテ志望者ヲ欺罔シ其腦裡ニ被告ニ於テ正當ニ銀行員ノ雇入ヲ爲スモノナリトノ誤信ヲ生セシメ身元保證金ナリト稱シテ本件ノ志望者ヨリ金員ヲ騙取シタルモノナルコトハ原判文上甚タ明白ニシテ銀行員ヲ募集スル旨ノ虛偽ノ廣告ヲ新聞紙ニ掲載シ身元保證金ナ

五五

リト稱シテ金員ノ寄託ヲ要求シタル所爲ハ相共ニ被告等カ本件詐欺取財罪ノ欺罔手段ヲ構成スルモノナルハ毫モ疑ヲ容レズ故ニ原院判決ハ本件詐欺取財罪ノ成立ニ要スル欺罔手段ノ明示ニ於テ欠クル所ナク既ニ判文上其手段ノ明示アル以上ハ刑事訴訟法第二百三條ニ規定スル事實上ノ理由明示ノ要求ヲ充タシタルモノニシテ判文ニ掲ケタル被告ノ所爲中何レヲ以テ本件詐欺取財ノ欺罔手段トナスヤヲ特ニ判示セサレハトテ之ヲ以テ理由不備ノ違法アリト云フコトヲ得ス故ニ本論旨ハ理由ナシ

第三點ハ法律ハ犯意ノミヲ罰セサルヲ原則トス單ニ云々セント共謀シト云フニ止マルトキハ其共謀ナル用語ノ意義ハ互ニ意思ノ疏通セルコトヲ意味スルニ過キヌ未タ以テ有形ノ行爲アリシモノト斷定ス可ラサルナリ原判決ニハ被告宇八ハ茂助虎太ト共謀シトアレトモ宇八ニ於テ如何ナル行爲ヲ爲シタルカヲ表示セス而シテ茂助カ募集ヲ爲シテ自ラ保證金ヲ交付セシメタル事實上ノ認定アルノミ故ニ原判決ハ宇八ニ對シテハ犯罪行爲ヲ表示セス且ツ意思ノミヲ罰シタル不法アルナリト云フニアレトモ○數名共謀シテ詐欺取財罪ヲ犯サントスルニ當リ共謀者中ノ或者ニ於テ實行ノ所爲ヲ負擔シ他ノ者ハ之レニ干與セサリシ場合ト雖モ犯罪ノ實行ヨリ生スル全部ノ責任ハ共謀者全員ニ於テ之レヲ負擔スルコトヲ要シ實行者ヲシテ獨リ其責ニ任セシメ他ノ者ヲシテ其責ヲ免カレシムルコトヲ得サルモノトス何トナレハ實行者ハ要スルニ共謀者全員ノ爲メニ共同ノ犯罪ヲ實行シタルモノニ過キヌシテ其實行行爲ハ共謀者全員ニ於テ之レヲ爲シタルト毫モ異ナル所ナキヲ以テナリ故ニ本件ニ在テ共謀者ノ一タル被告宇八カ自カラ實行行爲ヲ爲サリシトスルモ本

刑法ノ湖及○銀行員募集ニ關スル身元保證金ノ騙取○詐欺取財ノ實行者○審判ニ係ル被告事 三六三  
件ノ分離併合○證言ノ憲法○刑訴第九十三條

件詐欺取財ノ犯人トシテ刑罰ノ責任ヲ辭スルコトヲ得サルモノトス

其第五點ハ訴訟法ノ原則トシテ各事件ハ各別ニ審理ヲ爲スヘキモノニシテ若シ審理ノ必要上他ノ事件ト併合センニハ必ス之レカ決定ヲ爲スヘキナリ然ルニ被告宇八外二名ノ事件ハ何等關係ナキ別件タル被告清重外三名ノ事件ト決定ヲ用ヒスシテ併合審理ヲ爲シタルハ訴訟手續ニ違背シタル不法アルモノナリト云フニ在リ○依テ按スルニ被告事件ノ分離併合ニ關シテ我刑事訴訟法中ニ何等特別ノ規定ナク從テ立法ノ主旨カ絕對ニ之ヲ禁止スルニアリト解釋スルコトヲ得サルノミナラス被告事件ノ分離併合ヲ爲スニアラサレハ著シク審理ノ進行ヲ妨害シ容易ニ審理ノ終局ヲ見ルコト能ハサル場合往々ニシテ之レアルヲ以テ裁判所カ各場合ノ情況ニ從ヒ被告事件ノ分離併合ヲ爲スハ裁判事務ノ進行上必要ニシテ欠クヘカラサル事ニシテ之レヲ禁スヘキ理由アルヲ見ス而シテ如何ナル場合ニ於テ分離ヲナシ如何ナル場合ニ於テ併合ヲ爲スヤハ各場合ニ於ケル被告事件ノ性質ニ依リテ定マルヘキモノニシテ此點ニ付キ法律ニ特定ノ規定ナキ以上ハ被告事件ノ分離併合ハ審理ノ進行ヲ目的トスル公判裁判所機宜ノ處分ニ屬シ公判裁判所ハ自由ナル心證ヲ以テ事件ノ分離併合ノ必要ナルヤ否ヤヲ判斷スルノ職權ヲ有スルモノト謂ハサルヲ得ス且ツ事件ノ分離併合ニ付テハ法律ニ何等特別ノ規定ナキヲ以テ裁判所カ被告事件ノ分離併合ヲ爲スニ當リテハ公判廷ニ於テ其意思ヲ發表スルノミヲ以テ足り決定ノ形式ヲ以テ之レカ宣告ヲ爲スノ必要ナシ故ニ本論旨モ亦理由ナシ

第七點ハ參考人ノ供述ヲ證言トシテ證據ニ供シタルハ違法ナリ(御院三十八年(レ)第七七六號事

件ノ判旨) 本案森山德右衛門ハ豫審ニ於テ參考人トシテ訊問ヲ受ケタルコトハ其調書ノ記載ニヨリテ明確ナリ然ルニ原判決ハ右森山德右衛門ノ調書ノ記載ヲ掲ケ「是等ノ證言ニ依ルモ」ト判示シ之ヲ適法ナル證言トシテ本件斷罪ノ資料ニ供シタルヤ明カナリ則チ原判決ハ證據ニ關スル法則ニ違背シタル不法アリト云フニアレトモ○證言ナル語ハ事實ヲ認定スルノ證據トナルヘキ人ノ供述ヲ意味スルモノニシテ參考人ノ供述モ亦タ此意義ニ於テ證言ノ一種ニ屬スルモノナリ何トナレハ參考人ノ供述ハ證人ノ供述ト等シク證據トシテ之ヲ斷罪ノ資料ニ供スルコトヲ得ルハ當院ノ判例ニ依リ認メラル、所ニシテ此場合ニ於ケル證據材料ハ證人供述ノ場合ト等シク人ノ供述ナル以上ハ之ヲ稱シテ證言ナリト謂フハ毫モ妨ケナキヲ以テナリ故ニ證言ノ語ハ必スシモ證人ノ供述ニ固有ナルモノニアラスシテ參考人ノ供述モ亦其中ニ包含セラル、筋合ナルヲ以テ原院カ參考人森山德右衛門ノ供述ヲ他ノ證人ノ供述ト總括シテ「是等ノ證言ニ依ルモ」ト説示シタルハ相當ナリ但シ參考人ノ供述ヲ證人ノ供述トシテ證據ニ援用スルコトハ當院判例ノ禁スル所ナリト雖モ證言ナル語ハ證人ト參考人トニ共通ナル語ナルコト前段説明ノ如クナル以上ハ原院ヲ森山德右衛門ノ供述ニ付スルニ他ノ證人供述ト等シク「證言」ナル名稱ヲ以テシタルハトテ之ヲ以テ同人ノ供述ヲ證人供述トシテ證據ニ援用シタルモノト斷スルヲ得ス故ニ本論旨モ亦タ理由ナシ

追加上告趣意書(五)ハ原院ハ本件辯護人高野金重ヲ在廷證人トシテ訊問スル旨ノ決定ヲナシ直チニ之レカ訊問ヲ終了シタルトモ本來辯護人ナル者ハ其被告人ノ傍ニ在リテ檢事及裁判所ノ行爲ニ付不當ノ請求又ハ不當ノ審理ヲナスコトナキヤヲ注意スルノ職責ヲ有スルモノナレハ之レニ證人

刑法ノ溯及○銀行員募集ニ關スル身元保證金ノ騙取○詐欺取財ノ實行者○審判ニ係ル被告事 三五  
件ノ分離併合○證言ノ意義○刑訴第九十三條

トシテ供述スヘキ事ヲ命スルトキハ辯護權ニ制限ヲ加フルノ嫌アルヲ以テ辯護人ニ向テ被告事件ノ證言ヲ要ムルハ不當ナルコト明白ナルノミナラス刑事訴訟法第九十三條ニ依レハ供述前辯論ニ立會ヒタルモノハ證人トシテ取調フルコトヲ許サ、ルヲ以テ高野辯護士ノ如ク常ニ本件審判ニ參與シタルモノヲ證人トナスノ違法ナルヲ論テ俟タヌ故ニ原院カ之ヲ證人トシテ訊問スル決定ヲ下シ其決定ニ基キ同人ヲ證人トシテ取調ヘタルハ共ニ違法ノ舉措ニシテ如斯違法ノ審判ニ基ク原判決ハ破毀スヘキモノナリト云フニ在レトモ○證據調ニ付キ遵守スヘキヤ訴訟手續ノ違背ハ其證據調ヲ無効ナラシムルニ止マリ公判手續ヲ根本ヨリ無効ナラシムルモノニハアラサルヲ以テ本件高野辯護人ノ訊問カ所論ノ如ク違法ナリト假定スルモ之レヨリ生スル唯一ノ結果ハ同辯護人ノ爲シタル供述ハ證據トシテ採用シ得ヘカラサルモノトナルニ止マリ公判ノ審理ヲ無効ニ歸セシムルモノニアラス隨テ原院カ其ノ供述ヲ證據トシテ採用セサル以上ハ原判決ニ何等違法ノ點ナキノミナラス高野辯護人ノ訊問ハ夫レ自體ニ於テ毫モ違法ノモノニアラス何トナレハ被告人ノ辯護人ヲ證人トシテ訊問スルコトハ法ノ禁セサル所ナルヲ以テ原院カ本件被告ノ辯護人タル高野辯護士ヲ在廷證人トシテ訊問シタルハトテ之ヲ以テ違法ナリト謂フコトヲ得ス又刑事訴訟法第九十三條ハ證人カ供述前ニ辯論ニ立會フコトヲ禁スルモ同條ハ要スルニ一ノ訓示の規定ニ過キササルヲ以テ此手續ノ違背ハ證人供述ヲ根本ヨリ無効ナラシムルモノニアラスシテ其供述ハ尙ホ斷罪ノ資料トシテ其效力ヲ失フコトナケレハナリ故ニ何レノ點ヨリ見ルモ本論旨ハ理由ナシ

私印盜用私印公文書約束手形偽造行使詐欺取財事件

明治三十八年(れ)第九八五號  
明治三十八年九月二十八日判決 (棄却)

判決要旨

一 被告人ニ示シテ其ノ辯解ヲ求メサル證據ヲ採テ斷罪ノ資料ニ供シタル判決ハ破毀ヲ免カレス

說明

刑事訴訟法ハ判事ニ採證ノ自由ヲ許スト雖モ之ヲ斷罪ノ資料ニ供スルニ當テハ被告ニ示シテ辯解ヲ求ムルコトヲ要ス(刑事訴訟法第九十八條)之レ被告ノ辯護權ヲ尊重スル所以ノ道ナレハナリ案スルニ凡ソ證據ハ犯罪ヲ斷スル唯一ノ標準ニシテ犯罪ノ有無若クハ其ノ輕重一ニ證據ニ由テ決セラル左レハ證據ニ付キ被告ノ辯解ヲ求ムルコトハ被告カ辯護權ヲ行使スルニ付キ最必要ノコトニシテ被告辯護權ノ行使ハ之レアルカ爲ニ始メテ其ノ完キコトヲ得ヘシ若シ判事ニシテ被告辯護權ヲ斷スルニ至テハ被告ノ辯護權ハ所謂有名無實ニ終ラントス是レ本判旨ノ存スル所由タルナリ

第一審 大阪地方裁判所 被告 人 齋 藤 次 郎  
第二審 廣島控訴院 辯護 人 高 木 益 太  
外一名 岡 崎 正 也

右兩名ニ對スル私印盜用私印公文書約束手形偽造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十八年七月六日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告兩名ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

被告松治郎辯護人高木益太郎辯明書ノ一ハ原判決證據說明ノ部ヲ閱スルニ「豫第三十二號、同第三十三號ノ書狀ノ筆跡及ヒ同第一號裏書ノ北島忠四郎ノ記名ハ同人カ自ラ第一回豫審調書ニ記載シタル氏名ト筆意全然相違シ且裏書名下ノ印影ハ同人カ豫審調書（第一回）ニ押捺シタルモノト明カニ相違セリ」ト掲記シアリテ則チ北島忠四郎第一回豫審調書ニ記載セラレタル同人自署ノ筆跡及ヒ同調書ニ押捺セラレタル同人ノ印影ト本件判斷ノ資料ニ供セラレタルコト明カナリ然ルニ右豫審調書ハ唯其供述記載ヲ原院公庭ニ於テ被告ニ之レヲ讀聞カセタルノミ前記判斷ノ資料トナリタル同人自署ノ筆跡及其押捺ニ係ル印影ハ之レヲ被告ニ示シテ意見辯解ヲ求メタル事跡ヲ存セス果シテ然ラハ原判決ハ公判ニ示シテ辯解ヲ開カテ爾證據ヲ採用シタル失意アルモノナリト云フニ在リ○因テ原院公判始末書ヲ查スルニ北島忠四郎第一回豫審調書ニ記載セラレタル同人ノ署名及ヒ同調書ニ押捺セラレタル同人ノ印影ヲ被告ニ示シ辯解ヲ求メタル事跡ノ見ルヘキモノナシ然ルニ原院カ豫第三十二號、同第三十三號ノ書狀ノ筆跡及同第一號裏書ノ北島忠四郎ノ記名カ該署名ノ筆意ト相違シ又裏書名下ノ印影カ該調書ニ押捺シタル印影ト相違セル形跡ヲ探テ斷罪ノ資料ト爲シタルハ刑事訴訟法第九十八條ノ規定ヲ無視シタル不法ノ判決ニシテ上告ハ其理由アリ已ニ此點ニ於テ被告松治郎ニ對スル原判決ノ全部ヲ破毀スル以上ハ同被告及ヒ其辯護人ヨリ提出

三六

●酒精及酒精含有料飲稅法並酒造稅法違犯事件

明治三十八年（元）第八七六號（棄却）  
明治三十八年九月二十九日判決

判決要旨

一、酒量ヲ増加スルカ爲メ精酒ニ水ヲ混スルハ法令ノ禁スル所ニアラスト雖モ水以外ニ他ノ物料ヲ混和シタルトキハ其ノ混和シタル物料ノ性質分量ノ如何ニ拘ラス又々精酒タルノ性質ヲ變シタルト否トナ不問一種ノ酒精ヲ含有スル飲料ヲ製造シタルモノニ外ナラス

一、酒精及酒精含有飲料稅法ハ酒精含有ノ飲料ニ付キ之レカ原料ヲ限定セサルカ故ニ精酒ニ他ノ酒類又ハ物料ヲ混和スルト將々酒精含有飲料ニ酒類又ハ他ノ物料ヲ混和スルヲ論セス苟モ免許ヲ受ケスシテ其ノ混和ニ依リ增量スル一種ノ酒精含有飲料ヲ製造シタルトキハ之ヲ處罰スルノ法意ナリ

酒精含有飲料ノ意義○稅務署長ノ職權

三六九

トス

一、稅務監督局長ノ行ヘキ職權ハ明治卅五年勅令第二百五十五號ヲ以テ之ヲ稅務署長ニ附與シタルカ故ニ從テ稅務署長ハ犯則事件ニ付キ告發書ヲ作成スルノ權能アルモノトス

(參照) 間接國稅犯則者處分法中左ノ通改正ス第七條第十三條第十四條第十七條第十九條中「稅務管理局長」ヲ「稅務署長」ニ改ム(明治三十七年法律第十一號第三條)

稅務監督局長ハ犯則事件ノ調査ニ依リ犯則ノ心證ヲ得タルトキハ其ノ理由ヲ明示シ罰金若ハ科料ニ相當スル金額、沒收品ニ相當スル物品、徵收品ニ相當スル金額及書類送達違差押物件ノ運搬、保管ニ要シタル費用ヲ指定ノ場所ニ納付スヘキ旨ヲ通告スヘシ但シ犯則者通告ノ旨ヲ履行スル實力ナシト認ムルトキハ直ニ告發スヘシ(間接國稅犯則者處分法第十四條)

第一審 福岡地方裁判所久留米支部 第二審 府島控訴院  
被告人 中川 保藏 辯護人 江井 木卓藏

右酒精及酒精含有飲料稅法並ニ酒造稅法違犯被告事件ニ付明治三十八年六月九日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル本案判決及ヒ公訴不受理ノ申立却下ノ判決ヲ不法トシ被告ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
三家重三郎ノ起訴狀ニハ犯罪ノ掲記ヲ略シアレトモ云々該起訴狀ニ添附セル告發書其他ノ書類ニ徴スレハ酒精及酒精含有飲料稅法違犯事件トノ掲記ハ云々即チ本件ヲモ起訴シタルモノナルヲ明

亮ナルニ付本件ハ適法ノ起訴アルモノト謂ハサルヲ得スト判示セラレタレトモ三家重三郎ノ起訴狀ニハ被告人ノ頭書ニ酒精及酒精含有飲料稅法並酒造稅法違犯ト記シ其次項ニ右ニ對スル頭書事件起訴候條被告人呼出有之度候也ト而已アリテ告發書又ハ其餘ノ書類ヲ起訴狀ニ添附スル旨ノ記載ナク並ニ右告發書其他ノ書類ニ因リ犯罪事實ヲ見得ルヘキ文詞ノ記載モ無之ヲ以テ犯罪ノ内容即チ事實ハ全然之ヲ掲ケサル起訴狀ト云ハサルヲ得サルニ付犯罪事實ヲ舉ケサル起訴狀ハ不適法ナルコト論ヲ埃タサルニ依リ本件公訴ハ當然受理スヘカラサルモノナルニ原院ノ判決茲ニ出テス公訴不受理ノ申立ヲ却下セラレタルハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタル不當ノ判決ナリト云フニ在レトモ○檢事ノ起訴狀中單ニ被告人氏名ノ冒頭ニ罪名ノミヲ掲ケ別ニ告發書其他ノ書類ヲ添附スル旨ノ記載ナキモ現ニ右告發書其他ノ書類ニシテ起訴狀ニ添附セラレ且是等書類ニ記スル事實關係ニ依リ起訴ニ係ル犯罪事實ヲ推定スルニ足ルヲ以テ不適法ノ起訴ト云フヲ得ス而シテ本件稅務署長ノ告發書及ヒ其附屬書類ノ檢事三家重三郎ノ起訴狀ニ添附セラレタル事跡ハ記錄ニ徴シ明カニシテ又其告發書ニハ第一好味液一罐(即九升)ニ水八石ノ割ヲ以テ總計十九罐(即一石七斗一升)ニ水百五十二石ヲ加ヘ云々酒精含有飲料六百五十八石二斗二升ヲ密造シタリ云々トノ記載アリテ起訴狀ニ掲クル被告人ノ犯罪事實ヲ確定シ得ヘケレハ斯ル告發書上告第二點ハ本件ニ於テ被告カ酒精含有ノ飲料ヲ製造シタリトスルニハ其原料タル清酒カ好味液ト混和ノ結果清酒ノ性質ヲ變シ一種ノ酒精含有飲料ノ製出セラレタル事實アルコトヲ要ス從テ清酒十二對三ノ割合ヲ以テ好味液ヲ混和シタル結果清酒ノ成分ヲ變シタルヤ否ヤハ本件重要ノ争點ナリトス然ルニ原判決カ清

酒精含有飲料ノ意義○稅務署長ノ職權

酒ノ性質及ヒ被告ノ行爲ニ依リ清酒ノ性質ヲ變シタルヤ否ヤヲ審究セシテ漫然酒精含有飲料稅法ヲ適用處斷シタルハ理由不備ノ不法アルモノト信スト云フニ在レトモ○酒精及酒精含有飲料稅法ハ混成酒稅法ヲ改正シ新タニ名稱ヲ付シタルモノニ外ナラザレバ要ハ二種酒類ノ飲料ヲ擬製シ以テ脫稅ヲ圖ルノ行爲ヲ豫防スルニアルヤ言フ要セズ而シテ同法ニハ酒精ヲ含有スル飲料ニ付キ其製造ノ原料ヲ限定セサルカ故ニ之ヲ汎博ニ解釋シ所謂酒精ヲ含有スル飲料トハ酒精ニ他ノ酒類又ハ物品ヲ混和シテ製造スルト將タ酒精ヲ含有スル飲料ニ酒類又ハ他ノ物品ヲ混和シテ製造スルトト問ハス苟モ免許ヲ受ケズシテ右混和ノ結果飲料タル效用ヲ有シ且ツ増量シタル一種ノ酒精ヲ含有スル飲料ヲ製造シタルトキハ之ヲ處罰スルノ法意ナリト解セサルヲ得ス而シテ原判決ノ認メタル事實ニ依レハ本件ハ被告ニ於テ免許ヲ受ケス食鹽苦土鹽類等ノ濃厚液ニ少量ノ硝石及糖蜜ヲ加ヘタル好味液ト稱スルモノ十九罐ヲ每一罐(九升入)ニ付水凡八石ノ割合ニテ稀釋シ之ヲ清酒十二對シ凡三ノ割合ニ相混和シ一石ニ付原量百分中純酒精二十箇未滿ヲ含有スル飲料六百五十八石二斗二升ヲ製造シタルモノナルヲ以テ被告カ清酒以外ノ酒精ヲ含有スル一種ノ飲料ヲ製造シタルコト自ラ明ナレハ之レヲ以テ酒精含有飲料稅法第十五條ニ問擬シタル原判決ハ相當ニシテ其理由ニ不備ノ廉アルコトナシ故ニ本論旨ハ理由ナシ

第六點ハ原裁判所ニ於テ辯護人花井卓藏ハ本件ノ起訴狀ニハ犯罪事實ノ記載ナク從テ適法ノ起訴ナキモノナリトシテ公訴不受理ノ申立ヲ爲スヤ原裁判所ハ起訴狀ハ不適式ナルモ該起訴狀ニ添附セル告發書其他ノ書類ニ徵スレハ本件ヲ起訴シタルモノナルコト明亮ナリトノ理由ニ依リ公訴不

受理ノ申立ヲ却下セラレタリ然リ而シテ本件告發書ヲ見ルニ明治三十七年三月二十八日附久留米稅務署長稅務官澁谷鐵太郎ノ作成ニ係リ間接國稅犯則者處分法第十四條但書ニ依リ告發スル旨ノ記載アリ然レトモ同法條ニ依リ直チニ裁判所ニ告發ノ權限ヲ有スル者ハ稅務管理局長ノミニシテ稅務署長ハ同法第十三條第二項ノ場合ノ外告發ノ權限ヲ有セス(明治三十七年三月三十一日法律第十一號改正セラレ同日以後ハ稅務署長ヨリ告發スヘキコト、爲レリ)左レハ本件ノ告發ハ權限ヲ有セサル官吏ノ爲シタルモノニ屬シ何等ノ效力ヲ有セス既ニ該告發書ニシテ無效ノモノナリトセハ其告發書ニ結合スルニ起訴狀ヲ以テ起訴ノ事實ヲ記載アリトシテ本件公訴ヲ受理シ審理判決シタルハ不法ナリト云ハサルヘカラス況ヤ本件ノ犯罪ハ稅務官吏ノ告發ヲ以テ起訴ノ要件ト爲スモノナルニ於テオヤ告發書ノ無效ハ全然起訴ナキノ結果ヲ生スルヤ殆ト疑ヲ容レサル所トス要之本件ハ結局適式ノ起訴ナキモノナルニ原裁判所カ此點ヲ觀過シ審理判決シタルハ刑事訴訟法ノ一大法則ニ違背セル不法アルモノト確信スト云フニ在リ○因テ按スルニ間接國稅犯則者處分法第十四條中稅務管理局長トアルハ明治三十七年三月三十一日法律第十一號ヲ以テ稅務署長ト改正セラレタルニ依リ同法律第十一號實施以前ハ稅務署長ハ間接國稅犯則者處分法第十四條ニ規定スラ告發書ヲ作成スルコトヲ得サルカ如クナレトモ明治三十五年勅令第二百五十五號ニ依リ稅務管理局長ノ行フヘキ職權ハ之ヲ稅務署長ニ與ヘラレタルヲ以テ稅務署長ハ稅務管理局長ト同シク犯罪事件ニ付告發書ヲ作成スルノ權能アリシモノト云ハサルヲ得ス故ニ明治三十七年三月二十七日久留米稅務署長澁谷鐵太郎カ本件ニ付作成シタル告發書ハ適法ノモノナルヲ以テ之ヲ起訴ノ要件ニ

酒精含有飲料ノ處罰○稅務署長ノ職權

判例彙報第六拾卷刑事判例

供スルモ所論ノ如キ不法ノ裁判ニアラス

行政判例彙報第十六卷刑事判例 大尾



行政法規

- 縣會議員常選ノ效力ニ關スル異議ノ訴……………一
  - 住民ノ意義
  - 本館ヲ有シ且ツ家族ヲ住居セシメル事實ハ其ノ地ノ住民タルヲ得ルヤ
- 縣參事會ノ裁決取消ノ訴……………八
  - 縣長ノ恐アルヲ理由トシテ郡會議員ノ選舉會ニ選舉人ノ選舉ヲ許ササルハ違法ナルヤ
- 不當告示及不當決定取消請求ノ訴……………二二
  - 公例ニ附セラレタル者トハ如何(町村制第九條)
  - 選舉ノ際トハ如何(府縣制第二十六條)
- 懲戒處分取消ノ訴……………二七
  - 村長ニ對スル懲戒處分
  - 學事通則第五條第二項ノ適用
- 營業稅課稅標準額決定不服ノ訴……………三〇
  - 甲銀行カ乙銀行ニ合併シタルトキ其ノ合併以前ノ甲銀行ノ營業稅ハ乙銀行ニ於テ負擔スヘキモノナルヤ
- 不當裁決取消請求ノ訴……………三三

- 被選舉人ヲ確證シ得サル投票
- 縣參事會ノ裁決取消ノ訴……………三六
  - 單ニ名ノミナシテ投票(氏名記セス)ノ效力
- 市會議員常選效力ニ關スル訴……………四三
  - 市制第十八條第二項ノ意義
  - 確定名簿ニ登錄セラレサル者ハ被選舉權ヲ有セザルカ
- 郡會議員失職決定不當裁決取消ノ訴……………四七
  - 町村ノ區長ハ郡制第六條第八項ニ依リ郡會議員トナルコトヲ得サルカ
- 市會議員選舉效力及取消ニ關スル訴……………五〇
  - 得點同數ニシテ年長者ノ故ヲ以テ其一方ヲ當選者ト定ムル場合ニ於テ一票ノ無數投票アリ其ノ何レノ得點ヨリ除外スルモノナルヤ不分明ナルトキ其ノ選舉ノ效力如何
- 漁業免許取消請求ノ訴……………五三
  - 漁業免許ノ取消ヲ目的トシ行政訴訟ヲ提起シ其ノ進行中政府ニ於テ其ノ免許ヲ取消シタルトキ訴訟ハ如何ニ落着スヘキヤ
- 縣會議員選舉ニ對スル異議ノ訴……………五五

○府縣制第六條第九項ノ請負ノ意義  
○官廳ニ對シ電流ヲ供給スル電燈會社ノ役員ハ政府ノ爲メニ請負ヲ爲ス法人ノ役員ニ該當スルヤ  
●縣會議員當選無効請求ノ訴……………六三  
○府縣ノ爲メニ爲シタル請負關係終了ノ時期  
●不當裁決取消ノ訴……………六五  
○町長ノ職務懈怠ニ基テ郡長ノ解職處分○町長カ書記ヲシテ郡會議員選舉人名簿ヲ調製スルニ當リ多數ノ有權者ヲ遺脱シ又々無資格者ヲ記入シ爲メニ選舉ヲ無効ナラシメタルトキハ解職ノ事由トナスコトヲ得ヘキヤ  
●公立學校職員退隱料請求ニ關スル違法處分救正ノ訴……………六六  
○退隱料請求ニ基テ教育文官ノ在官年數ノ通算  
●定置漁業不許可處分取消ノ訴……………六九  
○北海道支廳長ノ處分ニ對スル行政訴訟ノ提起  
●公民權停止不法裁決取消請求ノ訴……………七一  
○町村制第八條第三項及ヒ第四項ノ適用  
○行政訴訟及ヒ訴訟ノ性質  
●郡會議決取消處分ノ訴……………七六  
○郡會議長ノ採決權  
○郡會議長ハ自己ノ意見ヲ採テ之ヲ採決ノ數ニ加フルコトヲ得ルヤ  
●所得金額決定不服ノ訴……………八三

○稅務署長ノ所得金額決定ニ對スル訴願ノ方法  
●酒造過稅ノ不當裁決取消ノ訴……………八四  
○酒類製造主カ任意ニ釀造着手ノ時期ヲ遲延シタル爲メ確定ノ石數ヲ釀造スルコトヲ得ザルトキハ酒造稅法第五條第二項違反其ノ他已ムテ得ザル事故ニ該當スルヤ  
●縣會議員當選效力ノ異議決定ニ關スル訴……………八六  
○府縣制第六條第八項ノ一ヶ月ノ期間ノ算定  
○訴願期限ノ起算點  
●縣參事會裁決取消請求ノ訴……………九三  
○投票ニ記載スヘキ被選舉人ノ氏名  
○郡制第十六條第三號ノ適用  
●收用審査會違法裁決ニ對スル訴……………一〇〇  
○土地收用者ハ土地ノ收用ニ付キ其地上ノ借家人ニ協議ヲ遂ケルコトヲ要スルヤ  
○借家人ノ權利  
○土地收用法第五條第二項ノ適用  
●營業稅附加村稅賦課取消ノ訴……………一〇七  
○鐵道會社カ自己ノ鐵道營業ニ用ユルカ爲メ機械ノ製作所ヲ設ケタルトキハ其ノ所在地ノ町村ハ會社ノ營業場トシテ之レニ賦課スルコトヲ得ヘキヤ  
○營業場トハ如何  
●縣會議員失職決定取消ノ件……………一二四  
○納稅義務發生ノ時期

●石炭鑛採掘權取消處分取消ノ訴……………一二七  
○城壁ノ周圍三百間以內ハ採掘作業ヲナスコトヲ得ス  
○採掘權特許ノ後其地區ニ城壁ヲ建設スルニ至リタル時ハ行政廳ハ曩キニ與ヘタル採掘權ヲ無條件ニテ取消スコトヲ得ルヤ  
●縣會議員當選無効決定取消請求ノ訴……………一二九  
○請負ノ意義(府縣制第六條第九項)  
○農工銀行カ其ノ府縣ノ金融事務ヲ引受ケタルハ一種ノ請負ナルカ  
○府縣ノ爲メ請負ヲ爲ス銀行ノ監督役ハ(府縣制第六條第九項)ノ請負ヲ爲ス法人ノ役員ニ該當スルカ  
●清酒造石稅賦課ニ係ル不當處分取消ノ訴……………一三〇  
○造石稅免除ノ要件  
●郡會議員當選ニ關スル縣參事會裁決取消ノ訴……………一三七  
○投票ノ他事記入  
○郡會議員被選舉權ニ關スル訴……………一三三  
○郡會議員ノ被選舉資格  
○納稅義務ノ發生時期  
●村稅滯納處分取消ノ訴……………一三七  
○町村長ハ其ノ書記ヲシテ村稅滯納處分ノ爲メニスル財產差押ヲナサシムルコトヲ得ルヤ  
●縣會議員當選無効決定取消請求ノ訴ニ於

ケル妨訴抗辯……………一三九  
○行政訴訟ニ關スル訴訟參加  
●不當處分取消請求ノ訴ニ對スル妨訴抗辯……………一四二  
○水利組合費滯納處分ヲ違法トスル行政訴訟ノ提起ノ方法  
●國有林地木下戻ノ訴ニ於ケル故障申立……………一四三  
○行政訴訟ニ對スル故障ノ申立  
●保安林編入ニ關スル不當處分取消ノ訴ニ於ケル中間裁判ノ申立……………一四四  
○森林法第十八條ノ適用  
●町村行政ニ關スル不當裁決取消ノ訴……………一四九  
○町村特別稅增加ノ要件  
○非常特別稅法第二十二條ノ適用  
●不當課稅及督促並滯納處分取消請求ノ訴……………一五五  
○買主ノ求メニ依リ清酒ト燒酎トサ一器ニ混和シテ販賣シタルハ酒類含有飲料ノ製造ニアラサルカ  
●郡參事會ノ不當裁決取消ノ訴……………一五六  
○町長ノ解職  
●村稅滯納處分取消請求ノ訴……………一五九  
○村稅滯納者ニ對スル國稅滯納處分法ノ適用  
●違法選舉取消ノ訴……………一六一  
○郡制第六條第九項郡ノ爲メニ請負ヲ爲ス者ノ意義

司法判例彙報第十六卷

法學博士 江 本 衷 編纂

行政判例

判決要旨

●縣會議員當選ノ效力ニ關スル異議ノ訴 明治三十七年第四百三十三號 (請求不立) 明治三十七年十一月十四日宣告

- 一、戸主カ町村内ニ本籍ヲ有シ且ツ家族ヲ住居セシムルモ現ニ自ラ其ノ地ニ定住セサルトキハ其ノ町村内ノ住民ナリト云フヲ得ス
- 一、町村内ノ住民ニアラサル者ハ其ノ府縣ノ府縣會議員被選舉ノ資格ナキモノトス

住民ノ意義

●扶助料請求ノ訴	一六三	●不當裁決取消請求ノ訴	一九〇
○軍人死亡ノ當時兵籍ニ登記セラレタル者ニアラス死後兵籍ヲ訂正シタル結果登記セラレタル者ハ軍人恩給法ニ依リ扶助料ヲ請求スルコトヲ得ルヤ		○町村吏員ノ賠償責任	
○所得金高審査決定ニ對スル不服ノ訴	一六三	○宿直ノ任アル町村吏員カ疾病ノ爲メ他ノ吏員ニ宿直ノ交代ヲ求メス使丁小使ニ代動キシメ其ノ代動中役場ノ金品カ盜難ニ罹リタルトキハ右宿直ノ任アル町村吏員ハ之カ損害ヲ賠償スルノ義務アリヤ	
○所得額決定ノ變更		●郡會議員選舉ノ效力ニ關スル訴	一九〇
●縣稅戶數割賦課ニ關スル訴	一六七	○郡長カ郡會議員ノ選舉日時ヲ定メタル後町村長カ之ト異ナル同選舉ノ日時ヲ定メ之ヲ各選舉人ニ通知シ又ハ選舉場ニ揭示シタルトキハ其ノ效力如何	
○戶數割ノ負擔者		●組合會議決取消ノ訴	一九六
○滞在ノ爲メニ他人ノ家ニ寄寓スル者ハ戶數割ヲ負擔スル義務アリヤ		○町村組合ノ性質	
●村會議員選舉效力ニ關スル裁判取消ノ訴	一七〇	○町村組合ハ其ノ組合規程ニ特別ノ定ナキトキハ一般町村制ノ規定ニ準據スルコトヲ得ルヤ	
○前任議員ノ在職中ニ後任議員ヲ選舉シタルトキハ其選舉ノ效力如何		●村會議員選舉ノ效力ニ關スル訴	二〇二
●營業課稅標準決定取消ノ訴	一七三	○選舉取消ノ效力	
○金錢貸附業(營業稅法第三條)トハ如何		●山林下戻請求ノ訴	二〇五
○親族、故舊、小作人等特殊ノ關係ヲ有スル者ニ對シ金錢貸附ヲ爲スハ金錢貸附業者ナリト云フヲ得ルヤ		○寺院カ一定ノ土地ヲ管領シタル事實ハ以テ其ノ地盤ノ寺院有ナルコトヲ斷スルニ足ルカ	
●不當裁決取消並漁業權名義書換請求ノ訴	一八三	●不當處分取消官有地ヲ民有地ニ引直ノ訴	二〇八
○漁業權ノ讓受ト其ノ名義書換トノ關係		○宮内大臣ニ對シ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ヘキヤ	
●所得金額ノ決定ニ對スル訴	一八四		
○所得額算定ノ標準			
●村稅賦課令狀取消ノ訴	一八七		
○租稅滯納處分ヲ受ケタル者ノ當選資格			

司法判例彙報第十六卷索引行政之部 終

凡<sup>○</sup>ッ<sup>○</sup>町<sup>○</sup>村<sup>○</sup>内<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>住<sup>○</sup>民<sup>○</sup>タ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>現<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>町<sup>○</sup>村<sup>○</sup>内<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>定<sup>○</sup>住<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>タル<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>事<sup>○</sup>實<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>コ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>必<sup>○</sup>要<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>按<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>凡<sup>○</sup>ソ<sup>○</sup>法<sup>○</sup>律<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>町<sup>○</sup>村<sup>○</sup>住<sup>○</sup>民<sup>○</sup>タ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>コ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>要<sup>○</sup>素<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>是<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>諸<sup>○</sup>種<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>公<sup>○</sup>權<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>附<sup>○</sup>與<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>以<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>自<sup>○</sup>治<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>公<sup>○</sup>務<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>參<sup>○</sup>與<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>コ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>許<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>所<sup>○</sup>以<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>他<sup>○</sup>ナ<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>凡<sup>○</sup>ソ<sup>○</sup>自<sup>○</sup>治<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>關<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>公<sup>○</sup>務<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>執<sup>○</sup>行<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>民<sup>○</sup>情<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>通<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>土<sup>○</sup>地<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>愛<sup>○</sup>撫<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>公<sup>○</sup>共<sup>○</sup>心<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>寄<sup>○</sup>頼<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ン<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>完<sup>○</sup>然<sup>○</sup>ナル<sup>○</sup>目<sup>○</sup>的<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>達<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>コ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>能<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>而<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>民<sup>○</sup>情<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>通<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>土<sup>○</sup>地<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>愛<sup>○</sup>撫<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>觀<sup>○</sup>念<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>現<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>地<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>定<sup>○</sup>住<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>民<sup>○</sup>情<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>同<sup>○</sup>化<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ン<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>之<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>發<sup>○</sup>揮<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>コ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>能<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>サ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ヘ<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>是<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>住<sup>○</sup>民<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>文<sup>○</sup>字<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>前<sup>○</sup>顯<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>意<sup>○</sup>義<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>解<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>所<sup>○</sup>以<sup>○</sup>ナ<sup>○</sup>リ

原 告 中 野 十 郎 外 二 三 名  
 訴 訟 代 理 人 一 信 岡 雄 四 郎  
 群 馬 縣 選 舉 事 會  
 小 泉 村 十 六 番 地 平 民 金 物 商

右當事者間ニ於ケル縣會議員當選ノ效力ニ關スル異議ノ訴審理ヲ遂クル處  
 原告請求ノ要旨ハ明治三十六年九月二十五日邑樂郡各町村ニ於テ群馬縣會議員ノ選舉投票ヲ行ヒ  
 同月二十六日邑樂郡館林町ニ於テ選舉會ヲ開キ邑樂郡長小出雅雄選舉長トナリ千本銀一郎外五名  
 立會人トナリテ開票ニ着手シ候補者新井佐五郎同荒川高三郎同増田甚平及ヒ疑義ノ投票ハ之ヲ朗  
 讀シ候補者新井要太郎ヲ選舉シタル投票ハ一モ之ヲ朗讀セス開票終了ノ後其ノ報告ニ依レハ投票

總數二千一百九十五點内六百五十點新井佐五郎四百七十七點荒川高三郎四百四十四點増田甚平疑義五  
 十三點ニシテ新井要太郎ノ得票五百七十四點ナリシ而シテ小出郡長ハ佐五郎高三郎甚平ヲ各當選  
 者ト定メ新井要太郎ハ邑樂郡小泉町ニ於テ公民權ヲ有セサルヲ以テ群馬縣會議員ノ被選舉權無キ  
 者ト認メ同人ノ得票ハ盡ク無効ノモノト決定シタリ小出雅雄ノ決定ハ事實ノ取調ヲ爲サス行政法  
 規ノ解釋ヲ誤リ行政裁判所群馬縣廳等ノ行政先例ヲ顧ミサル不法ノ處分ナレハ原告等ハ明治三十  
 六年十月五日之レカ當選ノ效力ニ關シ群馬縣知事ニ對シ異議ノ申立ヲ爲シタル處被告ハ新井要太  
 郎ハ小泉町ニ於テ公民タル資格ヲ缺キ町會議員ノ選舉權ヲ有セサルモノニシテ府縣制第六條第  
 二項ニ依リ縣會議員ノ被選資格ナキモノト斷定シ邑樂郡長ノ決定ハ取消スヘキモノニ非スト決定  
 セリ抑モ戶別割ヲ納メサルモ地租割及ヒ地價割反別割等ヲ納メ町村ノ負擔ヲ分任セハ町村公民タ  
 ル資格ニ缺クル所無キハ行政裁判所ノ判例三十三年十一月一號同  
年五月七日宣告及ヒ群馬縣通牒等ノ認ムル所ニシテ新井  
 要太郎ハ明治三十年七月七日戶主ト爲リ一戶ヲ構ヘ家族九名ヲ同居セシメ町村ノ負擔ヲ分任セル  
 カ故ニ町村制第七條ニ該當スル小泉町ノ公民ナレハ同法第八條ニヨリ町村ノ選舉ニ參與スルノ權  
 利アリ町會議員ノ選舉人名簿並ヒニ縣會議員選舉人名簿ニ登錄セラレサルニ關ハラス異議ノ申立  
 ヲ爲サ、リシ事實アレハトテ法律上與ヘラレタル公權ヲ喪失セラル、モノニ非ラス隨テ府縣制第  
 六條ニヨリ縣會議員ノ被選舉權ヲ有スルモノナリ且ツ被選舉人名簿ハ選舉權行使ノ條件ニ止マリ  
 選舉權被選舉權得喪ノ原因ト爲ルモノニアラサルコトハ行政裁判所判例明治三十年六月十號  
三十四年七月五日宣告ノ認ム  
 ル所ニシテ又吾邦行政手續上ノ慣例ト爲レリ被告ノ決定理由ハ行政法規ノ解釋ヲ誤マリ行政先例

住民ノ意義